長野原町埋蔵文化財調査報告　第37集

長野原地区遺跡群（２）

水源地域整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第３集

長野原城跡
東貝瀬Ⅲ遺跡
嶋木Ⅰ遺跡（３次～５次）

2019

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

長野原地区遺跡群（２）
水源地域整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第３集
二〇一九年
群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

長野原町埋蔵文化財調査報告　第 37 集

長野原地区遺跡群（２）

水源地域整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第３集

長野原城跡
東貝瀬Ⅲ遺跡
嶋木Ⅰ遺跡（３次～５次）

2019

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

序　　文

長野原町内には、縄文時代中期後半の拠点集落である長野原一本松遺跡・横壁中村遺跡や天明３年の浅間山の大爆発により発生した泥流被災状況を伝える東宮遺跡・小林家屋敷跡に代表されるように、多数の貴重な遺跡の存在が知られています。

教育委員会では、文化財保護事業の一環として、町の貴重な文化遺産である遺跡を保護するとともに、失われていく遺跡の記録保存に努めています。

今回報告する長野原地区遺跡群（２）は、町道長野原線道路整備事業に伴う調査であります。天明３年に発生した泥流が吾妻川から白砂川（須川）を逆流して嶋木地区に被害を及ぼしたことを示す貴重な資料を得ることができました。

本書が町民の皆様をはじめより多くの方々に活用され、郷土長野原の歩んできた道のりを知る一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたって各方面から多大なるご指導・ご協力をいただき厚く御礼申し上げます。

平成31年３月

長野原町教育委員会

教育長　市　村　隆　宏

例　言

1．本書は、群馬県吾妻郡長野原町大字長野原に所在する長野原城跡・嶋木Ⅰ遺跡・東貝瀬Ⅲ遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は町道長野原線道路整備事業に伴う事前調査として、長野原町の委託を受けた長野原町教育委員会が実施した。

3．発掘調査から調査報告書作成に至るまでの調査事業費は、水源地域対策特別措置法第12条による負担金並びに道路橋梁費補助金が充てられた。

4．調査は発掘調査を平成24年10月１日から平成26年８月７日迄、整理調査及び報告書作成を平成25年２月７日から平成31年３月28日迄の期間実施した。

5．本遺跡の出土遺物ならびに図面・写真は全て長野原町教育委員会が保管している。

6．本書は富田孝彦が編集・執筆した。各作業分担は以下の通りである。

編集・執筆：富田　　遺構・遺物写真撮影：富田　　遺物実測・トレース：柿本・佐藤

図版および写真図版作成：向出・富田

7．本書中の遺跡名は調査が数次にわたっている場合はそれぞれを識別するために遺跡名の最後にローマ数字を表記してある。同一遺跡内の別地点と解釈していただきたい。

例）嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ　（遺跡名）（第３次）

8．調査において以下の項目の一部を委託した。

表土掘削・埋め戻し：東光建設株式会社

測量・空中写真撮影：（株）測　研

炭化材樹種同定：（株）パレオ・ラボ

9．本書における陶磁器は黒澤照弘氏（群馬県教育委員会）に御教示いただいた。

10．発掘調査、整理調査及び報告書作成にあたり、次の方々、団体から御指導・御協力を賜った。（五十音順・敬称略）

相京建史・麻生敏隆・飯島静男・飯田陽一・飯森康広・石田　真・井上慎也・小野和之・小川卓也・神谷佳明

川田　強・黒澤照弘・齋藤利昭・桜岡正信・佐々木由香・篠原正洋・神道正広・鈴木徳雄・関　俊明・中沢　悟

藤巻幸男・松田　哲・向出博之・山口逸弘・吉田智哉

群馬県教育委員会・（公益財団法人）群馬県埋蔵文化財調査事業団・（株）測研・（株）パレオ・ラボ・（株）歴史の杜

11．調査組織は次の通りである。

調査主体　長野原町教育委員会

平成24年４月～平成26年３月

調査組織　教育長　　黒岩　文夫

教育課長　　市村　　敏

社会教育 GL 白石　光男

〃　副 GL 富田　孝彦

調査参加者　佐藤久美子・柿本六美・坂井春栄・向出治恵

平成26年４月～５月

調査組織　教育長　　黒岩　文夫（～平成26年４月29日）

教育課長　　市村　　敏（平成26年４月30日～平成26年５月31日　教育長職務代行者兼務）

教育課補佐　白石　光男（平成26年４月１日から組織改編で教育課補佐）

文化財係長　富田　孝彦（平成26年４月１日から組織改編で文化財係長）

調査参加者　柿本六美・坂井春栄・向出治恵

平成26年６月～平成27年３月

調査組織　教育課長　矢野今朝治（平成26年６月１日～平成27年３月31日　教育長職務代行者兼務）
教育課補佐　白石　光男
文化財係長　富田　孝彦
調査参加者　柿本六美・坂井春栄・向出治恵

平成27年４月～

調査組織　教育長　市村　隆宏
教育課長　矢野今朝治（～平成30年３月31日）
佐藤　　忍（平成30年４月１日～）
教育課補佐　富田　孝彦（文化財係長兼務　平成30年４月１日～　文化財保護対策室長）
文化財係　市川　勇気（社会教育係兼務　～平成30年12月31日）
細川　剛史（地域おこし協力隊　平成29年４月１日～）
調査参加者　柿本六美・坂井春栄・向出治恵

凡　例

1．本書で使用した地形図は1:2500「長野原都市計画図」（長野原町1994、2007更新）、1:25000「長野原」（国土地理院1997）である。

2．本書で使用する測量図の座標は、全て世界測地系（日本測地系2000平面直角座標Ⅸ系）を用いている。また挿図中に使用した方位は座標北を表している。

3．挿図の縮尺については下記の通りであり、各挿図中に示してある。

遺　構：建物跡・石積・・・1/60　　畑断面・・・1/30　　平坦面・・・1/60　　株痕・・・1/40
溝状遺構・復旧溝・・・1/100　　道路状遺構・テラス・・・1/120

遺　物：復元陶磁器・・・1/4　　土器片・陶磁器片・・・・1/3
鉄製品・・・1/2

4．軽石の略号については以下の通りである。As-A：浅間A軽石　As-YPk：浅間－草津黄褐色軽石

5．挿図に図示した遺物は、観察表にその内容を記してある。観察表における復元土器の法量は左側から器高、中央が口径、右側が底径を表し、計測数値は推定値を含む。（　　）内の数値は現存値、＜　＞内の数値は復元値を表す。

6．土器の色調に関しては、「新版標準土色帖1995年後期版」（編・著小山正忠・竹原秀雄、監修農林水産省農林水産技術会議事務局、色票監修財団法人日本色彩研究所）の色名を参考にした。観察表において外面／内面の順で記した。

7．挿図中のスクリーントーン・記号は以下の通りである。

遺　構・土層図

泥流堆積物

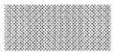
軽石・株痕

石（断面）

地　山

▲ 土層確認位置

遺　物


黒色処理

施　釉

鉄　泥

● 土器・陶磁器　△ 石器　□ 鉄製品

※土器における欠損部に関しては点描で表現している。
断面塗りつぶしは陶磁器を示している。

目　次

序　文
例　言
凡　例
目　次

序　説
第１章　調査概要…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　試掘確認調査・立会調査…… 2
　第３節　調査の方法…… 21
第２章　遺跡の立地と環境 …… 22
　第１節　遺跡の位置…… 22
　第２節　周辺の遺跡…… 22

第１編　長野原城跡
第１章　既往の調査…… 39
第２章　調査の経過…… 40
第３章　基本層序…… 40
第４章　検出された遺構と遺物…… 41

第２編　東貝瀬Ⅲ遺跡
第１章　既往の調査…… 47
第２章　調査の経過…… 47
第３章　基本層序…… 48
第４章　検出された遺構と遺物…… 49

第３編　嶋木Ⅰ遺跡（３次～５次）
第１章　既往の調査…… 57
第２章　第３次調査…… 57
　第１節　調査の経過…… 57
　第２節　基本層序…… 59
　第３節　検出された遺構と遺物…… 61
第３章　第４次調査…… 76
　第１節　調査の経過…… 76
　第２節　基本層序…… 79
　第３節　検出された遺構と遺物…… 79
第４章　第５次調査…… 89
　第１節　調査の経過…… 89

第２節　基本層序…… 89
第３節　検出された遺構と遺物…… 91

第４編　自然科学分析

第１章　東貝瀬Ⅲ遺跡出土遺物の自然科学分析…… 110
第２章　嶋木Ⅰ遺跡出土遺物の自然科学分析…… 118

写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　「長野原町壬申地券地引絵図」部分…… 1
第２図　町道長野原線整備計画範囲と
　トレンチ配置図（1/2,500）…… 3
第３図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲトレンチ配置図（1/1,000）・
　土層図（1/20）…… 4
第４図　長野原城跡Ⅱトレンチ配置図（1/1,000）・
　土層図（1/20）…… 5
第５図　周辺地形図（1/600）…… 6
第６図　東貝瀬Ⅲ遺跡トレンチ配置図（1/500）・
　土層図（1/20）…… 7
第７図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ①トレンチ配置図（1/600）…… 9
第８図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ①土層図（1/20・1/120）…… 10
第９図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ②トレンチ配置図（1/500）・
　土層図（1/20）…… 11
第10図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ③トレンチ配置図（1/500）…… 12
第11図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ③土層図（1/100・1/40）…… 13
第12図　東貝瀬Ⅲ遺跡Ⅱトレンチ配置図（1/300）・
　土層図（1/40）…… 14
第13図　東貝瀬Ⅲ遺跡Ⅱ出土遺物実測図（1/3）…… 15
第14図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴトレンチ配置図（1/400）…… 16
第15図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ土層図（1/40）…… 17
第16図　嶋木Ⅱ遺跡トレンチ配置図（1/500）・
　土層図（1/20）…… 18
第17図　嶋木地区岩盤地形トレンチ配置図（1/500）…… 19
第18図　嶋木地区岩盤地形立面図（1/300）…… 20
第19図　嶋木地区岩盤地形断面図（1/300）…… 20
第20図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1/30,000）…… 25
第21図　遺跡周辺の河岸段丘分布図（1/30,000）…… 26
第22図　長野原城跡調査地点位置図（1/2,150）…… 39
第23図　基本土層図（1/20）…… 41
第24図　長野原城跡調査区全体図（1/100）…… 42
第25図　畑跡断面図（1/30）…… 43
第26図　株痕・工具痕実測図（1/40）…… 43
第27図　出土遺物実測図（1/3）…… 43
第28図　事業団調査地点との合成図（1/200）…… 44
第29図　東貝瀬Ⅲ遺跡調査地点位置図（1/5,000）…… 47
第30図　基本土層図（1/20）…… 48
第31図　東貝瀬Ⅲ遺跡調査区全体図（1/240）…… 50
第32図　畑跡断面図（1/40）…… 51
第33図　平坦面実測図（1/60）…… 51
第34図　株痕実測図（1/40）…… 52
第35図　出土遺物実測図（1/3）…… 53
第36図　トレンチ配置図（1/240）・土層図（1/20）…… 54
第37図　嶋木Ⅰ遺跡調査地点位置図（1/2,500）…… 58
第38図　基本土層図（1/20）…… 59
第39図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ調査区全体図（1/360）…… 60
第40図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ出土遺物実測図①（1/2）…… 62
第41図　ガーター橋脚台石積平面図・立面図・
　断面図（1/60）…… 63
第42図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ１・２区全体図（1/200）…… 66
第43図　１・２区畑跡断面図（1/30）…… 67
第44図　１・２区平坦面実測図（1/60）…… 67
第45図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ３区全体図（1/220）…… 68
第46図　３区畑跡断面図（1/30）…… 70
第47図　３区平坦面実測図（1/60）…… 72
第48図　１号建物跡実測図（1/60）…… 73
第49図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ出土遺物実測図②（1/4・1/3）…… 74
第50図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲトレンチ配置図（1/400）…… 75
第51図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ調査区全体図（1/360）…… 77
第52図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ１区全体図（1/150）…… 78
第53図　トレンチ断面図（1/40）…… 80
第54図　１区畑跡断面図（1/30）…… 81
第55図　１区平坦面実測図（1/60）…… 81
第56図　１区株痕実測図（1/40）…… 81
第57図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ２区全体図（1/150）…… 82
第58図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ３・４区全体図（1/150）…… 83
第59図　２～４区畑跡断面図（1/30）…… 84
第60図　２～４区平坦面実測図（1/60）…… 84
第61図　２～４区株痕実測図（1/40）…… 85
第62図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ出土遺物実測図（1/4）…… 87

第63図　船木Ⅰ遺跡Ⅳ5区全体図（1/120）…… 88
第64図　サブトレ断面図（1/40）…… 88
第65図　船木Ⅰ遺跡Ⅴ調査区全体図（1/360）…… 90
第66図　基本土層図（1/20）…… 91
第67図　船木Ⅰ遺跡Ⅴ調査区全体図①（1/200）…… 92
第68図　船木Ⅰ遺跡Ⅴ調査区全体図②（1/200）…… 93
第69図　泥流玄端付近断面図（1/40）…… 94
第70図　畑跡断面図（1/30）…… 96
第71図　平坦面実測図①（1/60）…… 98
第72図　平坦面実測図②（1/60）…… 100
第73図　株痕実測図（1/40）…… 101
第74図　1号ヤックラ・
　1号・2号溝実測図（1/100・1/40）…… 104
第75図　4号ヤックラ・3号・4号溝・
　1～6号復旧溝実測図（1/100・1/40）…… 105
第76図　船木Ⅰ遺跡Ⅴ出土遺物実測図（1/4・1/3）…… 107
第77図　東貝瀬Ⅲ遺跡から産出した花粉化石…… 111
第78図　東貝瀬Ⅲ遺跡出土作物遺体の植物珪酸体　…… 113
第79図　東貝瀬Ⅲ遺跡出土作物遺体と
　現生イネ科植物の葉身　…… 114
第80図　東貝瀬Ⅲ遺跡から出土した炭化種実…… 117
第81図　船木Ⅰ遺跡における花粉分布図…… 119
第82図　船木Ⅰ遺跡(分析No.2)から産出した花粉化石　… 120
第83図　船木Ⅰ遺跡の畑跡出土作物遺存体の
　プラント・オパール　…… 122
第84図　船木Ⅰ遺跡の畑跡出土作物遺存体の
　プラント・オパール分布図　…… 123
第85図　船木Ⅰ遺跡から出土した大型植物遺体…… 124

挿表目次

第1表　町道長野原線道路整備事業に伴う
　試掘確認調査及び立会調査一覧　…… 2
第2表　東貝瀬Ⅲ遺跡Ⅱ出土遺物観察表　…… 15
第3表　周辺の遺跡　…… 27
第4表　長野原城跡既往調査一覧　…… 40
第5表　長野原城跡出土遺物観察表　…… 43
第6表　長野原城跡畑跡一覧　…… 43
第7表　東貝瀬Ⅲ遺跡既往調査一覧　…… 47
第8表　東貝瀬Ⅲ遺跡出土遺物観察表　…… 53
第9表　東貝瀬Ⅲ遺跡畑跡・平坦面一覧　…… 53
第10表　船木Ⅰ遺跡既往調査一覧　…… 57
第11表　船木Ⅰ遺跡Ⅲ出土遺物観察表①　…… 62
第12表　船木Ⅰ遺跡Ⅲ畑跡・平坦面一覧　…… 74
第13表　船木Ⅰ遺跡Ⅲ出土遺物観察表②　…… 75
第14表　船木Ⅰ遺跡Ⅳ出土遺物観察表　…… 87
第15表　船木Ⅰ遺跡Ⅳ畑跡・平坦面一覧…… 87
第16表　船木Ⅰ遺跡Ⅴ出土遺物観察表　…… 107
第17表　船木Ⅰ遺跡Ⅴ畑跡・平坦面一覧…… 107
第18表　産出花粉胞子一覧　…… 110
第19表　東貝瀬Ⅲ遺跡畑跡出土作物遺体の植物珪酸体　… 112
第20表　東貝瀬Ⅲ遺跡から出土した炭化種実(土壌試料)… 116
第21表　東貝瀬Ⅲ遺跡から出土した炭化種実
　(水洗済み試料)　…… 116
第22表　分析試料一覧…… 118
第23表　産出花粉胞子一覧…… 119
第24表　試料1gあたりのプラント・オパール個数　…… 121
第25表　船木Ⅰ遺跡から出土した大型植物遺体調査…… 124

図版目次

図版1　試掘確認調査（船木Ⅰ遺跡Ⅲ）
1．船木Ⅰ遺跡Ⅲ（北西から）
2．1号トレンチ（南東から）
3．1号トレンチ土層（西から）
4．1号トレンチ畝サク検出状況（南から）
5．1号トレンチ埋戻し状況（南東から）
図版2　試掘確認調査（船木Ⅰ遺跡Ⅲ・長野原城跡Ⅱ）
1．2号トレンチ（南東から）
2．2号トレンチ土層（西から）
3．2号トレンチ畝サク検出状況（南から）
4．2号トレンチ埋戻し状況（北西から）
5．長野原城跡Ⅱ1号トレンチ（北から）
図版3　試掘確認調査（長野原城跡Ⅱ）
1．1号トレンチ土層（東から）
2．2号トレンチ（北から）
3．2号トレンチ土層（東から）
4．3号トレンチ（北から）
5．3号トレンチ土層（東から）
6．4号トレンチ（西から）
7．4号トレンチ土層（南から）
図版4　試掘確認調査（東貝瀬Ⅲ遺跡）
1．東貝瀬Ⅲ遺跡（北から）
2．1号トレンチ（北西から）
3．1号トレンチ土層（南西から）
4．2号トレンチ（南東から）
5．2号トレンチ土層（南西から）
図版5　試掘確認調査（船木Ⅰ遺跡Ⅳ①）
1．船木Ⅰ遺跡Ⅳ①（北東から）

2．調査区南側（北から）
3．調査区北側（南から）
4．1号トレンチ（南東から）
5．1号トレンチ土層1（北東から）
図版6　試掘確認調査（嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ①）
1．1号トレンチ土層2（北西から）
2．2号トレンチ（南西から）
3．2号トレンチ土層（南東から）
4．3号トレンチ土層（南西から）
5．4号トレンチ（北東から）
6．4号トレンチ土層（北東から）
7．5号トレンチ（南東から）
8．5号トレンチ土層1（北東から）
図版7　試掘確認調査（嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ①）
1．5号トレンチ土層2（北東から）
2．5号トレンチ土層3（北東から）
3．6号トレンチ（南東から）
4．6号トレンチ土層（南西から）
5．7号トレンチ（南東から）
6．7号トレンチ土層（南西から）
7．8号トレンチ（南東から）
8．8号トレンチ土層（南西から）
図版8　試掘確認調査（嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ①・②）
1．9号トレンチ（南東から）
2．9号トレンチ土層（南東から）
3．嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ②（北から）
4．10号トレンチ（東から）
5．10号トレンチ土層（東から）
図版9　試掘確認調査（嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ②・③）
1．11号トレンチ（北東から）
2．11号トレンチ土層（北西から）
3．嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ③＜12・13号トレンチ＞（南西から）
4．12号トレンチ（南東から）
5．12号トレンチ土層1（南西から）
図版10　試掘確認調査（嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ③）
1．12号トレンチ土層2＜泥流天端＞（南西から）
2．12号トレンチ土層3（南西から）
3．13号トレンチ（南東から）
4．13号トレンチ土層（南西から）
5．14・15号トレンチ（南西から）
6．14号トレンチ（南東から）
7．14号トレンチ土層（南西から）
8．15号トレンチ（南東から）
図版11　試掘確認調査（嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ③・東貝瀬Ⅲ遺跡Ⅱ）
1．15号トレンチ土層（北東から）
2．調査風景（西から）
3．東貝瀬Ⅲ遺跡Ⅱ＜1・2号トレンチ近景＞（南東から）
4．3号トレンチ近景（北から）
5．1号トレンチ（南東から）
図版12　試掘確認調査（東貝瀬Ⅲ遺跡Ⅱ）
1．1号トレンチ土層（南東から）
2．2号トレンチ（南東から）
3．2号トレンチ土層（南西から）
4．3号トレンチ（北西から）
5．3号トレンチ土層（北西から）
6．出土遺物（1/2）
7．東貝瀬Ⅲ遺跡出土遺物（1/2）
図版13　試掘確認調査（嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ）
1．嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ＜1・2号トレンチ＞（北東から）
2．嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ＜3・4号トレンチ＞（南から）
図版14　試掘確認調査（嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ）
1．1号トレンチ（北東から）
2．1号トレンチ土層（北東から）
3．2号トレンチ（南東から）
4．2号トレンチ土層（北東から）
5．3号トレンチ（南東から）
6．3号トレンチ土層（北東から）
7．4号トレンチ（東から）
8．4号トレンチ土層（北から）
図版15　試掘確認調査（嶋木Ⅱ遺跡）
1．嶋木Ⅱ遺跡Ⅴ＜1・2号トレンチ＞（南から）
2．嶋木Ⅱ遺跡Ⅴ＜3・4号トレンチ＞（北から）
図版16　試掘確認調査（嶋木Ⅱ遺跡）
1．1号トレンチ（南から）
2．2号トレンチ（南から）
3．3号トレンチ（南から）
4．4号トレンチ（北から）
5．4号トレンチ土層（北から）
6．測量風景（南から）
7．調査地点から長野原城方面を望む
8．調査地点から対岸（王城山方面）を望む
図版17　試掘確認調査（嶋木地区岩陰地形）
1．嶋木地区岩陰地形（北東から）
2．調査前風景（南東から）
3．堆積土層全景（東から）
4．堆積土層近景（東から）
5．岩陰部（北から）
図版18　長野原城跡
1．調査区全景（南西から）
2．調査区近景（南東から）
図版19　長野原城跡
1．1-2号畑サブトレ①（南から）
2．1-2号畑サブトレ②（南西から）
3．遺物出土状況（第27図2）
4．1-2号畑株痕検出状況（南東から）
5．泥流によるキズ痕①（南東から）
6．泥流によるキズ痕②（南東から）
7．作業風景（南東から）
8．出土遺物（1/1）
図版20　東貝瀬Ⅲ遺跡
1．調査区南側全景①（南西から）
2．調査区南側全景②（北東から）
図版21　東貝瀬Ⅲ遺跡
1．調査区北側全景①（南東から）
2．調査区北側全景②（北西から）
図版22　東貝瀬Ⅲ遺跡
1．1-1号畑サブトレ①＜ａａ'＞（北西から）
2．1-1号畑サブトレ②＜ｂｂ'＞（南東から）
3．1-1号平坦面＜検出状況＞（南西から）
4．1-1号平坦面＜軽石除去＞（南西から）
5．1-1号畑株痕検出状況（南西から）
6．1-2号畑サブトレ＜ｃｃ'＞（南東から）
7．1-2号平坦面（南西から）
8．1-3号畑泥流・砂堆積状況＜ｄｄ'＞（北西から）
図版23　東貝瀬Ⅲ遺跡
1．1-3号平坦面（南西から）

2．1-3 号畑作物遺存体・株痕検出状況（南西から）
3．1-3 号畑作物遺存体①
4．1-3 号畑作物遺存体②
5．調査区南側トレンチ（北西から）
6．調査区南側トレンチ土層（南西から）
7．調査区北側トレンチ（南東から）
8．調査区北側トレンチ土層（南西から）
図版 24　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ
1．調査区遠景①（東上から）
2．調査区遠景②（南上から）
図版 25　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ
1．調査区全景（南真上から）
図版 26　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ
1．1 区全景＜ガーター橋・石積・天明泥流・1-1・1-2 号畑＞（東から）
2．石積全景（南から）
図版 27　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ
1．1 区からガーター橋を望む
2．石積立面①（東から）
3．石積立面②（東から）
4．石積立面③（東から）
5．石積立面④（東から）
6．石積立面⑤（東から）
7．石積遺物出土状況①＜第 40 図 1＞
8．石積遺物出土状況②＜第 40 図 2＞
図版 28　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ
1．1-1・1-2 号畑（南から）
2．1-1 号畑サブトレ＜ａａ'＞（北西から）
3．1-1 号平坦面（南西から）
4．1-2 号畑サブトレ＜ｂｂ'＞（東から）
5．1-2 号平坦面（南から）
図版 29　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ
1．2 区全景＜ 1-2・1-3 号畑＞（南東から）
2．1-2 号畑（南から）
3．1-2 号畑サブトレ＜ｃｃ'＞（東から）
4．1-3 号畑（南から）
5．1-3 号畑サブトレ＜ｄｄ'＞（北西から）
図版 30　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ
1．3 区全景（西から）
2．1 号建物跡（南から）
図版 31　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ
1．1 号建物跡検出状況（南から）
2．1 号建物跡掘り方（南から）
3．1 号建物跡東西セクション（南から）
4．1 号建物跡南北セクション①（西から）
5．1 号建物跡南北セクション②（南西から）
図版 32　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ
1．1 号建物跡石垣（南から）
2．1 号建物跡 P1（南から）
3．2-1 号畑サブトレ①＜ｆｆ'＞（東から）
4．2-1 号畑サブトレ②＜ｇｇ'＞（東から）
5．2-2 号畑サブトレ①＜ｈｈ'＞（東から）
6．2-2 号畑サブトレ②＜ｉｉ'＞（東から）
7．2-2 号平坦面＜検出状況＞（南から）
8．2-2 号平坦面＜軽石除去＞（南から）
図版 33　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ
1．2-3 号畑サブトレ＜ｊｊ'＞（東から）
2．2-3 号平坦面＜検出状況＞（南から）
3．2-3 号平坦面＜軽石除去＞（南から）
4．2-4 号畑サブトレ＜ｋｋ'＞（南から）
5．2-4 号旧平坦面＜検出状況＞（南から）
6．2-4 号旧平坦面＜軽石除去＞（南から）
7．2-5 号畑サブトレ＜ｌｌ'＞（東から）
8．2-5 号平坦面＜軽石除去＞（南から）
図版 34　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ
1．2-6 号畑サブトレ＜ｍｍ'＞（東から）
2．2-7 号畑サブトレ＜ｎｎ'＞（東から）
3．2-7 号平坦面（南から）
4．遺物出土状況①＜第 49 図Ⅰ＞
5．遺物出土状況②＜第 49 図５＞
6．遺物出土状況③＜第 49 図７＞
7．遺物出土状況④＜第 49 図８＞
8．遺物出土状況⑤＜第 49 図 18＞
図版 35　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ
1．嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ出土遺物①・②
図版 36　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ
1．1 区全景①（北東から）
2．1 区全景②（南西から）
図版 37　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ
1．3-1 号畑サブトレ＜ａａ'＞（南西から）
2．3-2 号畑サブトレ＜ｂｂ'＞（南西から）
3．3-2 号平坦面＜検出状況＞（南東から）
4．3-2 号平坦面＜泥流除去＞（南東から）
5．3-2 号平坦面＜軽石除去＞（南東から）
6．3-3 号畑サブトレ＜ｃｃ'＞（南西から）
7．3-4 号畑サブトレ＜ｄｄ'＞（南西から）
8．3-4 号畑株痕検出状況（南東から）
図版 38　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ
1．3-4 号平坦面＜検出状況＞（南東から）
2．3-4 号平坦面＜泥流除去＞（南東から）
3．3-4 号平坦面＜軽石除去＞（南東から）
4．泥流によるキズ痕（南東から）
5．遺物出土状況①
6．遺物出土状況②
7．基本土層（南から）
8．作業風景（南西から）
図版 39　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ
1．2～4 区全景①（南西から）
図版 40　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ
1．2～4 区全景②（北東から）
図版 41　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ
1．2 区全景＜ 3-5 号畑＞（南西から）
2．3-5 号畑南側（南東から）
3．3-5 号畑北側（南東から）
4．3-5 号畑畝サク断面＜ｅｅ'＞（南西から）
5．3-5 号平坦面＜検出状況＞（南東から）
図版 42　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ
1．3-5 号平坦面＜軽石除去＞（南東から）
2．3-5 号畑株痕検出状況（南東から）
3．遺物出土状況
4．2区 3-6 号畑南側（南東から）
5．3区全景＜ 3-6 号畑＞（南東から）
図版 43　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ
1．3-6 号畑北側（南東から）
2．3-6 号畑サブトレ＜ｇｇ'＞（南西から）
3．3-6 号畑株痕検出状況（南東から）
4．遺物出土状況

5．4区全景＜3-7 号畑＞（南西から）
図版 44　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ
1．3-7 号畑北側（南東から）
2．3-7 号畑南側（東から）
3．3-7 号畑サブトレ＜ｈｈ'＞（南西から）
4．3-7 号平坦面（南西から）
5．3-7 号畑株痕（南西から）
6．作業風景（南西から）
7．測量風景（南西から）
8．出土遺物（1/2）
図版 45　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ
1．5区全景①（南西から）
2．5区全景②（北西から）
3．テラス上段サブトレ（西から）
4．1号道サブトレ（西から）
5．泥流立ち上がり（北から）
図版 46　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ
1．南側調査区全景①（南西から）
2．南側調査区全景②（北東から）
図版 47　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ
1．3-8・3-9 号畑・1号ヤックラ・1号溝・2号溝（北東から）
2．3-8 号畑・1号溝（北西から）
3．3-8 号畑サブトレ＜ａａ'＞（北東から）
4．3-8 号平坦面（南東から）
5．泥流天端Ⅰ＜ＡＡ'＞（北東から）
図版 48　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ
1．3-9・3-10 号畑（南東から）
2．3-9 号畑サブトレ＜ｂｂ'＞（北東から）
3．3-10 号畑サブトレ＜ｃｃ'＞（北東から）
4．3-10 号平坦面（南東から）
5．3-10 号畑株痕検出状況（南東から）
図版 49　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ
1．2号溝（南から）
2．2号溝断面（東から）
3．泥流天端2（南東から）
4．泥流天端3・2号ヤックラ（南から）
5．旧平坦面Ⅰ＜検出状況＞（南東から）
6．旧平坦面Ⅰ＜軽石除去＞（南東から）
7．旧平坦面2（南東から）
図版 50　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ
1．3-9～3-12 号畑・1号・2号ヤックラ（南から）
2．3-11 号畑サブトレ＜ｄｄ'＞（南西から）
3．3-12 号畑サブトレ＜ｅｅ'＞（南西から）
4．3-11 号平坦面・2号ヤックラ（南東から）
5．3-12 号平坦面＜検出状況＞（南東から）
図版 51　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ
1．3-12 号平坦面＜軽石除去＞（南東から）
2．3-12 号畑株痕検出状況（南東から）
3．泥流天端3（南東から）
4．泥流天端4＜ＢＢ'＞（南西から）
5．旧平坦面3（南東から）
6．泥流によるキズ痕（南東から）
7．作業風景①（南東から）
8．作業風景②（南西から）
図版 52　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ
1．北側調査区全景①（南西から）
2．北側調査区全景②（北東から）
図版 53　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ
1．3-13・3-14 号畑・3号ヤックラ（北東から）
2．3-13 号畑サブトレ＜ｇｇ'＞（南西から）
3．3-14 号畑サブトレ＜ｆｆ'＞（南西から）
4．3-14 号平坦面（南東から）
5．3-14 号畑株痕検出状況（南東から）
図版 54　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ
1．泥流によるキズ痕1（南東から）
2．泥流によるキズ痕1＜検出状況＞（南東から）
3．泥流によるキズ痕2（南東から）
4．泥流によるキズ痕2＜検出状況＞（南東から）
図版 55　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ
1．3-15・3-16 号畑（南東から）
2．1・2号復旧溝・旧平坦面4（南東から）
3．2号復旧溝検出状況（南東から）
4．3-16 号平坦面（南東から）
5．泥流天端5＜ＣＣ'＞（北東から）
図版 56　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ
1．3-17・3-18 号畑・4号ヤックラ・4号溝（南から）
2．3-17 号畑サブトレ＜ｈｈ'＞（南から）
3．3-18 号平坦面（南東から）
4．3-17 号畑株痕検出状況（東から）
5．3-17・3-18 号畑・5号・6号復旧溝（西から）
図版 57　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ
1．4号ヤックラ・3号溝・4号溝・復旧溝調査風景（南から）
2．3号溝（南から）
3．4号溝（南から）
4．3号復旧溝（東から）
5．3号復旧溝堆積土層（西から）
図版 58　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ
1．4号復旧溝（東から）
2．5号復旧溝（東から）
3．6号復旧溝（東から）
4．作業風景（北から）
5．出土遺物（1/2）

序　説

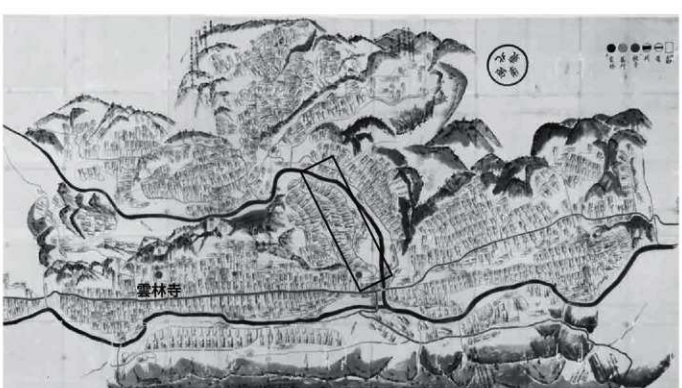
第１章　調査概要

第１節　調査に至る経緯

町道長野原線は、八ッ場ダム建設事業が影響する地域において、水源地域住民や観光客の交通の利便性を確保し、生活環域振興を図るため、水没により付け替えられる県道林長野原線の設置に併せて新設される道路である。本路線は、県道林長野原線を起点とし国道292号線に至る750m区間の道路であり、ＪＲ長野原草津口駅へのアクセス機能を向上させ、移動の円滑化による交流・物流の拡大や観光振興を支援するものとして期待される。

平成22年12月15日に長野原町役場産業建設課より町道長野原線整備事業の計画が示され、埋蔵文化財の取り扱いについて、長野原町教育委員会に照会があった。路線計画地はそのほとんどが周知の包蔵地の範囲内に含まれていることから当該年度工事箇所ごとに試掘確認調査の必要がある旨を説明し、調査実施で合意を得た。

試掘確認調査及び立会調査は平成24年度～26年度まで10地点、36本のトレンチで実施され、６地点で天明３年（1783）に浅間山の大噴火に伴って発生した泥流に埋没した畑跡等が検出された。文化財保護法第93条第１項の規定により、平成24年６月３日付けで関係書類（「発掘届」・「開発に伴う文化財調査願書」）が提出され、以後３遺跡６地点の本発掘調査が実施されることとなった。



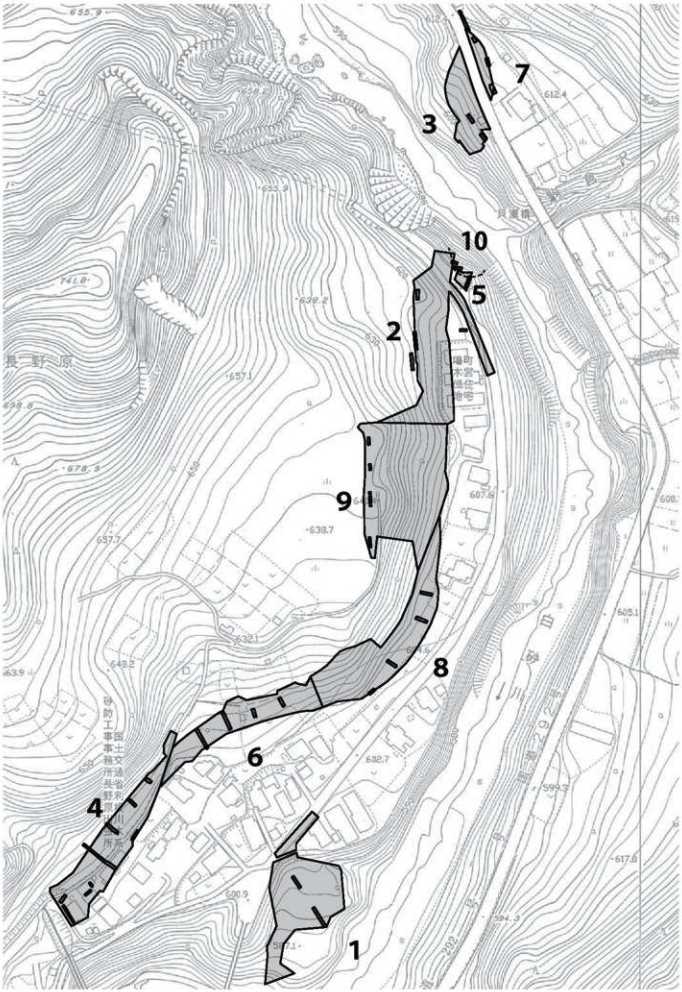
第１図　「長野原町壬申地券地引絵図」部分　群馬県立文書館所蔵（□は今回調査範囲）

第２節　試掘確認調査・立会調査

町道長野原線関係の試掘確認調査及び立会調査は第１表の通りである。上述したように、本事業に伴い、平成24年度～26年度までの間に10地点、36本のトレンチで実施された。そのうち６地点は本発掘調査を実施したが、残りの４地点については、試掘確認調査および立会調査で工事施工に支障ないと判断され調査不要となった。本節では、これら10地点の概要を報告する。出土遺物の取り扱いに関しては、本調査を実施した地点は各編にて報告するが、本調査不要と判断した４地点での出土遺物はここで報告することとする。

第１表　町道長野原線道路整備事業に伴う試掘確認調査及び立会調査一覧（番号は第２図と対応）

No	年度	遺跡名	所在地	原因 種類	調査 面積	調査期間	備考
1	平成24年度	嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ	長野原字嶋木263-1外７筆	工事用道路 試掘調査	36.96㎡	H24年11月13日	江戸天明畑。 包蔵地の把握（95）
2	〃	長野原城跡Ⅱ	長野原字嶋木335-2外８筆	擁壁工事 確認調査	53.6㎡	H24年11月13・14日	遺構・遺物なし。 発掘届（94-1）
3	〃	東貝瀬Ⅲ遺跡	長野原字東貝瀬883-3外９筆	白砂橋A2橋台 試掘調査	19.36㎡	H24年11月16日	江戸天明畑。 包蔵地の把握（95）
4	平成25年度	嶋木1遺跡Ⅳ①	長野原字嶋木256-1外５筆	JRA2橋台・本線南側１区 確認調査	124㎡	H25年９月17日～H25年９月20日	江戸天明畑。 発掘届（94-1）
5	〃	嶋木1遺跡Ⅳ②	長野原字嶋木337-2	白砂橋A1橋台付近 確認調査	21㎡	H25年11月18日	江戸天明面テラス・道
6	〃	嶋木1遺跡Ⅳ③	長野原字嶋木272-5、273-5	本線南側２～４区 確認調査	67㎡	H25年11月20・21日	遺構・遺物なし。天明泥流の天端確認。
7	平成26年度	東貝瀬Ⅲ遺跡Ⅱ	長野原字東貝瀬898-1	国道292号迂回路 確認調査	36㎡	H26年６月５・９日	遺構なし。縄文土器・土師器出土。 発掘届（94-1）
8	〃	嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ	長野原字嶋木280-6外５筆	本線北側 確認調査	46㎡	H26年６月16日	江戸天明畑。 発掘届（94-1）
9	〃	嶋木Ⅱ遺跡	長野原字嶋木288-2外２筆	擁壁工事 確認調査	20㎡	H26年６月18日	遺構・遺物なし。 発掘届（94-1）
10	〃	嶋木地区岩陰地形	長野原字嶋木337-2	白砂橋P1橋柱 立会調査	６㎡	H26年９月１日	遺構・遺物なし。



第２図　町道長野原線整備計画範囲とトレンチ配置図（1/2,500）

1. 嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ（第２・３図／第１表／ＰＬ１・２）

(1) 所在地　長野原字嶋木 263-1 外７筆
(2) 開発事業名　町道長野原線整備事業（工事用道路）
(3) 調査期間　平成 24 年 11 月 13 日
(4) 開発総面積　2,447㎡
(5) 調査面積　36.96㎡
(6) 調査概要

町道長野原線敷設予定地内へは、国道 145 号から唯一の進入路である町道嶋木線が狭小な上に JR 吾妻線の高架下を潜らなければならないため、大型車や重機、物資の搬入路として工事用進入路の敷設が必要となった。工事は盛土で吾妻川へ向かって蛇行して下りていき、対岸の国道 292 号線へと設計されていた。対象地は周知の包蔵地外であったが、比較的平坦な段丘面を残しており試掘調査を実施することになった。

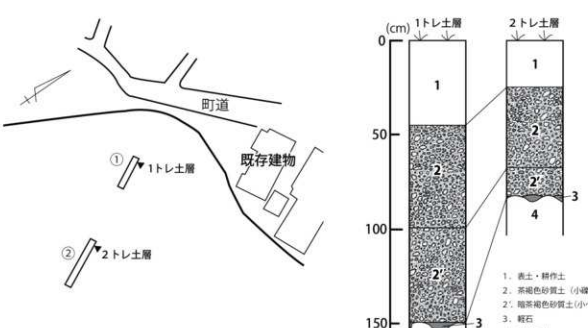
(7) 調査所見

工事用道路予定地内に試掘坑（トレンチ）を２本設定し、遺構の有無や土層の堆積状況を確認した。その結果、１トレ・２トレで天明３（1783）年の浅間火山の大爆発に伴い発生した泥流に埋没した畑跡が検出された。このことからこの段丘面全域が畑跡である可能性が高いことが判明した。

畝サクの遺存状態も良好で斜面に直交（＝等高線に平行）する方向で検出され、サクに軽石が堆積している状況を確認することができた。泥流（２層・2'層）は１トレで 105㎝厚、２トレで 60㎝厚で認められ、色調と混入物で大きく２つに分層することができた。また２トレでは黒褐色土（４層）が 30㎝程で地山と考えられる礫混じりのローム層に到達したので、少なくとも段丘先端部には江戸時代以前の遺構はないものと考えられた。

出土遺物に関しては、２トレで肥前磁器と考えられる碗の破片（第 49 図 12）が出土した。

以上のことから対象地のうち、盛土３m以上を施工する範囲の本調査が必要であると判断された。また、対象地は周知の包蔵地外であったため、発見届（文化財保護法 95 条）を提出し、嶋木Ⅰ遺跡の範囲拡張の措置を講じた。



第３図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲトレンチ配置図（1/1,000）・土層図（1/20）

2．長野原城跡Ⅱ（第２・４・５図／第１表／ＰＬ２・３）

(1) 所在地　長野原字鴨木 335-2 外８筆

(2) 開発事業名　町道長野原線整備事業（擁壁工事）

(3) 調査期間　平成 24 年 11 月 13 日・14 日

(4) 開発総面積　4,400㎡

(5) 調査面積　53.6㎡

(6) 調査概要

・町道長野線橋擁壁工事予定地内に試掘坑（トレンチ）を３本、作業ヤード予定地に１本設定し、遺構の有無や土層の堆積状況を確認する。

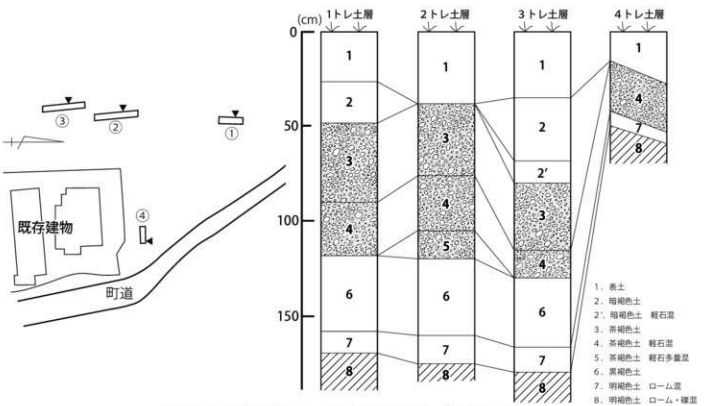
・計測や写真撮影など記録を採り、埋め戻しをして終了する。

(7) 調査所見

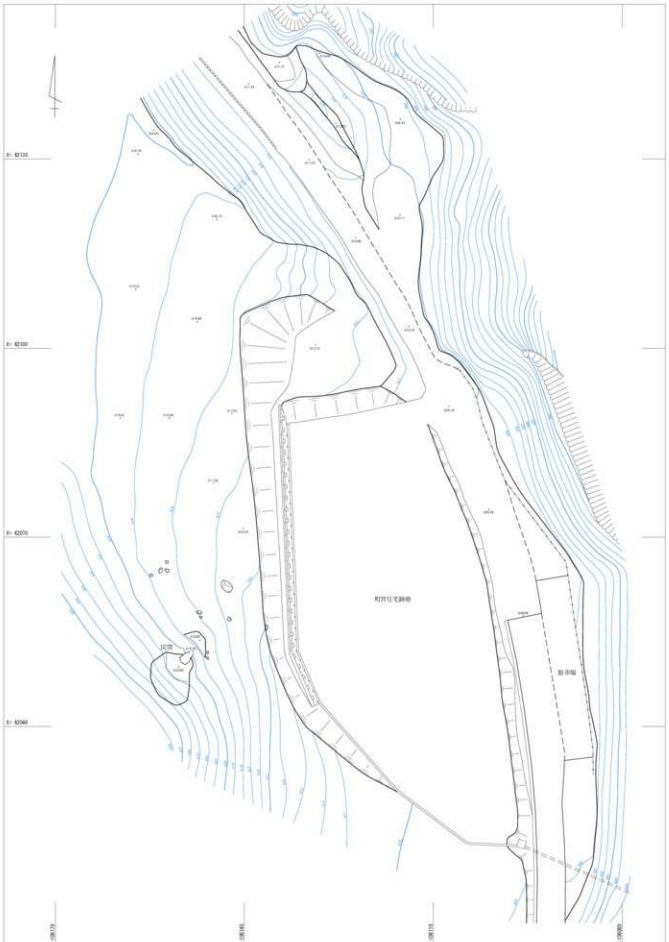
町道長野線敷設予定地内に試掘坑（トレンチ）を３本、作業ヤード予定地に１本設定し、遺構の有無や土層の堆積状況を確認した。その結果、１～４トレンチでいずれも天明泥流と考えられる堆積物が確認　されたが、明確な遺構・遺物は検出されなかったので文化財保護的には、掘削工事に支障なしと判断した。

堆積土層は１～３トレは地山と考えられるローム・礫混じりの明褐色土層（８層）が現地表下 170 ～ 190cmで確認された。３・４・５層の茶褐色土層は軽石の混入で分層したが基本的には同一層と考えられ、江戸時代以前の遺構が検出され得る黒褐色土層（６層）を覆うかたちで堆積しているので、天明泥流の可能性が高いと判断された。層厚は 50 ～ 80cmを測り、それぞれサンプリングをした。４トレは太子線の線路掘削工事あるいは町営住宅建設工事の際の作業ヤードと考えられるが、泥流（４層）と地山が傾斜していることから元来は１～３トレの緩斜面と一続きであったことが判明した。

本調査区は泥流の逆流到達予想範囲から外れており、泥流が到達していても泥流上位が山肌をなめて堆積した箇所と考えられる。また掘削範囲に①井戸と②炭焼き釜、③台地縁に土塁状の盛土が確認された。①と②は関連があると考えられるが、



第４図　長野原城跡Ⅱトレンチ配置図（1/1,000）・土層図（1/20）



第５図　周辺地形図（1/600）

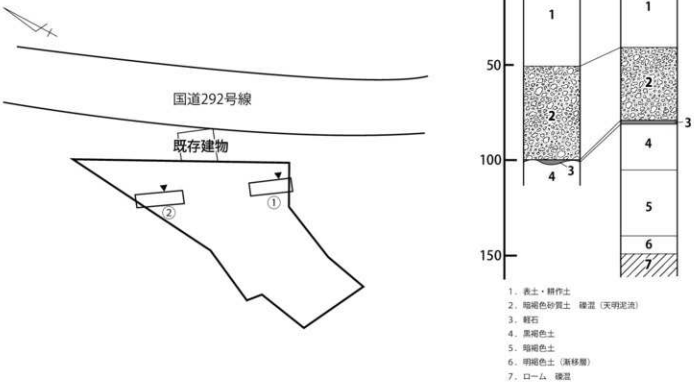
平面図に位置を落とし、掘削でなるべく壊されない措置をお願いした。③は台地北側の太子線掘削工事に起因すると考えられる。おそらく山からの転石を直接線路内に落とさず、川へ落とすための工夫と考えられるが、すべて掘削されるわけではないので掘削前に地形測量を実施した（第５図）。

３．東貝瀬Ⅲ遺跡（第２・６図／第１表／ＰＬ４）

(1) 所在地　長野原字東貝瀬 883-3 外９筆
(2) 開発事業名　町道長野原線整備事業（白砂橋 A2 橋台）
(3) 調査期間　平成 24 年 11 月 16 日
(4) 開発総面積　1,025㎡
(5) 調査面積　19.36㎡
(6) 調査概要
・町道長野原橋台設置予定地内に試掘坑（トレンチ）を２本設定し、遺構の有無や土層の堆積状況を確認する。
・計測や写真撮影など記録を採り、埋め戻しをして終了する。
(7) 調査所見

町道長野原橋台設置予定地内に試掘坑（トレンチ）を２本設定し、遺構の有無や土層の堆積状況を確認した。その結果、１トレ・２トレいずれも天明３（1783）年の浅間火山の大爆発に伴い発生した泥流に　埋没した畑跡が検出された。このことからこの段丘面全域が畑跡である可能性が高いことが判明した。

畝サクの遺存状態も良好で斜面に直交＝等高線に平行する方向で検出され、サクに軽石が堆積している状況を確認することができた。泥流（２層）は１トレで 50㎝厚、２トレで 40㎝厚で認められた。また２トレでは江戸時代以前の黒褐色土（４層）・



第６図　東貝瀬Ⅲ遺跡トレンチ配置図（1/500）・土層図（1/20）

暗褐色土（５層）・明褐色土（６層）が70㎝厚で確認され、遺物は出土しないものの広げてみれば遺構が存在する可能性も出てきた。地山は対岸と同じく礫混じりのローム層である。

以上のことから本調査地点のうち、掘削あるいは３m以上の盛土施工する範囲の本調査が必要であると判断された。また、対象地は周知の包蔵地外であったため、発見届（文化財保護法95条）を提出し、東貝瀬Ⅲ遺跡の範囲拡張の措置を講じた。

4．嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ①（第２・７・８図／第１表／ＰＬ５～８）

(1) 所在地　長野原字嶋木256-1外５筆
(2) 開発事業名　町道長野原線整備事業（JR A2橋台・本線南側）
(3) 調査期間　平成25年９月17日～平成25年９月20日
(4) 開発総面積　4,406.52㎡
(5) 調査面積　124㎡
(6) 調査概要
・町道長野線A2橋台設置および本線予定地内に試掘坑（トレンチ）を９本設定し、遺構の有無や土層の堆積状況を確認する。
・計測や写真撮影など記録を採り、埋め戻しをして終了する。
(7) 調査所見

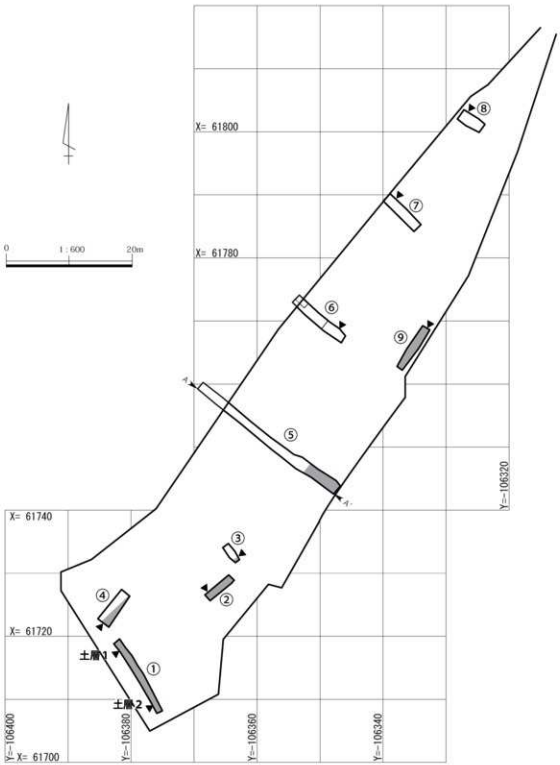
町道長野原線A2橋台および本線予定地（南側）に９本（１～９トレ）のトレンチを設定し、土層の堆積状況と遺構の有無を確認した。その結果、１トレ～５トレ・９トレで天明泥流に埋没した畑跡ないし天明面が検出された。従って、工事施工前にA2橋台および本線予定地（南側）は赤道より下段の箇所の本調査が必要と判断された。

天明面までの深さは深いところで１m、浅いところで10㎝であった。堆積基本土層は１．表土、２．天明泥流、３．軽石（３～４㎝厚）、４．旧表土で、赤道より上段の５～８トレでは天明泥流に類似した層（２'層）が認められ、天明泥流の上澄みが到達していることが想定された。赤道の上下段を通して設定した５トレで両層のサンプリングを実施した。比較的緩斜面の下段に畑が遺存しており、上段は２'層が江戸時代面と考えられるならば、それ以前の時代は存在しないものと考えられる。ただし下段の江戸時代の天明面以前の遺構の存在は未だ不明である。A2橋台箇所は畑跡なのか判然としなかったが、天明面を検出することができたので周囲を広げて、畑跡になるのかどうか確認する必要があると判断された。

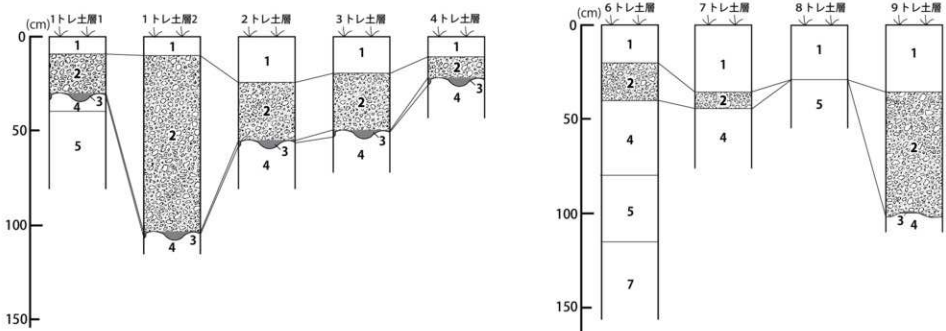
なお対象地は周知の包蔵地外であったため、発見届（文化財保護法95条）を提出し、嶋木Ⅰ遺跡の範囲拡張の措置を講じた。

5．嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ②（第２・９図／第１表／ＰＬ８・９）

(1) 所在地　長野原字嶋木337-2
(2) 開発事業名　町道長野原線整備事業（白砂橋A1橋台）
(3) 調査期間　平成25年11月18日
(4) 開発総面積　152㎡
(5) 調査面積　21㎡
(6) 調査概要
・町道長野原線白砂橋A1橋台設置予定地内に試掘坑（トレンチ）を２本設定し、遺構の有無や土層の堆積状況を確認する。
・計測や写真撮影など記録を採り、埋め戻しをして終了する。



第７図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ①トレンチ配置図（1/600）



1．表土
2．茶褐色砂質土（天明泥流）
3．軽石
4．暗褐色土（旧表土）
5．灰褐色土
6．暗褐色土（川砂を多く含む）
7．暗灰褐色土（4 層と 6 層が混じる）

--遺ないし擁壁工事の作業ヤードか--

8．暗褐色土　粘性なし　φ～2cm 大の礫を多く含みφ～1cm の軽石含む。7 層に類似
9．暗茶褐色土　粘性なし　しまりあり　φ～4cm 大の礫を少量含み、φ～2cm 大の軽石を含む
10．暗褐色土　粘性なし　しまりあり　φ 3cm 大礫を少量含み、φ～1cm 大の軽石を含む
11．黒褐色土　粘性なし　しまりややあり
12．暗褐色土　粘性なし　しまりややあり　φ～3cm 大礫を少量含み、軽石を微量含む
13．暗茶褐色土　粘性なし　しまりあり　φ～5cm 大礫を多く含み、軽石を微量含む

第 8 図　嶋木 I 遺跡Ⅳ①土層図（1/20・1/120）

(7) 調査所見

町道長野原線A1白砂橋橋台設置予定地に2本（10・11トレ）のトレンチを設定し、土層の堆積状況と遺構の有無を確認した。その結果、11トレで天明面が検出され、工事施工前に白砂橋橋台設置予定地は11トレ周辺の平坦箇所の本調査が必要と判断された。

天明面までの深さは深いところで1m、浅いところで10cmであった。堆積基本土層は1.表土、2.天明泥流、3.軽石（3～4cm厚）、4.旧表土で、赤道より上段の5～8トレでは天明泥流に類似した層（2'層）が認められ、天明泥流の上澄みが到達している可能性が出てきた。赤道の上下段を通して設定した5トレで両層のサンプリングを実施した。比較的緩斜面の下段に畑が遺存しており、上段は2'層が江戸時代面と考えられるならば、それ以前の時代は存在しないものと考えられる。ただし下段の江戸時代の天明面以前の遺構の存在は未だ不明である。A1橋台箇所は畑跡か否か判然としなかったが、天明面を検出することができたので周囲を広げて、畑跡になるのかどうか確認する必要がある。

なおA1橋台周りは周知の包蔵地にはなっていなかったが、「嶋木Ⅰ遺跡（№72）」の範囲拡張の措置を講じた。

第9図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ②トレンチ配置図（1/500）・土層図（1/20）

6．嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ③（第2・10・11図／第1表／PL9～11）

(1) 所在地　長野原字嶋木272-5, 273-5

(2) 開発事業名　本線南側2区～4区

(3) 調査期間　平成25年11月20・21日

(4) 開発総面積　1,500㎡

(5) 調査面積　67㎡

(6) 調査概要

・町道長野原線本線予定地（北側）に4本のトレンチを設定し、遺構の有無や土層の堆積状況を確認する。

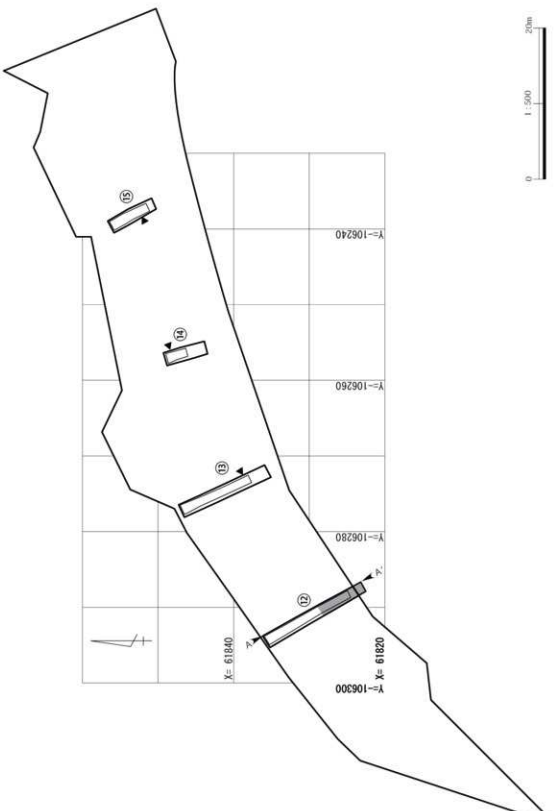
・計測や写真撮影など記録を採り、埋め戻しをして終了する。

(7) 調査所見

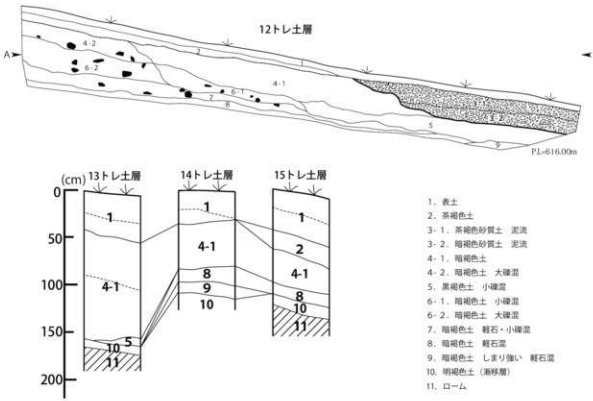
町道長野原線本線予定地に4本（12～15トレ）のトレンチを設定し、土層の堆積状況と遺構の有無を確認した。その結果、12トレで天明泥流の逆流天端が検出された。泥流下には若干の川砂が認められたが軽石は見当たらなく、遺

構等も認められなかったので、今回試掘箇所の本調査は不要と判断された。

12トレの泥流は前回試掘の5～8トレで認められた天明泥流に類似した層（2'層）と同じ層で、天端が確認されたことから泥流の上澄み層と判断された。標高にして615.4 m付近で、すぐ近くに浅間石も埋没していた。13トレ北側の大きな岩は山石であり泥流に由来するものではなかった。



第10図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ③トレンチ配置図（1/500）



第 11 図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ③土層図（1/100・1/40）

7．東貝瀬（ひがしかいぜ）Ⅲ遺跡（さんいせき）Ⅱ（第２・12・13 図／第１・２表／ＰＬ 11・12）

(1) 所在地　長野原字（ながのはらあざ）東貝瀬（ひがしかいぜ）898-1

(2) 開発事業名　国道 292 号線迂回路

(3) 調査期間　平成 26 年６月５・９日

(4) 開発総面積　255.11㎡

(5) 調査面積　36㎡

(6) 調査概要

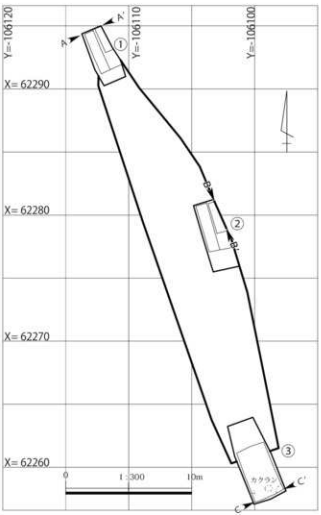
・迂回路敷設予定地内に３本のトレンチを設定し、土層の堆積状況や遺構の有無を確認する。

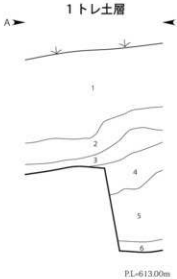
・トレンチ平面図、土層記録、写真撮影をし、埋め戻して終了する。

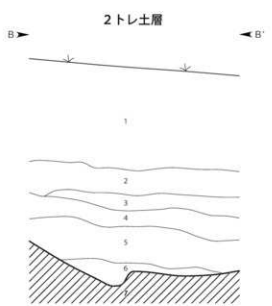
(7) 調査所見

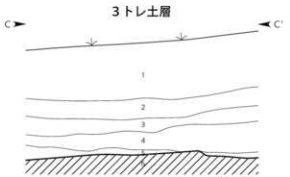
迂回路敷設予定地内に３本のトレンチを設定し、土層の堆積状況と遺構の有無を確認した。その結果、遺物は出土したが、顕著な遺構は確認されなかったので迂回路敷設工事に際して文化財保護的に支障はないと判断した。

遺物はいずれも遺構外の出土で、１トレで縄文土器片（中期後半）、３トレで土師器片（平安時代）が出土した。堆積土層は１トレがトレンチ北壁、２トレがトレンチ東壁、３トレがトレンチ南壁で確認し、１・２トレは地山の関東ローム層が確認されず、礫混の明茶褐色土層が地山だったことから埋没谷と判断された。３トレは地山の関東ローム層が表土下 130 ㎝で確認されたが、遺構は認められなかった。国道下で天明泥流に埋没した畑跡が検出されたが、本調査区では１・２トレの１～３層、３トレの１・２層がいずれも砂質で泥流の上澄みの可能性があるとしか言えない。遺物が出土していることから周辺に縄文・平安時代の遺構が存在することが予想される。









1．暗灰褐色土　小礫を含む（砂質）
2．暗褐色土　（砂質）
3．暗褐色土　ローム粒・軽石粒微量含む
4．暗褐色土　ローム粒・軽石粒含む
5．明褐色土　漸移層
6．ローム

1．暗灰褐色土　小礫を含む（砂質）
2．暗褐色土　（砂質）
3．明褐色土　（砂質）
4．暗褐色土
5．暗褐色土　拳大礫含む　ローム粒・軽石粒含む
　＜縄文包含層＞
6．明茶褐色土　（漸移層）ローム粒・軽石粒多量含む
7．明茶褐色土　ローム粒・軽石粒を多量含む　巨礫含む

第 12 図　東貝瀬Ⅲ遺跡Ⅱトレンチ配置図（1/300）・土層図（1/40）

第13図　東貝瀬Ⅲ遺跡Ⅱ出土遺物実測図（1/3）

第2表　東貝瀬Ⅲ遺跡Ⅱ出土遺物観察表

挿図No.	図版No.	器種	法量（器高／口径／底径）(cm)	特徴（形態・手法等）	焼成	胎土・材質等	色調（外面／内面）	備　考	
13-1	12	縄文土器・深鉢	(4.0)／－／－	外面は RL 縄文、内面は撫医ナデ調整後に横位ナデ。	良好	角閃石・白色粒	赤褐／褐	破片資料（体部）	1トレ
13-2	12	土師器・杯	(2.1)／－／－	ロクロ整形。外面はロクロナデ。内面は黒色処理を施している。	酸化焔・良好	角閃石	橙／黒	破片資料（口縁部～体部）	3トレ
13-3	12	在地土器・鍋	(1.0)／－／－	内外面ともに横位ナデ調整。	良好	砂粒	にぶい黄褐／にぶい黄橙	破片資料（底部）	調査区
13-4	12	陶磁器・碗	(4.6)／－／－	肥前染付。小碗。	－	－	灰白	破片資料（体部～高台部）	調査区

8．嶋木（しまぎ）Ⅰ遺跡（いちいせき）Ⅴ（第2・14・15図／第1表／ＰＬ13・14）

(1) 所在地　長野原字嶋木（ながのはらあざしまぎ） 280-6 外5筆

(2) 開発事業名　町道長野原線整備事業（本線北側）

(3) 調査期間　平成26年6月16日

(4) 開発総面積　1,414㎡

(5) 調査面積　46㎡

(6) 調査概要

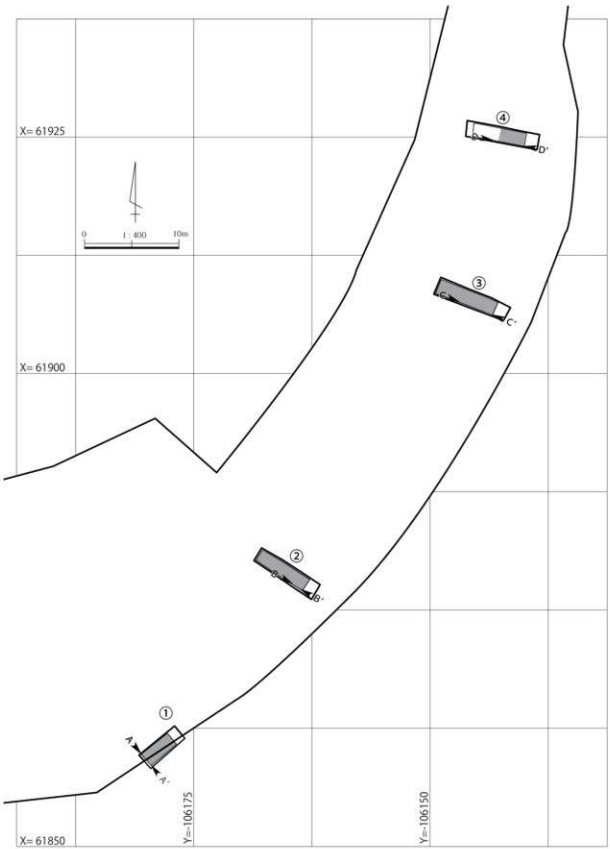
・町道長野原線本線敷設予定地内に試掘坑（トレンチ）を4本設定し、遺構の有無や土層の堆積状況を確認する。

・計測や写真撮影など記録を採り、埋め戻しをして終了する。

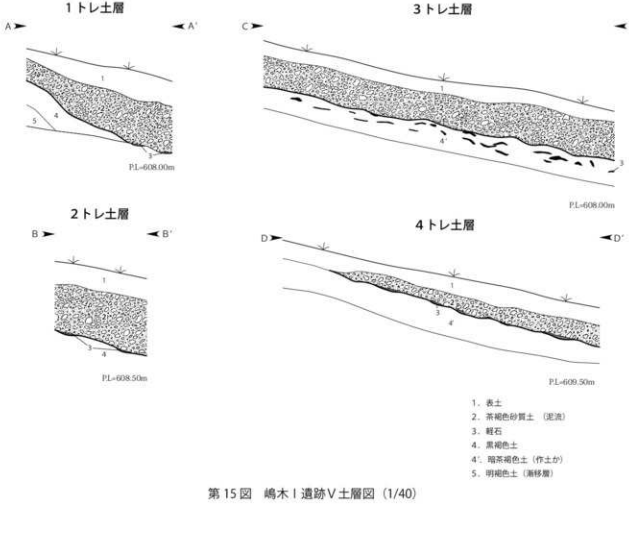
(7) 調査所見

町道敷設予定地内に試掘坑（トレンチ）を2本設定し、遺構の有無や土層の堆積状況を確認した。その結果、全トレンチで江戸時代（1783年）に発生した天明泥流直下の畑が検出されたので、既存石垣より東側の本調査が必要と判断された。

堆積土層はすべてトレンチ南壁で確認し、1・2トレは黒色土を畑面としているのに対し、3・4トレは黒色土直上の茶褐色土を畑面としていることが確認された。この茶褐色土は作り土と考えられるが、3トレでは土層断面から軽石降下後に鋤取りを行ったか、軽石降下の合間に二番サクを実施したと考えられた。また4トレでは天明泥流の到達範囲を示す天端が確認された。周囲に見られる土留めと思われる石垣は3トレから天明泥流の上に構築されており、天明以後のものと判断された。



第 14 図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴトレンチ配置図（1/400）



第 15 図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ土層図（1/40）

9．嶋木Ⅱ遺跡（第２・16 図／第１表／ＰＬ 15・16）

（1）所在地　長野原字嶋木 288-2 外２筆

（2）開発事業名　町道長野原線整備事業（擁壁工事）

（3）調査期間　平成 26 年６月 18 日

（4）開発総面積　603.9㎡

（5）調査面積　20㎡

（6）調査概要

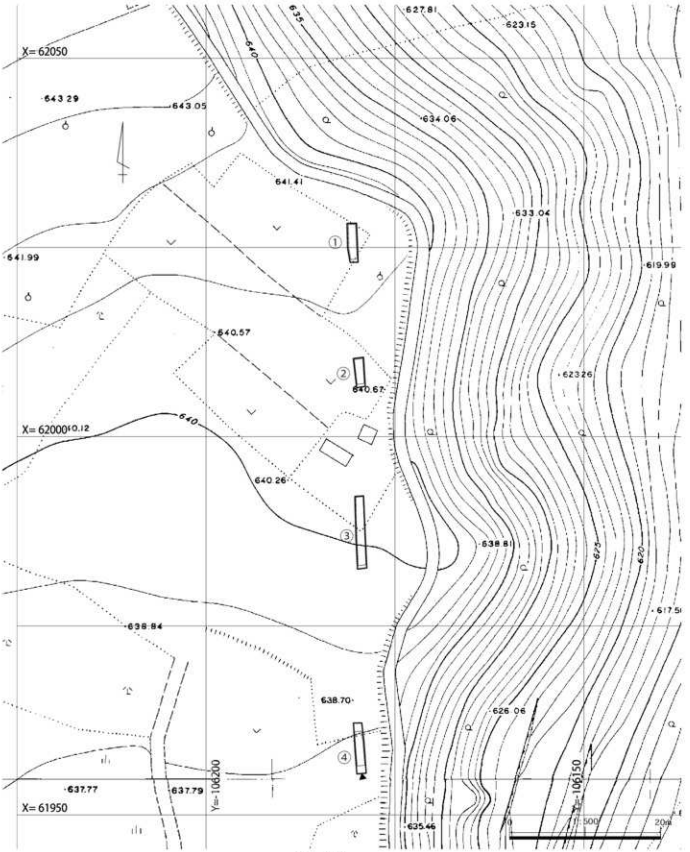
・町道長野原線（擁壁工事）予定地内に４本のトレンチを設定し、土層の堆積状況や遺構の有無を確認する。

・トレンチ平面図、土層記録、写真撮影をし、埋め戻して終了する。

（7）調査所見

町道長野原線（擁壁工事）予定地内に４本のトレンチを設定し、土層の堆積状況と遺構の有無を確認した。その結果、顕著な遺構は確認されなかったので擁壁工事に際して文化財保護的に支障はないと判断した。

堆積土層は地山の関東ローム層まで浅く、１～３トレで現地表下 15 ～ 20㎝、一番深い４トレで 40㎝であった。図化したのは４トレ南壁のみで、いわゆる平安・縄文時代の包含層である暗褐色土が確認されない状況だった。台地の縁辺部ということもあり、畑の造成等で削平をうけている可能性も考えられた。ロームの堆積も薄く不安定で所々その下の軽石層（As-YPk）が露出していた。



第 16 図　嶋木 II 遺跡トレンチ配置図（1/500）・土層図（1/20）

10. 嶋木地区岩陰地形（第2・17～19図／第1表／PL 17）

(1) 所在地　長野原字嶋木 337-2

(2) 開発事業名　白砂橋 P1 橋柱

(3) 調査期間　平成 26 年 9 月 1 日

(4) 開発総面積　1089.4㎡

(5) 調査面積　6㎡

(6) 調査概要

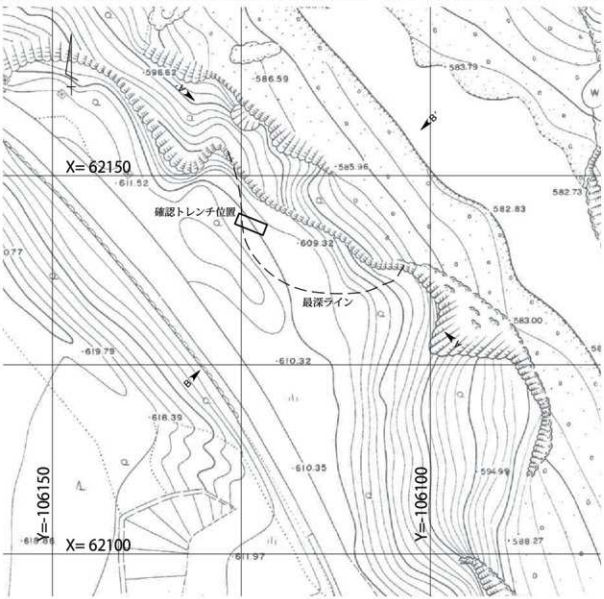
・町道長野線白砂橋P1橋柱設置予定地内に試掘坑（トレンチ）を 1 本設定し、遺構の有無や土層の堆積状況を確認する。

・計測や写真撮影など記録を採り、埋め戻しをして終了する。

(7) 調査所見

町道長野原線白砂橋（P1 橋柱）建設予定地内に 1 本のトレンチを設定し、土層の堆積状況と遺構の有無を確認した。その結果、顕著な遺構は確認されなかったので橋台建設工事に際して文化財保護的に支障はないと判断された。

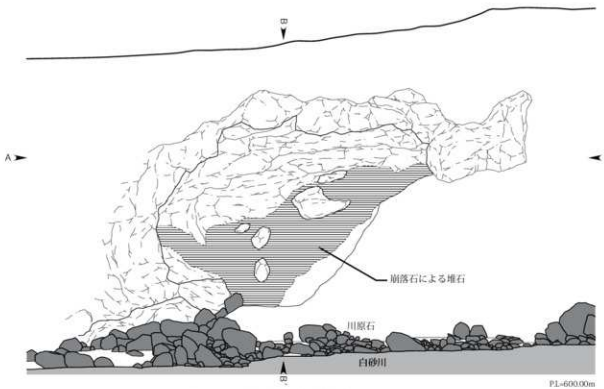
対象地は白砂川の河床面より高い位置に岩陰地形が形成されていたので、立面図・断面図を作成して橋台工事箇所の立会



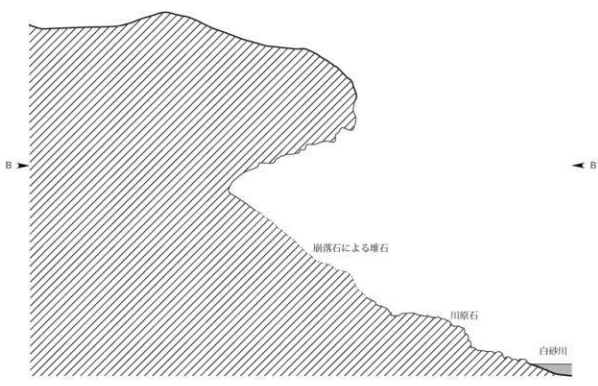
第 17 図　嶋木地区岩陰地形トレンチ配置図（1/500）

調査で岩陰地形がしていたか否かを確認した。白砂川右岸ということもあり、北東側へ開口しているため使用した可能性は低かったが、今回岩陰の主体部ではなく上流側隅のみトレンチで土層確認した結果、使用された痕跡を見つけるまでには至らなかった。

堆積土層は岩陰主体部に向かって傾斜しており、上から1.崩落ズリ（1m厚）、2.黄褐色砂質土（10cm厚）、3.青灰色砂質土（5～20cm厚）、4.茶褐色砂質土（30cm厚）、5茶褐色砂質土（10～20cm厚）、 6.茶褐色砂質土（20cm以上）であった。4～6層は天明泥流と考えられ、下層になるほど大きな礫を含んでいた。



第18図　嶋木地区岩陰地形立面図（1/300）



第19図　嶋木地区岩陰地形断面図（1/300）

第３節　調査の方法

（1）発掘調査

a．表土除去

表土除去は重機（バックフォー）を使用して行った。地点毎に試掘確認調査で天明泥流の厚さ及びAs-A軽石が検出される深さが判明していたので、そのことを念頭に表土から遺構確認面まで少しずつ掘り下げていった。As-A軽石が確認される直上までを重機でそれ以下は人力で除去した。重機のバケットの爪に鉄板を装着して遺構を傷つけないように配慮した。

b．遺構確認

遺構確認は上述の表土除去後に人力で行った。畑直上の泥流はできるだけ残し、畑の畝サクを確定していった。

c．遺構発掘及び遺物の取り上げ

遺構の発掘作業は、遺構の平面形を確定した上で土層観察用のベルトを設定し、遺構内の覆土の除去に着手した。住居跡・竪穴の場合は長軸方向とその中心から長軸に対して直交方向に十字にベルトを設定し、土坑の場合は長軸に沿って半截して土層の観察を行った。

遺物の取り上げに関しては、単独と思われる破片は上層・下層・床面直上ごとに、個体もしくは遺物の集中している箇所は出土位置図（ドット図）を作成の上、取り上げ作業を行った。遺物出土位置図は1/20のスケールで作成し、標高値の記録を一点ずつ行った。

d．実測図の作成及び遺構の写真撮影

実測図は土層堆積状況図、遺物出土位置図及び完掘状況遺構平面図を作成した。土層堆積状況図は遺物出土位置図と同様に1/20のスケールで作成した。完掘状況遺構平面図は光波測距儀を用いて行った。完掘遺構の変化点を三次元記録し、その場でパーソナル・コンピューターにより現地での詳細な観察の上で結線し作成した。また、必要に応じてエレベーション図の作成も行った。遺構の記録写真は、35㎜小型一眼レフカメラとデジタルカメラを併用して撮影した。モノクローム・カラーリバーサルの２種類のフィルムを使用し、両者同一カットを３枚１単位で露出を変えて撮影した。

（2）自然科学分析

遺跡の性格や内容をより具現化するために発掘調査の成果に基づき自然科学的手法を用いて以下の３項目を実施した。

a．花粉分析

東貝瀬Ⅲ遺跡で検出された天明畑の単位畑３枚のうち1-3号畑では作物遺存体の遺存が良好で、遺存体とともに当時の耕作土も採取した。この耕作土に含まれる花粉を分析することにより、当時の遺跡をとりまく古植性について検討することを目的とする。嶋木Ⅰ遺跡においても比較的遺存状態の良い3-5号畑・3-14号畑で採取した試料から同分析を実施した。

b．作物遺体の素材同定および植物珪酸体（プラント・オパール）分析

上述した東貝瀬Ⅲ遺跡1-3号畑において５点、嶋木Ⅰ遺跡3-5号畑で２点、3-14号畑で１点の作物遺存体を取り上げることができた。当時の畑で何が栽培されていたのかを検討することを目的として植物珪酸体（プラント・オパール）分析を実施した。

c．大型植物遺体・炭化種実の同定

両遺跡で作物遺体とともに取り上げられた土壌（畝サクに堆積した泥流あるいは耕作土）に含まれる大型植物遺体の同定を行い、当時利用された種実や周辺の植生について検討することを目的に実施した。

（3）整理調査・報告書作成の経過

町道長野原線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務は、試掘確認調査から発掘調査までを平成24年度から平成26年度まで３ヵ年かけて実施された。整理調査のうち基礎整理（遺物：洗浄・注記・接合・実測・トレース・写真撮影／

遺構：図版修正・基礎編集・写真編集）は本書の各遺跡で記述したように、平成 28 年度までに、事業の合間に複数事業と併行して実施した。

平成 30 年 4 月から報告書編集作業を開始し、遺構図版・写真図版のデジタル編集を平成 31 年 1 月下旬まで、併せて執筆作業を平成 30 年 12 月上旬～平成 31 年 2 月下旬にかけて行い、2 月下旬～3 月下旬に編集の最終調整・校正、印刷製本を実施し、併せて保管用に資料・遺物の整理をしてすべての作業を完結した。

第 2 章　遺跡の立地と環境

第 1 節　遺跡の位置

長野原地区遺跡群が所在する長野原町は群馬県北西部にある吾妻郡域の南西隅に位置し、東は吾妻郡東吾妻町（旧吾妻町）・高崎市倉渕町（旧倉渕村）、北は吾妻郡草津町・同郡中之条町（旧六合村）、西は吾妻郡嬬恋村と接し、南は浅間高原を経て長野県北佐久郡軽井沢町と県境をなす。本町は高間・白根の両山系と大渦山系とに挟まれた吾妻川流域地帯の北部と、高原地帯の南部とに大別され、高原地帯を除きほとんどが河川・渓沢に向かう山岳傾斜地帯である。

町の北西には草津白根山（標高 2,170m）、南西には浅間山（標高 2,568m）が位置する。町域も北部は高間山（標高 1,341.7m）や王城山（標高 1,123.2m）、吾妻川より南に丸岩（標高 1,124m）や菅峰（標高 1,473.5m）など、南部は南東から南にかけて浅間隠山（標高 1,756.7m）、鷹繋山（標高 1,431.4m）、鼻曲山（標高 1,655m）など、周囲を 1,000 ～ 1,800m 級の険しい山々で囲まれている。

長野原町の河川は長野県境の鳥居峠付近（標高 1,362m）を水源とする吾妻川が東流し、それに万座川や熊川・白砂川など主に両岸の山地から発する諸支流が注ぎ、渋川市街地付近で利根川右岸に合流する。町域は吾妻川の中流にあたるが、かつて酸性を帯びた水質をもつ支流の流入により、中流より下流にかけて魚類の生息に適さない状態であった。しかし石灰投入による中和処理が開始されて以来、水質の改善が行われている。

吾妻川両岸は大字長野原付近でやや幅が広く、河岸段丘が発達する（第 21 図）。この段丘面は最上位・上位・中位・下位の 4 段階で形成されている。これら段丘面とその上位の丘陵上に縄文時代～平安時代にかけての遺跡が多く見つかっており、現在でも住宅地や田畑として利用されている。これらの段丘は約 21,000 年前に浅間山から噴出した応桑泥流堆積物が侵食されて形成されており、その上を覆っている関東ローム層中には約 11,000 年前に噴出した浅間 - 草津黄色軽石層（As-YPk）が堆積しているのが認められる。現在の吾妻川からの比高差は最上位段丘面で約 80 ～ 90m、上位段丘で約 60 ～ 65m、中位段丘で 30m 前後、下位段丘で約 10 ～ 15m を測る。大字川原湯から東では川幅が狭まり峡谷をなし、吾妻渓谷を形成している。

長野原町が含まれる浅間山周辺地域は、気候的には太平洋側の気候区に入るが、高地であることから寒冷な中央高地型の気候がみられる。しかし吾妻川沿いの標高 600m の谷底から、最高点の浅間隠山の 1,756m までと起伏に富んでおり、地理的条件も変化が大きいため、地区ごとに気候・気象に変化が見られる。降水量も地形により変化するが、年間降水量は関東平野各地域とほぼ等しい。降水量の年変化は日本海側と異なり冬季に少なく夏季に多い。

今回報告する長野原城跡・東貝瀬Ⅲ遺跡・嶋木 1 遺跡は町域北部の吾妻川流域帯にあり、吾妻川の支流である白砂川右岸の河岸段丘上に立地している。

第 2 節　周辺の遺跡

長野原町における遺跡の調査は、昭和 29 年に行われた勘場木遺跡の調査を始めとして、昭和 38・47・48 年には群馬県による分布調査が行われ、昭和 53 年には石畑 1 岩陰遺跡が発掘調査された。本町における遺跡分布状況は昭和 48 年に群

馬県教育委員会刊行の『群馬県遺跡地図』に依っていたが詳細な遺跡の分布の把握は不十分であった。その後、町教育委員会は県教育委員会文化財保護課の指導のもと、昭和62年度から3ヶ年かけて、全町を対象とした遺跡詳細分布調査を実施し、199の遺跡包蔵地を確認した[1]。また平成6年度から八ツ場ダム建設事業に関連した工事用進入路や水没地域の工事に対応して（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が継続して調査を実施しており、新たな包蔵地の発見や遺跡名の変更などの必要性から平成14年3月と平成16年4月に遺跡地図の改訂を実施した。その後も小さな変更を繰り返しているが、平成31年2月現在で225の包蔵地（指定史跡等を含む）が把握されている[2]。

本遺跡群の位置する吾妻川流域地帯の東部地区はダム関連事業と直結している地域で、先述した（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団（平成24年4月に公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に名称変更）が常時数カ所の発掘調査を継続して実施してきた地域である。町教育委員会でも本地域でこれまで生活再建事業として水源地域対策特別措置法（以下、水特法）および利根川・荒川水源地域対策基金（以下、基金）関連事業を実施してきたが、ダム本体の完成間近であり、計画通りいけば次年度で最終年度となる[3]。

本遺跡群を含む吾妻流域地帯東部地区には多くの遺跡が分布している（第20・21図・第3表）。遺跡は基本的に吾妻川とその支流沿いの河岸段丘上に占地しているが近年丘陵上にも遺跡が発見されはじめ、これまで空白だった時期を埋める遺構も検出されている。ここでは調査を実施した遺跡を中心に当該地域の遺跡を概観したい。なお、長野原町の現時点での歴史観をなるべく記載する立場から、筆者が実見したり、調査担当者に聞き取った未報告の情報を多分に含んでいる。従って本報告時には多少異なる見解になるかもしれないのでご注意願いたい。

（1）旧石器時代

これまでのところ長野原町では旧石器時代の遺跡は確認されていない。吾妻川流域は前述した応桑泥流やAs-YPkが厚く堆積しており、それより下位の発掘調査が困難な状況がある。遺構外の遺物としては柳沢城跡（30）で細石器文化に伴うと考えられる珪質頁岩製のスクレイパーが1点出土している。吾妻郡内においても旧石器時代遺跡は高山村に所在する新田西沢遺跡[4]でしか確認されていないというのが現状である。

このことは長野県側の浅間山麓でも同様で、厚く堆積した火山噴出物により旧石器時代面の発掘調査は困難である。長野県側の浅間山麓付近で発掘調査されている旧石器時代遺跡は、いずれも千曲川を挟み浅間山麓の対岸側で確認されている。

（2）縄文時代

縄文時代になると遺跡数も膨大となる。吾妻川及びその支流沿岸の下位段丘面は低調だが主として中・上・最上位河岸段丘および丘陵部に集落が展開する。

①草創期～早期

現在のところ、長野原町で人々の生活が確認されているのは草創期末～早期初頭からである。該期の遺跡として石畑Ⅰ岩陰（95）がある。昭和53年に群馬県教育委員会により一部調査され、中期を除く草創期～晩期の土器片・獣骨・人骨などが出土している。特に草創期～早期の土器片には表裏縄文・撚糸文・押型文が認められる。平成26年度から國學院大学により学術調査が実施されている居家以岩陰群（13）でも草創期～晩期の土器片・石器・獣骨・人骨が出土している。平成28～30年度の調査では岩陰部の灰層中から遺存状態の良い早期中葉の埋葬人骨が20体確認されており、その数は今後も増えるだろう[5]。また横壁勝沼Ⅰ遺跡（43）では草創期の槍形尖頭器が表採されている。近年、丘陵上での調査機会も増え、楡木Ⅱ遺跡（53）、立馬Ⅰ遺跡（70）、立馬Ⅲ遺跡（72）で早期の集落が検出されている。楡木Ⅱ遺跡では早期前半撚糸文期の住居跡が31軒検出され、遺構外で表裏縄文・押型文・沈線文・条痕文土器片も出土している。該期の住居跡検出数では県はもとより全国的にも有数である。また立馬Ⅰ遺跡では撚糸文期の住居跡の他、沈線文（田戸下層式）期の住居跡も検出され、遺構外では押型文・条痕文をはじめ晩期までの土器片が連綿と出土している。立馬Ⅲ遺跡では子母口式や稲荷台式、沈線文土器などの住居跡が検出されている。さらに同時期の遺物は、調査事例の多い東部地区に偏っており、三平

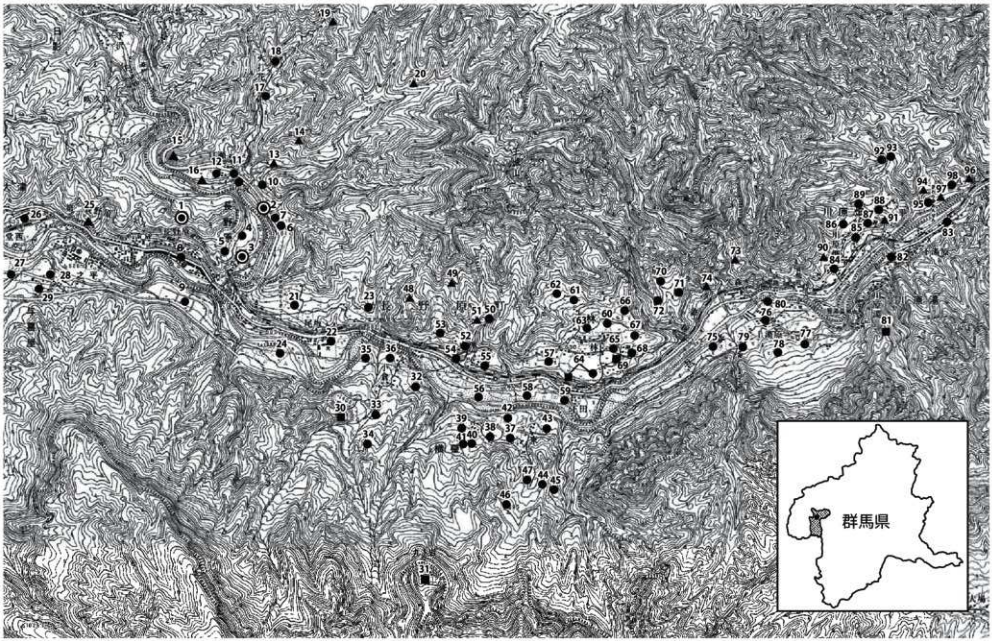
Ⅰ遺跡（87）、三平Ⅱ遺跡（88）、花畑遺跡（66）、中棚Ⅰ遺跡（55）、幸神遺跡（23）、横壁中村遺跡（42）、山根Ⅲ遺跡（39）、長野原一本松遺跡（21）、西部地区では坪井遺跡[6]で確認されているのみである。それまでの岩陰での生活から早期前半撚糸文期になると丘陵上のオープンサイトでの集落に移行していくようである。また石畑Ⅰ岩陰に代表される岩陰遺跡は丘陵部の自然に迫り出した岩場を利用して居住・墓域とするものであるため、県内では分布・遺跡数ともに限定される。吾妻川流域はそのほとんどが河川や渓沢に沿う山岳傾斜地帯であることから岩陰遺跡の立地する条件を満たしているといえよう。岩陰遺跡は長野原町域で21遺跡34ヶ所確認されており、その大半がこの東部地区に集中している。この岩陰遺跡の多さは本町の原始古代の大きな特徴の一つでもある。

②前期

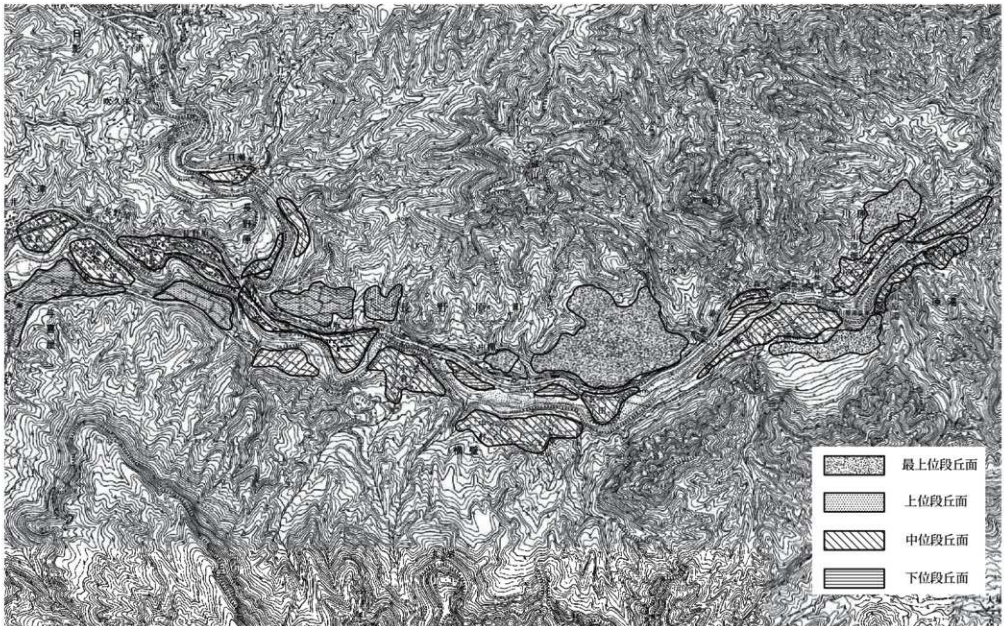
前期の遺跡も少ないが漸増の傾向にある。立地は丘陵上が多いが、河岸段丘へも集落が広がる傾向が見受けられる。前期前半の遺跡は東部地区より西部地区で顕著であったが近年の調査で東部地区の該期の状況が明らかとなってきている。坪井遺跡では前期初頭（花積下層式期）の住居跡と土坑が検出され、土坑内で花積下層Ⅰ式と長野県で主体的な塚田式との共伴が初めて確認された[7]。暮坪遺跡では前期前葉（二ッ木式期）の住居跡[8]、長畝Ⅱ遺跡（29）では前期前葉（関山式期）の土坑と前期前葉（黒浜式期）の住居跡土坑が検出されている。東部地区では上原Ⅰ遺跡（60）で前期初頭の住居跡が15軒検出され、花積下層Ⅰ式土器が主体で塚田式土器が共伴するかたちで追認されている[9]。檜木Ⅱ遺跡（53）で前期前葉（黒浜式期）の住居跡が検出されている他、横壁中村遺跡（42）では埋没河道で少量の破片が認められている。前期後半は檜木Ⅱ遺跡、三平Ⅰ遺跡（87）、林中原Ⅰ遺跡（64）で前期後葉（諸磯式期）の住居跡や土坑、川原湯勝沼遺跡（75）で前期末葉の土坑が検出されている以外は遺構外の出土である。

③中期

中期の遺跡は他時期に比して最も多い。中期前半は県内でも極めて限られた検出事例で少ないが、丘陵上あるいは最上位段丘に占地しているようである。後半になると河岸段丘の平場を中心として積極的な居住区域を展開している。中期前半の集落は近年東部地区の丘陵上あるいは最上位段丘に立地する遺跡で発見されはじめている。中期初頭（五領ヶ台式期）の遺跡は檜木Ⅱ遺跡（53）で住居跡３軒、上原Ⅱ遺跡（61）で屋外焼土遺構を伴う竪穴状遺構が３基・土坑21基、上原Ⅳ遺跡（63）で土坑１基が確認されている[10]。中期前葉（阿玉台式期）の遺跡は立馬Ⅱ遺跡（71）で五領ヶ台式期～阿玉台式期の住居跡11軒・土坑100基ほど、林中原Ⅰ遺跡（64）で住居跡が１軒、幸神遺跡（23）で土坑が検出されている。横壁中村遺跡（42）では中期中葉（勝坂式期）の住居跡、西久保Ⅰ遺跡（32）では同時期の土坑が確認されている。中期中葉（焼町類型期）の遺跡は幸神遺跡で焼町土器の深鉢を炉体土器とした住居跡、林中原Ⅱ遺跡（65）と横壁中村遺跡で焼町土器を主体とする住居跡がそれぞれ１軒ずつ確認されている他、上ノ平Ⅰ遺跡（85）では同時期の住居跡が12軒検出された。今年度、町営横壁上地改良事業の工事中に中期前半の水場遺構が発見され、山根Ⅴ遺跡（41）を追加した。全国的にみても古手の水場遺構である。西部地区では観奈遺跡[11]で中期前半の土坑８基、クヌギⅡ遺跡[12]で中期中葉の埋設土器が検出されているのみで、山岸Ⅱ遺跡[13]で少量の破片が認められたぐらいである。中期後半になると列石を伴う拠点集落が吾妻川流域地帯に分布を広げて出現する。長野原一本松遺跡（21）、横壁中村遺跡（42）を筆頭として近年の調査により林中原Ⅰ遺跡（64）、林中原Ⅱ遺跡（65）、東宮遺跡（84）、石川原遺跡（76）が新たに加わり[14]、西部地区では坪井遺跡に代表される。遺跡を大規模に調査している前６者に共通するのは中期後半に引き続き、後期前半（～加曽利Ｂ式期）まで継続して集落が営まれていることである。また坪井遺跡は前２者に比して規模は小さいが、弧状石列１基、住居跡19軒（拡張住居含む）、土坑49基が検出されている。土器は大きく４系統（①加曽利Ｅ式土器＜北関東系＞、②曽利・唐草文系土器＜信州系＞、③「郷土」式土器＜①と②の融合型式＞、④栃倉Ⅱ式土器＜越後系＞）が認められ、特に③の「郷土」式土器が該期の主体となる時期であり、環浅間山地域に分布し、小文化圏を形成していることが最近分かってきている[15]。この坪井遺跡出土土器の傾向は前６者出土土器、さらに県指定史跡「勘場木石器時代住居跡」[16]出土土器にも看取される。その他、向原遺跡（９）では中期末～後期初頭の敷石住居跡が検出されており、立地から拠点集落のひとつになる可能性が高



第 20 図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1/30,000）



第 21 図　遺跡周辺の河岸段丘分布図（1/30,000）

第３表　周辺の遺跡（遺跡番号は第 20 図と対応）

No	遺跡名	町No.	種別	時代	概要	備考
1	長野原城跡	85	城館跡	中世・近世	本報告。	文献 2,28,37,38,40,43,44,61,133,160
2	東貝瀬Ⅲ遺跡	66	散布地	縄文	本報告。	文献 2,28,29,32,59
3	嶋木Ⅰ遺跡	72	集落跡 その他	平安・近世・近代	本報告。	文献 2,16,23,28,29,32,59
4	嶋木Ⅱ遺跡	73	散布地	縄文・平安	黒曜石・磁器採集。平成 26 年度調査（町）。	文献 2,32
5	嶋木Ⅲ遺跡	74	散布地	縄文	石鏃・石器採集。	文献 2
6	東貝瀬Ⅰ遺跡	64	散布地	縄文		文献 2
7	東貝瀬Ⅱ遺跡	65	散布地	縄文		文献 2
8	町遺跡	219	その他	近世	平成 23・24 年度調査（事）。天明泥流に埋没した建物跡１棟・畑７枚のほか、畑下の土坑４基・小鍛冶等に関連した羽口や鉄サイ集中箇所１カ所を検出。平成 25・26・28 年度調査（町）。建物跡１棟・井戸１基のほか畑・道・炉跡などを検出。	文献 2,32,135,161,162
9	向原遺跡	75	集落跡	縄文・弥生・平安	平成５・19・20 年度調査（町）縄文後期住居・中期後半埋甕、弥生中期土坑、平安住居・陥しび等を検出。	文献 2,6,9,19,20,41,47,68
10	貝瀬Ⅰ遺跡	67	散布地	縄文・平安	石斧採集。	文献 2
11	貝瀬Ⅱ遺跡	68	散布地	縄文		文献 2
12	貝瀬Ⅲ遺跡	69	散布地	縄文・平安		文献 2
13	居家以岩陰群	80	その他	縄文・弥生・平安	岩陰６ヵ所にわたる。平成 26 ～学術調査（国學院大學）縄文早期の堆積人骨 20 体、土坑を検出。縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器・陶磁器・獣骨等出土。	文献 2,53,62
14	ガンバ沢岩陰	79	その他	不明		文献 2
15	池郎岩陰群	81	その他	縄文・弥生	岩陰４ヵ所にわたる。	文献 2
16	貝瀬岩陰群	82	その他	不明	岩陰２ヵ所にわたる。	文献 2
17	火打花Ⅰ遺跡	70	散布地	縄文		文献 2
18	火打花Ⅱ遺跡	71	散布地		石斧出土。	文献 2
19	仙下岩陰	76	その他	不明		文献 2
20	駒倉岩陰	78	その他	不明		文献 2
21	長野原一本松遺跡	63	集落跡	縄文・弥生・古墳・平安・中世・近世	平成 22 年度調査（町）、平成６～20 年度調査（事）縄文中期後半～後期を中心とする拠点集落跡。平安住居、中世掘立柱建物等多数検出。	文献 1,2,22,37,55,67,68,76,80,81,87,88,92,95,109,112,116,119,135,143~156 旧一本松遺跡
22	尾坂遺跡	201	その他	縄文・弥生・平安・近世	平成 23・25 年度調査（町）、平成６・７・11・18 ～ 23・25 ～ 30 年度調査（事）天明泥流で埋没した民家と麻畑、溝等を検出。畑下から縄文中期後半住居・後期土坑、弥生前期末再葬墓・土坑、平安住居、中世掘立柱建物等、近代田太子線長野原駅と考えられる建物跡を検出。	文献 25,29,60,76,96,128,138,144,155~160,162,~166
23	幸神遺跡	62	集落跡 その他	縄文・平安・近世	平成 21 年度調査（町）、平成８・９・14・17 年度調査（事）縄文中期中葉住居・土坑、平安陥し穴、古代の可能性のある畑跡を検出。	文献 2,22,76,110,145,151,153,154
24	久々戸遺跡	200	その他	縄文・弥生・近世	平成 19 年度調査（町）、平成９～12・14・15・27・28 年度調査（事）天明泥流で埋没した畑跡・小屋跡、弥生土坑、縄文中期末敷石住居を検出。	文献 47,79,83,94,97,98,140,146,149,151,152,164,165
25	遠西岩陰群	83	その他	不明	岩陰２ヵ所にわたる。	文献 2
26	小林家屋敷跡	211	屋敷跡	近世	平成 13・14 年度調査（町）天明泥流に埋没した昔妻の分限者小林助右衛門の屋敷跡。石垣１基・土蔵跡１棟・礎石建物跡２棟を検出。	文献 1,2,11 ～ 13,49,57,59,60,61,66,71,77
27	旧新井村跡	143	村落跡	近世	昭和 55 年度調査（町）天明泥流に埋没した村落。屋敷跡や用水池などを検出。南側台地上に墓地が残る。	文献 2,44,45,49,57,60,91
28	長岐Ⅰ遺跡	126	散布地	縄文・平安	中期、平成 15 年度調査（町）平安住居跡・土坑を検出。	文献 2,14
29	長岐Ⅱ遺跡	127	集落跡	縄文・平安	石斧採集。平成２・21・27 年度調査（町）前期住居跡・中期後半住居跡等、平安住居跡を検出。	文献 2,4,22,33,47
30	柳沢城跡	35	城館跡	旧石器・縄文・中世	平成４・５年度調査（町）中世：郭跡、堀切、土居、礎石、腰曲輪、石組遺構、溝、陶磁器、鉄製品、銅製品、石臼等を検出。	文献 1,2,5,37,38,40,41,43,52,61
31	丸岩城跡	34	城館跡	中世	土塁や水場が遺存。	文献 1,2,37,38,40,41,43,52,61
32	西久保Ⅰ遺跡	31	集落跡	縄文・弥生・平安・中世・近世	平成６・10・12・29 年度調査（事）縄文中期末葉の敷石住居・水場遺構等を検出。	文献 2,76,81,96,143,146,149,166
33	西久保Ⅱ遺跡	32	散布地	平安	平成 28・29 年度調査（町）。	文献 2
34	西久保Ⅲ遺跡	33	散布地	不明		文献 2
35	西久保Ⅳ遺跡	216	その他	縄文・平安・近世	平成 17・26 年度調査（町）、平成 12・21・23 年度調査（事）縄文後期前葉掘立柱建物、平安時代住居・掘立遺構、天明泥流に埋没した畑跡・平坦面・道路・溝を検出。泥流の天端を確認。	文献 17,32,81,129,149,158,159
36	西久保Ⅴ遺跡		その他	近世	平成 27 年度調査（町）、平成 29 年度（事） 天明泥流に埋没した畑跡を検出。	文献 33,81,165,166
37	山根Ⅰ遺跡	26	散布地	平安	平成 27・29 年度調査（町）。	文献 1,2,33,89 『県遺跡地図』No.3118 旧山根Ⅰ遺跡 （中村遺跡）
38	山根Ⅱ遺跡	28	散布地	平安・近世		文献 2
39	山根Ⅲ遺跡	29	散布地 集落跡	縄文・弥生・平安・近世	平成 16・17・30 年度調査（町）、平成 10・13・18 年度調査（事）縄文中期後半住居跡・土坑、中近世の溝等を検出。	文献 2,16,17,76,96,110,147,150,155
40	山根Ⅳ遺跡	30	散布地	縄文・平安	縄文中期：チャート片出土。平成 19・29 年度調査（町）	文献 2,19

41	山根Ⅴ遺跡	225	その他	縄文	平成 30 年度調査（町） 縄文中期前半の水場遺構の一部を検出。	
42	横壁中村遺跡	24	集落跡墓その他その他	縄文・弥生・平安・中世・近世	平成8～18・30 年度調査（事）縄文中期後半～後期を中心とした拠点集落跡。平安住居跡も含めて 250 軒以上を検出。中近世掘立柱建物跡、礎石建物、土坑墓、塚など多数検出。	文献 1,2,37,41,60,76,80~82,84,86,88~90,92,99,101,104,113,114,120,121,123,126,131,133,134,145~155 旧上野Ⅱ遺跡
43	横壁勝沼Ⅰ遺跡	23	集落跡墓その他	縄文・弥生・平安・中世・近世	平成6・7 年度調査（事）縄文土坑、平安住居を検出。植先形尖頭器1点長採。	文献 1,2,76,81,96,143,144 『県遺跡地図』No.3118 旧勝沼遺跡（東平遺跡）旧横壁勝沼遺跡
44	横壁勝沼Ⅱ遺跡	223	散布地その他	縄文	平成 29・30 年度調査（町）。	
45	横壁勝沼Ⅲ遺跡	224	集落跡	平安	平成 29・30 年度調査（町）。	
46	上野Ⅰ遺跡	21	散布地	縄文・弥生・平安	平成 29・30 年度調査（町）	文献 2,76
47	上野Ⅱ遺跡	22	散布地	縄文・平安	平成 29・30 年度調査（町）	文献 2
48	御嶽山岩陰	57	その他	不明		文献 2
49	蜂ッ沢岩陰	56	その他	縄文	打製石斧出土。	文献 2
50	二反沢遺跡	52	社寺その他	中世・近世	平成 28 年度調査（町）、平成 12 年度調査（事）中世の石塔を伴う土坑ほか、願治関連遺物、近世の畑跡を検出。	文献 2,81,88,103,149 旧大興院堂跡
51	滝沢観音岩陰	55	その他	不明	平成 28 年度調査（町）「大日堂」の堂宇と石仏群。北側石仏群前面の沢で陰構を検出。	文献 2
52	楢木Ⅰ遺跡	50	散布地	縄文・平安	平成 21 年度調査（事）平安住居・かまど屋・土坑・ピット・溝・焼土・集石、江戸礎石建物等を検出。	文献 2,129,158
53	楢木Ⅱ遺跡	51	集落跡	縄文・平安・中世・近世	平成 12 年度調査（町）、12・13・16・17 年度調査（事）縄文早期前半（燃糸文系）住居・前期住居・中期初頭住、平安住居、中世の掘立柱建物群を検出。「三家」の墨書土器、刻字「称」をもつ石製帯飾車出土。	文献 2,6,10,76,111,118,149,150,153,154
54	楢木Ⅲ遺跡	202	散布地	縄文・弥生・平安・中世	平成 10 年度調査（事）縄文前～後期、弥生中期：包含層。	文献 81,147
55	中櫃Ⅰ遺跡	49	散布地	縄文・平安	平成 18・23・28 年度調査（町）、平成 11・29 年度調査（事）縄文早期包含層、平安住居跡4軒、土坑 17 基。黒曜石片、チャート片出土。	文献 2,18,25,31,148,166 旧中櫃遺跡
56	中櫃Ⅱ遺跡	203	その他	近世	平成 11 ～ 13・15・28・30 年度調査（事）天明泥流で埋没した畑跡、および安永九年と考えられる堰没畑跡。	文献 2,47,53,56,57,59,60,71,76,77,97,148 ～150,152,165
57	林宮原遺跡	48	集落跡	縄文・古墳・平安	平成 14 ～ 16・18 ～ 20・24・28・29 年度調査（町）、24・27 年度調査（事）縄文中期～後期包含層、古墳後期住居、平安住居、土坑、中近世掘立柱建物群を検出。	文献 1,2,12,14 ～16,18~20,24,28,136,161,164 『県遺跡地図』No.3127 旧宮原遺跡（神社前遺跡）
58	下原遺跡	204	集落跡その他	縄文・弥生・古墳・平安・中近世	平成 12・13・15・16・29・30 年度調査（事）古墳後期住居、平安住居、中世の屋敷跡、中世～近世の畑跡を検出。	文献 2,60,71,76,77,82,91%~98,106,149,150,152,153,166
59	下田遺跡	47	集落跡その他	縄文・近世	平成6・7・9・26・28・29 年度調査（事）天明泥流に埋没した民家・畑跡を検出。	文献 2,60,63,76,81,96,142~144,146,163,165,166 『県遺跡地図』No.3126 旧下原（下田）遺跡
60	上原Ⅰ遺跡	41	散布地	縄文・平安・近世	平成 18・23・24 年度調査（町）、平成9・24 年度調査（事）縄文早期末～前期初頭住居・中期後半住居、弥生前期末土坑、古墳前期住居・中期土坑、平安住居・陥し穴等を検出。	文献 2,18,25,28,31,54,60,76,96,136,146,161
61	上原Ⅱ遺跡	42	散布地	縄文・平安	平成 18・23 年度調査（町）、平成 16 年度調査（事）縄文中期初頭竪穴状遺構・焼土遺構・土坑、平安陥し穴。	文献 2,18,25,31,76,153
62	上原Ⅲ遺跡	43	散布地	縄文・弥生・平安	平成 18・23 年度調査（町）、平成 25・27 年度（事）縄文中期後半包含層、弥生中期土坑、平安竪穴住居、住居跡、焼土遺構、陥し穴等。	文献 2,18,25,31,136,140,162,164
63	上原Ⅳ遺跡	44	散布地	縄文・近世	平成 14・18・20・24 年度調査（町）、平成 15・25・26 年度調査（事）縄文中期初頭土坑・後期敷石住居・配石遺構・晩期～弥生包含層、古墳後期住居、平安住居、近世溝等を検出。下駄、曲物の底、農具、石鉢、陶磁器が出土。	文献 2,12,18,20,28,31,76,88,110,129,152,162 163
64	林中原Ⅰ遺跡	45	集落跡城館跡	縄文・平安・中世・近世	昭和 37 年度（館大）、平成 14 ～ 22・25 年度（町）、平成 16・20・21・30 年度調査（事）縄文中期後半～後期の拠点集落、縄文前期敷石住居・土坑、中近世「林城」・竪穴状遺構・区画溝・掘立柱建物群を検出。	文献 1,2,12,14,16,23,29,31,37,40,45,54,76,88,133,153,157,158 旧中原Ⅰ遺跡
65	林中原Ⅱ遺跡	46	散布地	縄文・平安・中世・近世	平成 15 ～ 19・21・22・25 年度（町）、平成 16・20・21 年度調査（事）縄文中期後半～後期の拠点集落、墓尻 B 墓、弥生前期末～中期前半土坑・再葬墓か、中期前半住居、中近世掘立柱建物群。	文献 2,14,16 ～ 20,22,23,29,31,37,90,153,157,158 旧中原Ⅱ遺跡
66	花畑遺跡	205	集落跡	縄文・平安	平成 10 年～ 12 年度調査（事）平安住居跡・陥し穴多数検出。	文献 2,68,76,81,96,147~149
67	東原Ⅰ遺跡	38	散布地	縄文・平安・近世	平成 17・18・24・26 年度調査（町）、20 年度調査（事）縄文前期～中期後半の陥し穴・土坑、平安住居を検出。	文献 2,17,18,28,124,157
68	東原Ⅱ遺跡	39	散布地	縄文	平成 20・30 年度調査（事）縄文後期土器片、黒曜石片出土。	文献 2,107,124,140,157
69	東原Ⅲ遺跡	40	散布地	平安・近世	平成 15・18 年度調査（町）、20・21 年度調査（事）近世屋敷跡 1 カ所、土坑、ピット検出。	文献 2,14,18,124,157,158
70	立馬Ⅰ遺跡	37	集落跡墓その他	縄文・弥生・平安・中世・近世	平成 13・14・17 年度調査（事）縄文早期前半住居・包含層遺物多数・晩期住居跡、弥生中期住居・環帯墓、平安住居跡、縄文～平安の陥し穴を多数検出。	文献 1,2,68,76,79,90,105,150,151,154 旧立馬遺跡
71	立馬Ⅱ遺跡	213	集落跡	縄文・弥生・平安	平成 14 年度調査（事）縄文中期初頭～後半住居、縄文早期包含層、縄文～弥生陥し穴多数検出。	文献 87,102,151
72	立馬Ⅲ遺跡	215	集落跡	縄文・平安	平成 19 年度調査（事）縄文早期を中心とする集落跡。縄文住居・竪穴状遺構・集石・土坑等、平安土坑・陥し穴、中近世の土坑・溝を検出。	文献 76,79,117,156
73	久森沢Ⅰ岩陰群	53	その他	縄文・近世	岩陰 3 カ所にわたる。	文献 2,147
74	久森沢Ⅱ岩陰群	54	その他	近世		文献 2,147

75	川原湯勝沼遺跡	206	散布地 その他	不明	平成9・15・16・28年度調査（事）縄文晩期の埋甕、平安住居跡、天明泥流に埋没した畑跡を検出。	文献 59,60,70,71,76,77,81,85,96,100,146,152 153,165
76	石川原遺跡	17	散布地	縄文・平安・ 近世	平成20・26～29年度調査（事）天明泥流に埋没したムラ。平安住居、縄文中期後半～後期を中心とする拠点集落跡。	文献 2,137,156,163~165,167 北入遺跡（No.20）と統合
77	川原湯中原Ⅰ遺跡	16	散布地	不明	チャート片出土。平成19年度調査（町）、平成29年度調査（事）	文献 2,19,166 旧中原Ⅰ遺跡
78	川原湯中原Ⅱ遺跡	18	散布地	平安	平成17年度調査（町）	文献 2,17 旧中原Ⅱ遺跡
79	川原湯中原Ⅲ遺跡	19	散布地	不明	縄文中期：チャート片出土。平成28年度調査（事）	文献 2,165,166 旧中原Ⅲ遺跡
80	金花山砦跡	207	城館跡	縄文・弥生・ 平安・近世	平成12年度踏査（町・事）明治期の「川原湯真図」に「トリデアト」の記載あり。	文献 2,149
81	西ノ上遺跡	212	その他	縄文	平成18・26年度調査（町）、平成14・27・29年度調査（事）天明泥流に埋没した畑跡・道、縄文晩期土坑を検出。	文献 18,32,60,76,83,98,151,164,166
82	下湯原遺跡	217	不明	中・近世	平成27～30年度調査（事）天明泥流に埋没した畑跡・道・墓、平安住居を検出。	文献 164~166
83	西宮遺跡	7	散布地	縄文・近世	平成20・26～30年度調査（事）天明泥流に埋没したムラ。泥流埋没畑5区画以上、復旧溝10数本、ヤックラ、小屋と屋敷1棟を検出。	文献 2,157,163~165,167
84	東宮遺跡	208	その他	近世	平成12年度調査（町）、7～9・19～21・26～30年度調査（事）天明泥流で埋没したムラ。民家、それに伴う建物跡、畑跡等を検出。	文献 10,59,60,76,82~86,125,127,141,144~14 6,147,155~157,163~165,167
85	上ノ平Ⅰ遺跡	5	集落跡	平安	平成18・19・28年度調査（事）縄文中期中葉～後期初頭住居、平安住居・陥し穴を検出。皇朝十二銭の「貨観永宝」が出土。貨観永宝の出土は本例を含め県内で3例ある。	文献 2,37,75,76,81,115,139,155,156,165
86	上ノ平Ⅱ遺跡	6	散布地	不明	チャート片出土。	文献 2
87	三平Ⅰ遺跡	3	集落跡	縄文・弥生・ 平安・近世	平成10・16・17・24・30年度調査（事）。平成20年度調査（町）請確式期の住居跡、縄文時代早期後半～後期中葉の土坑。弥生時代中期初頭～中期前半の土坑、早期の押型文系土器も出土している。平安時代の陥し穴群、竪穴住居跡。近世の掘立柱建物跡。苧引金具をはじめとして、各時代とも長野県域と共通性が認められる。	文献 2,20,27,32,76,81,92,107,147,153,154,16 1
88	三平Ⅱ遺跡	4	集落跡	縄文・平安	平成16年度調査（事）縄文草創期～前期の土器・石器を多量に出土。掘立柱建物跡7棟ほかを含む中世屋敷跡1カ所。	文献 2,76,79,92,107,153
89	西宮岩陰	13	その他	不明	平成26年度調査（事）	文献 2,163
90	三ツ堂岩陰	12	その他	不明	堂宇・石仏群は平成20年度に本移設。平成28年度調査（事）	文献 2,165
91	温井Ⅰ遺跡	2	散布地	縄文・平安	縄文後期。	文献 2
92	温井Ⅱ遺跡	2	散布地	縄文	中期。	文献 2
93	二社平岩陰	11	その他	不明	岩陰遺跡。	文献 2
94	二社平遺跡	209	散布地	縄文・弥生・ 平安・近世	平成8・10・28・29年度調査（事）弥生後期土器片。近世畑。	文献 81,96,145,147,165,166
95	石畑Ⅰ岩陰	9	墓その他	縄文	昭和53年度調査（県）縄文草創期～晩期：土器片、獣骨、人骨など出土。 平成29・30年度調査（事）	文献 2,38,39,41,44,48,58,76,147,166
96	石畑Ⅱ岩陰	10	その他	不明	岩陰遺跡。	文献 2
97	石畑遺跡	210	散布地 その他	縄文・弥生・ 近世	平成7・9・10・29年度調査（事） 縄文前期包含層。弥生後期土坑。近世畑。	文献 2,54,60,81,96,144,146,147,166

い。最近の調査では尾坂遺跡（22）で中期後半の住居跡が6軒検出されており、うち3軒が敷石住居と確認され、敷石住居出現期の可能性がある。尾坂遺跡の対岸に位置する久々戸遺跡（24）でも中期末の遺存状帯の良い敷石住居が検出され、町では本年度に移築保存を実施した。

④後期

後期の遺跡は規模は縮小するものの吾妻川流域の比較的広い範囲に分布する。上記の中期後半の遺跡の他、西部地区では本町で初めて敷石住居跡を検出したクヌギⅡ遺跡[17]、向原遺跡（9）、滝原Ⅲ遺跡[18]、古屋敷遺跡[19]、東部地区では上ノ平Ⅰ遺跡（85）、上原Ⅳ遺跡（63）、林中原Ⅰ遺跡（64）、石川原遺跡（76）に代表される。後期初頭（称名寺式期）～後期中葉（加曽利B式期）までの敷石住居跡、掘立柱建物跡は長野原一本松遺跡（21）、横壁中村遺跡（42）で多く検出されている。長野原一本松遺跡では壁に板材の痕跡を遺す柄鏡形敷石住居跡や方形周礫を明瞭に遺す柄鏡形敷石住居跡が確認されている。また横壁中村遺跡では主軸全長9mにも及ぶ大形の柄鏡形敷石住居跡や配石墓群が検出されている。その他、林中原Ⅰ遺跡、上原Ⅳ遺跡、上ノ平Ⅰ遺跡でも後期初頭～前葉（称名寺式期～堀之内式期）の敷石住居跡等が検出されている。後期後葉（高井東式期）の住居跡は横壁中村遺跡（54）で3軒、久々戸遺跡で土坑が検出されているのみである。石川原遺跡では後期後半～晩期前半の住居跡、配石遺構、水場遺構が多数検出されている。後期終末（安行1・2式期）に関しては横壁中村遺跡（42）や立馬Ⅰ遺跡（70）で土器片が出土しているがいずれも遺構外である。

⑤晩期

晩期に関してはこれまで石畑Ⅰ岩陰で土器片が出土している他、横壁中村遺跡（42）で晩期末葉（千網式併行）の包含層が確認されているだけであった。遺構の検出は晩期前半は前述の石川原遺跡で確認されてきているものの、依然少なく、

後半（特に末葉～弥生中期）に関しては最近の調査で増えつつある。立馬Ⅰ遺跡（70）では晩期末葉の住居跡1軒、横壁中村遺跡では晩期末葉の住居跡2軒、埋甕1基、上原Ⅳ遺跡（23）・西ノ上遺跡では土坑1基が検出されている。立馬Ⅰ遺跡では南信松本盆地に分布する女鳥羽川式土器が出土している。さらに川原湯勝沼遺跡（75）からは該期の土坑が数基検出され、その中の1基は壺棺再葬墓であることが判明している。同一土坑に2個体が埋置されており、ひとつが中沢氏のいう「氷式突帯壺」[20]の上半部が逆位に、もう一方は浮線文系の半精製甕が正位の状態で出土している。この壺棺再葬墓は東日本でも最古級として注目されよう。その他、遺構外ではあるが久々戸遺跡（24）で氷式土器の浅鉢、向原遺跡（9）で大洞A′式まで遡ると考えられる土器片も確認されている。

（3）弥生時代

弥生時代の遺跡は分布調査の時点で後期に属する3遺跡のみであったが、縄文時代晩期末葉から弥生中期前半までの資料が増えてきている。遺跡は丘陵上あるいは最上位段丘に立地する傾向が強く、縄文時代早期や中期前半と共通しているようである。東部地区では本遺跡のほか長野原一本松遺跡（21）で中期前半までと考えられる土坑1基、横壁中村遺跡（42）では埋甕（再葬墓か）1基が検出され、東海地方に分布する樫王式土器の甕が出土している。下原遺跡（58）では集石遺構から中期前半を中心とした遺物が認められた。未報告ではあるが、林中原Ⅱ遺跡（65）では中期前半と考えられる住居跡4軒の他、前期末に遡る土坑墓（再葬墓か）、尾坂遺跡（22）でも前期末の再葬墓と思われる土坑や完形土器2個体を出土する土坑、貯蔵穴など、上原Ⅰ遺跡（60）では前期末の短頸壺を納めた土坑、三平Ⅰ遺跡（87）では前期末～中期前半の土坑が数基検出されている。西部地区では遺物出土量が少なく時期が判然としないものが多いが、坪井遺跡で中期初頭と考えられる住居跡1軒、土坑が5基[21]、向原遺跡（9）では前期に遡るものも含めて中期前半までの土坑が7基検出されている[22]。遺構外では外輪原Ⅰ遺跡、上ノ平遺跡で中期前半までの資料が比較的まとまっている[23]。中期後半に関しては、立馬Ⅰ遺跡（70）で住居跡2軒と土器棺墓2基を含む土坑が数基、後期に関しては、石畑遺跡（97）で土坑1基が確認されているのみである。分布調査時に居家以岩陰群（13）、寺久保遺跡、新田原Ⅰ遺跡で土器片が表採されている他、立馬Ⅰ遺跡では遺構外で、二社平遺跡（94）周辺で後期～古墳時代前期に比定される土器片が表採されている。

（4）古墳時代

これまで遺構外では他時期の遺物に混入するかたちで5世紀後半の土器片は坪井遺跡[24]、長野原一本松遺跡（21）、二社平遺跡（94）などで確認されてきたが、長野原町で古墳時代の集落として把握されている遺跡は皆無であった。平成15年度に最上位段丘面に立地する林宮原遺跡（57）で5世紀末～6世紀初頭の住居跡が1軒検出されたのが初例である。これに続いて平成16年度の調査で川原湯勝沼遺跡（75）で焼土を伴う土坑から同時期の土師器と遺構外で剣形模造品、下原遺跡（58）で同時期の住居跡1軒の他、土師器（片）がまとまって出土している。最近の調査では上原Ⅳ遺跡（63）でも5世紀後半～6世紀初頭の住居跡が2軒検出されている。これらは吾妻川に直面した最上位・中位段丘面の自然流路あるいはその周辺で出土していることから水に関連した祭祀遺構の可能性が高い。これら4遺跡で検出された遺構は時期的にほぼ合致しており注目される。さらに上原Ⅰ遺跡（60）で前期と考えられる住居跡から S字状口縁台付甕や坩形土器が出土し、中期の高坏を包含する土坑も検出され[25]、これまで空白であった時期の遺構検出事例が徐々にではあるが大規模調査の成果として増えてきている。

また昭和13年に刊行された『上毛古墳総覧』によれば、大津地区の「鉄塚」、与喜屋地区の「五輪塚」が前方後円墳と報告されている。また昭和11年刊行の『群馬県吾妻郡誌』では林地区の「御塚」が古墳とされ、合計3基が古墳とされている。「五輪塚」は現況で畑としてならされているが、「鉄塚」と「御塚」は円形の形状を保ち、現在は墓地として利用されている。その他、「てつか（てづか）」や林地区中棚にある「砂塚」に関しては『長野原町誌』で「宮内地区の「てづか」は鉄塚の訛音ではあるまいか。鉄塚の地名には城跡や屋敷跡などに多いといわれ、砂塚との対照がおもしろい」とあり、古墳という認識ではないが同じ林地区に少なくとも「塚」と付くものが3基あるということが注目される。いずれも古墳とするには根拠が薄く、今後の調査に期待したい。

（5）奈良・平安時代

奈良時代に該当する遺跡は分布調査時の羽根尾Ⅱ遺跡のみで増えていない。これに対して平安時代の遺跡の分布は町内全域に及んでおり、縄文時代とともに本町で原始古代の中心をなす時期である。調査した遺跡を挙げれば、西部地区では、坪井遺跡[26]、向原遺跡（9）、長畝Ⅰ遺跡（28）、長畝Ⅱ遺跡（29）、山岸Ⅱ遺跡[27]、東部地区では東宮遺跡（84）、上ノ平Ⅰ遺跡（85）、三平Ⅰ遺跡（87）、下湯原遺跡（82）、西ノ上遺跡（81）、石川原遺跡（76）、川原湯勝沼遺跡（75）、立馬Ⅰ遺跡（70）、東原Ⅰ遺跡（67）、榆木Ⅰ遺跡（52）、榆木Ⅱ遺跡（53）、花畑遺跡（66）、下原遺跡（58）、中棚Ⅰ遺跡（55）、上原Ⅰ遺跡（60）、上原Ⅲ遺跡（62）、上原Ⅳ遺跡（63）、林宮原遺跡（57）、横壁勝沼Ⅰ遺跡（43）、横壁勝沼Ⅲ遺跡（45）、山根Ⅳ遺跡（40）、上野Ⅰ遺跡（46）、上野Ⅱ遺跡（47）、横壁中村遺跡（42）、長野原一本松遺跡（21）、尾坂遺跡（22）などから住居跡や掘立柱建物跡、陥し穴などが検出され、該期集落として把握されている。この中で榆木Ⅱ遺跡では9世紀後半～10世紀前半の住居跡が38軒、竪穴遺構3基が検出され、「長」・「三家」の墨書土器と刻字「称」をもつ石製紡錘車、上ノ平Ⅰ遺跡では住居跡が20軒検出され、県内2例目となる皇朝十二銭「貞観永寶」が出土しており注目される。この他、上原Ⅲ遺跡では鍛冶工房跡1軒・住居跡11軒・焼土遺構6基・陥穴29基など、中棚Ⅰ遺跡では住居跡4軒が検出され、そのうち全容が判明した2軒は一辺が6mを超える大形住居であった。このうちの1軒からは「赤」の墨書が大量に出土しておりその性格が注目される。

（6）中　世

吾妻流域地帯には中世城館跡が点在している。その立地は当時の道との関連性が強く、分岐点の丘陵上など交通の要衝に多い。西から羽根尾城跡[28]、長野原城跡（1）、丸岩城跡（31）、柳沢城跡（30）、金花山砦跡（80）などがあり、その他に林城跡（64）、林の烽火台[29]などといわれている箇所も存在する。これらはいずれも山城である。この中で丸岩城は「丸屋の要害」として『加沢記』にも記され、節理の発達した岩山の山頂に立地している。この丸岩城跡の北西麓に里城としての柳沢城跡が位置し、山城部と丘城部から成る本城を構えている。この柳沢城跡の一部が発掘調査されており、郭跡・堀切・土居・礎石建物・腰曲輪・石組遺構・溝・柵列などが検出されている。遺物のほとんどが礎石建物から出土しておりかつ豊富である。陶器・鉄製品・銅製品・石臼などが出土しており、特に陶器類は常滑系大甕・古瀬戸三耳壺・古瀬戸菊皿・珠洲系陶器甕の他、輸入陶磁器である景徳鎮窯梅瓶などが準完形で出土している。また最近の調査で林中原Ⅰ遺跡範囲内に林城跡が確認され、その範囲や構造が明らかになりつつある。金花山砦跡は明治期の絵図『川原湯真図』に「トリデアト」の記載があったことから平成12年度に町教委と事業団で踏査して堀切などを確認した。

近年は河岸段丘面の遺跡でも該期の遺構が検出されはじめており、集落として把握されるようになっている。それらを列挙すると立馬Ⅰ遺跡（70）、林宮原遺跡（57）、榆木Ⅱ遺跡（53）、二反沢遺跡（50）、下原遺跡（58）、横壁中村遺跡（42）、西久保Ⅰ遺跡（32）、長野原一本松遺跡（21）、尾坂遺跡（22）となる。このうち、横壁中村遺跡と下原遺跡では石垣で区画された屋敷跡がそれぞれ1棟、長野原一本松遺跡では掘立柱建物群と竪穴状遺構、榆木Ⅱ遺跡でも掘立柱建物群、二反沢遺跡では区画跡のほか羽口や鉄サイなど鍛冶関連遺構などが検出されており注目される。

（7）近　世

長野原町は浅間火山・白根火山の麓に位置し、古くから度重なる火山災害を被っていることが地層からも窺える。浅間火山の主な噴火活動を概観すれば、すでに9万年前には黒斑山は活動をはじめており、2.4～2.1万年前に黒斑山崩壊を伴う噴火活動があった。その時発生した泥流は、応桑泥流・中之条泥流・前橋泥流と確認された地点ごとに異なる名称で呼ばれている。その後は仏岩火山の活動期で浅間板鼻黄色軽石（As-YP）降下をもたらした。1万年前頃から前掛山の活動が始まり、その噴火により縄文時代中期の浅間D軽石（As-D）、4世紀の浅間C軽石（As-C）、天仁元（1108）年の浅間B軽石（As-B）、天明3（1783）年の浅間A軽石（As-A）という4つの大きなテフラがもたらされた。これらは、浅間山の活動史を如実に物語る証であり、群馬県内の考古年代の指標にもなっている。その中でも天明3（1783）年の噴火は軽石降下後に襲った泥流（鎌原火砕流）により吾妻川・利根川流域沿いの町村に甚大な被害をもたらし、有史以来の記録的火山災害

として知られている。この泥流によって埋没した嬬恋村の旧鎌原村が昭和54年から調査され、「延命寺観音堂の石段」、「十日ノ窪」など天明の大噴火における被災遺跡として注目を集めたが[30]、翌年に本町でも山間地域若者定住環境整備モデル事業として陸上自衛隊によるグランド造成中に日待供養塔・石臼・農具などが出土し、旧新井村跡（27）の痕跡が確認された[31]。平成14年度には町立中央小学校の屋内体育館・プールの新築に伴って、当時の分限者小林助右衛門屋敷の一部が発見され、石垣・土蔵・礎石建物跡が調査されている[32]。また平成16年度には長野原市街地における下水道工事で建築部材・薬缶・鉄釜・石臼の他、「青面金剛塔」が泥流中から出土しており、旧長野原村が壊滅的状況であった一端を垣間見る発見があった[33]。さらに平成20年度に草木原遺跡[34]、平成23年度に小滝Ⅱ遺跡[35]で天明泥流に埋没した畑跡が検出され、立石村・羽根尾村の被災状況も確認された。

近年、ダム関連工事に伴う発掘調査により、これまで認識されていなかった下位・中位段丘で泥流に埋もれた遺跡が相次いで発見された。それらを列挙すると、本遺跡群の他、町遺跡（8）、下田遺跡（59）、下原遺跡（58）、中棚Ⅱ遺跡（56）、西宮遺跡（83）、東宮遺跡（84）、石川原遺跡（76）、石畑遺跡（97）、西ノ上遺跡（81）、川原湯勝沼遺跡（75）、横壁勝沼Ⅰ遺跡（43）、横壁中村遺跡（42）、西久保Ⅳ遺跡（35）、西久保Ⅴ遺跡（36）、尾坂遺跡（22）、久々戸遺跡（24）などがあり、現在も継続調査中である。これらの遺跡では主として畑跡・ヤックラ・道・石垣・溝・井戸・覆屋構造物などが検出されている。現時点での成果として天明泥流に埋まった畑景観の復原や「ツカ」や平坦面から推定される「単位畑」の構造、さらには泥流とその逆級化構造のメカニズムなどに関して詳細な検討がなされている。また東宮遺跡、西宮遺跡、尾坂遺跡、下田遺跡などでは民家跡も検出されている。特に東宮遺跡は泥流に埋没した川原畑村を面的に調査した貴重な発見である。建物跡が14棟のほか畑20区画・道３条・溝６条・石垣10基・集石１基・土坑８基を検出した。通常遺存しない建築部材や漆器など植物遺存体の検出例が多く、当時の川原畑村の景観復原はもとより、近世建築学、民俗学など多角的な分析に寄与する部分が大きいと考えられる。さらに隣接する西宮遺跡では埋没畑とともに南北方向に10数本の復旧溝が検出され、被災後の復旧の痕跡が本町ではじめて確認された。

また推定される泥流到達範囲外でも該期の遺構・遺物は確認されている。林中原Ⅱ遺跡（65）、上原Ⅳ遺跡（63）、二反沢遺跡（50）、檜木Ⅰ遺跡（52）、幸神遺跡（23）、長野原一本松遺跡（21）が該当する。このうち上原Ⅳ遺跡では溝（旧河川流路）を検出しているがそこから下駄や曲物の底・農具・石鉢・陶磁器など生活道具が出土している。

註

1．文献２。
2．主に下位・中位段丘で発見された天明泥流に埋もれた遺跡を追加・範囲拡張した他、遺跡名の変更を実施した。その改訂版の詳細については「マッピングぐんま遺跡・文化財」(http://www2.wagmap.jp/pref-gunma/top/select.asp&npr=dtp=86/pl=3)で参照願いたい。本書では第３表および本章にできるだけ最新情報を記載した。
3．現時点では発掘調査が平成31年度まで、整理調査・報告書作成が平成32年度までの予定である。
4．(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2004『新田西沢遺跡 新田平林遺跡』
5．前庭部においても２mにもおよぶ厚さの灰層が検出されており、獣骨や押型文土器が出土している。今後は岩陰部の灰層との関係の解明が注目される。また今年度、考古学研究室によりリサーチデザインを示した遺跡のパンフレットが作成された。
6．文献26。平成23年度に実施した坪井遺跡の第８次調査で縄文時代早期前半の土坑２基を検出したほか、包含層からも遺物が多く出土した。口縁部の外反が強いものが多く、撚糸文よりも縄文施文のものが主体的で井草式併行と考えられる。
7．文献８・51。
8．文献９。
9．文献31・136。
10．文献31。平成18年度に実施した町営林土地改良事業に伴う試掘調査でも上原Ⅱ遺跡で土坑を検出したが、この試掘結果をもとにほ区内の埋蔵文化財の取り扱いや発掘調査区域を確定し、平成23年度～25年度の３年間を発掘調査、平成26年度に報告書刊行した。
11．文献35。
12．文献３・46。
13．文献25。

14. 文献137。その他は未報告。
15. 文献８・11・52・74など。
16. 文献39・42・44・47・50など。今年度から３カ年計画で整備事業を進めている。
17. 註12と同じ。
18. 文献７。
19. 文献１。
20. 中沢道彦　1998「「氷１式」の細分と構造に関する試論」『長野県小諸市氷遺跡発掘調査資料図譜』第三冊　氷遺跡発掘調査　資料図譜刊行会
21. 註10と同じ。
22. 文献６。未報告資料が多くあり、今後資料紹介する予定である。
23. 文献65。
24. 註７・15と同じ。
25. 註10と同じ。
26. 註７・15と同じ。
27. 註13と同じ。
28. 文献１・２・37・38・40・43・44。
29. 文献43。
30. 嬬恋村教育委員会　1981『鎌原遺跡発掘調査概報　浅間山噴火による埋没村落の研究』
　　1994『埋没村落　鎌原遺跡発掘調査概報（よみがえる延命寺）』
　その他文献45・47・53など。
31. 文献44・45。
32. 文献13・77。かみつけの里博物館 2007『第16回特別展　江戸時代、浅間山大噴火』
33. 町遺跡が包蔵地外であった時期の発見である。なお、「青面金剛塔」は雲林寺参道に安置されている。
34. 文献１・２・17・20・37。
35. 文献26。

参考文献（第３・４・７・10表の文献番号に対応）

番号
1. 長野原町　1976『長野原町誌』上巻
2. 長野原町教育委員会　1990『長野原町の遺跡－町内遺跡詳細分布調査－』長野原町埋蔵文化財調査報告第１集
3. 長野原町教育委員会　1990『クヌギⅡ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第２集
4. 長野原町教育委員会　1992『長欠Ⅱ遺跡　坪井遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第３集
5. 長野原町教育委員会　1995『柳沢城跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第４集
6. 長野原町教育委員会　1996『向原遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第５集
7. 長野原町教育委員会　1998『滝原Ⅲ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第６集
8. 長野原町教育委員会　2000『坪井遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第７集
9. 長野原町教育委員会　2001『暮坪遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第８集
10. 長野原町教育委員会　2002『町内遺跡Ⅰ』長野原町埋蔵文化財調査報告第９集
11. 長野原町教育委員会　2003『町内遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第10集
12. 長野原町教育委員会　2003『町内遺跡Ⅲ』長野原町埋蔵文化財調査報告第11集
13. 長野原町教育委員会　2005『小林家屋敷跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第12集
14. 長野原町教育委員会　2004『町内遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第13集
15. 長野原町教育委員会　2004『林宮原遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第14集
16. 長野原町教育委員会　2005『町内遺跡Ⅴ』長野原町埋蔵文化財調査報告第15集
17. 長野原町教育委員会　2006『町内遺跡Ⅵ』長野原町埋蔵文化財調査報告第16集
18. 長野原町教育委員会　2008『町内遺跡Ⅶ』長野原町埋蔵文化財調査報告第17集
19. 長野原町教育委員会　2009『町内遺跡Ⅷ』長野原町埋蔵文化財調査報告第18集
20. 長野原町教育委員会　2010『町内遺跡Ⅸ』長野原町埋蔵文化財調査報告第19集
21. 長野原町教育委員会　2010『林中原Ⅰ遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第20集
22. 長野原町教育委員会　2011『町内遺跡Ⅹ』長野原町埋蔵文化財調査報告第21集
23. 長野原町教育委員会　2012『町内遺跡Ⅺ』長野原町埋蔵文化財調査報告第22集
24. 長野原町教育委員会　2012『林宮原遺跡Ⅷ』長野原町埋蔵文化財調査報告第23集
25. 東京電力株式会社群馬支店・長野原町教育委員会　2013『山岸Ⅱ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第24集
26. 長野原町教育委員会　2013『町内遺跡XⅡ』長野原町埋蔵文化財調査報告第25集
27. 長野原町教育委員会　2013『三平Ⅰ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第26集
28. 長野原町教育委員会　2013『町内遺跡XⅢ』長野原町埋蔵文化財調査報告第27集
29. 長野原町教育委員会　2014『町内遺跡XⅣ』長野原町埋蔵文化財調査報告第28集

30. 東京電力株式会社群馬支店・長野原町教育委員会　2014 『後原Ⅳ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第 29 集
31. 長野原町教育委員会　2015 『林地区遺跡群』長野原町埋蔵文化財調査報告第 30 集
32. 長野原町教育委員会　2016 『町内遺跡Ⅹ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 31 集
33. 長野原町教育委員会　2017 『町内遺跡Ⅺ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 32 集
34. 長野原町教育委員会　2018 『町内遺跡Ⅻ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 33 集
35. 長野原町教育委員会　2018 『観音遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第 34 集
36. 長野原町教育委員会　2019 『町内遺跡XIII』長野原町埋蔵文化財調査報告第 35 集
37. 小池富治郎編　1936 『吾妻郡誌』吾妻教育学会
38. 山崎　一・山口武夫　1972 『吾妻郡城塁史』
39. 塩野新一　1972 『群馬県吾妻郡長野原町（群馬県指定史跡）勘場本遺跡』
40. 山崎　一　1978 『群馬県古城塁址の研究』上巻
41. 中　隆之　1979 『石畑遺跡概報』長野原町教育委員会・高崎鉄道管理局
42. 群馬県　1988 『群馬県史』資料編 1
43. 群馬県教育委員会　1988 『群馬県の中世城館跡』
44. 長野原町教育委員会　1989 『長野原町の文化財』
45. 群馬県立歴史博物館　1995　第 52 回企画展『天明の浅間焼け』
46. 笠懸野岩宿文化資料館　1999　第 25 回企画展『群馬の注口土器展』
47. 上毛新聞社　1999 『群馬県遺跡大辞典』
48. 笠懸野岩宿文化資料館　2000　第 30 回企画展『利根川流域の縄文草創期』
49. かみつけの里博物館　2000　第 6 回特別展『鍋について考える』
50. 群馬県教育委員会　2001 『群馬の史跡（原始古代編）』
51. 笠懸野岩宿文化資料館　2004　第 39 回企画展『底の尖った土器』
52. 群馬県立歴史博物館　2004　第 77 回企画展『新発見考古速報展　群馬発掘情報　石室の入り口を通り抜けると・・・』
53. 浅間縄文ミュージアム　2004 『浅間嶽大焼』
54. 群馬大学教育学部編　2004 『尾崎喜左雄博士　調査収集考古遺物・調査資料目録』雄山閣
55. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団編　2005 『群馬の遺跡 2 縄文時代』
56. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団編　2005 『群馬の遺跡 7 中世～近代』
57. かみつけの里博物館　2007　第 16 回特別展『江戸時代、浅間山大噴火』
58. 原田昌幸　2007 『日本の美術 No495 縄文土器 草創期 早期』至文堂
59. 関　俊明　2010 『浅間山大噴火の爪痕－天明三年浅間山災害遺跡－』新泉社
60. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団編　2013 『自然災害と考古学』
61. 宮坂武男　2015 『信濃をめぐる境目の山城と館　上野編』戎光祥出版
62. 國学院大學考古学研究室　2017 『群馬県吾妻郡長野原町居家以岩陰遺跡　2014 年度発掘調査報告書』 國学院大學文学部考古学実習報告　第 53 集
63. 関　俊明・諸田康成　1999 「天明三年浅間災害に関する地域史的研究」『研究紀要 16』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
64. 白石光男・山口逸弘　1999 「外輪原Ⅰ遺跡出土の縄文前期土器」『群馬考古学手帳 9』群馬土器観会
65. 富田孝彦　2000 「外輪原Ⅰ遺跡出土の弥生土器」『群馬考古学手帳 10』群馬土器観会
66. 谷藤保彦・関根慎二・今井和久　2002 「群馬県内出土の縄文時代石製装身具集成」『研究紀要 20』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
67. 関根慎二　2003 「群馬県における加曽利Ｅ式土器の地域相」『第 16 回縄文セミナー 中期後半の再検討』縄文セミナーの会
68. 石田　真　2004 「群馬県北西部における陥し穴の構築時期をめぐって－長野原町の事例を中心として－」『研究紀要 22』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
69. 関　俊明　2005 「天明三年浅間山噴火災害遺跡の調査と成果」『日本歴史』吉川弘文館
70. 関　俊明　2006 「天明泥流はどう流下したか」『ぐんま史料研究』24　群馬県立文書館
71. 中央防災会議　2006 「1783 天明浅間山噴火報告書」 内閣府
72. 藤巻幸男　2007 「縄文時代中期の住居内施設について－横壁中村遺跡覚書」『研究紀要 25』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
73. 谷藤保彦　2007 「加曽利Ｅ式の系統を引く土器群－北関東における後期初頭の様相－」『第 20 回縄文セミナー 中期終末から後期初頭の再検討』縄文セミナーの会
74. 関根慎二　2008 「浅間山を挟む縄文土器」『研究紀要 26』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
75. 山口逸弘　2009 「上ノ平遺跡 31 号住居跡出土土器の再検討」『研究紀要 27』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
76. 藤巻幸男　2009 「八ッ場ダム建設地域における調査遺跡一覧作成のしみん－出土遺物総量把握の効用－」『研究紀要 27』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
77. 黒澤照弘・天西雅広　2009 「茨城県、栃木県、群馬県内の江戸後期における生産と流通」『江戸後期における産民向け陶磁器の生産と流通　関東・東北・北海道編』
78. 山口逸弘　2010 「「勝坂系」土器に関する再検討」『研究紀要 28』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
79. 橋本　淳　2010 「中部地方における縄紋早期沈線紋土器の編年－八ッ場ダム関連遺跡出土資料の位置付け－」『研究紀要 28』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
80. 鈴木徳雄　2012 「堀之内式土器研究の諸問題－堀之内式の概観と周辺諸型式」『第 25 回縄文セミナー 縄文後期土器研究の現状と課題』縄文セミナーの会
81. 山口逸弘　2013 「吾妻川中流域における縄文時代中期後葉の土器様相－加曽利Ｅ１式古段階を中心として－」『研究紀要 31』（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
82. 黒澤照弘　2012 「東宮遺跡－天明三年８月５日の様相－」『江戸遺跡研究会会報№ 133』江戸遺跡研究会
83. 黒澤照弘　2013 「天明三年浅間山噴火災害と東宮遺跡」『月刊考古学ジャーナル（646）』ニュー・サイエンス社
84. 黒澤照弘　2013 「東宮遺跡における天明三年新暦八月五日の様相－調査成果から推測される天明泥流被害前の状況－」『研究紀要 31』（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
85. 伊藤美香・小原奈津子・黒澤照弘　2013 「東宮遺跡出土の纖維遺物について」『研究紀要 31』（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
86. 大塚昌彦　2014 「天明三年浅間泥流埋没遺跡の守随粋と高崎秤座」『群馬県立女子大学第２期群馬学センターリサーチフェロー研究報告集』 群馬県立女子大学群馬学センター

87. 山口逸弘　2015「吾妻川中流域における「郷土式」の一様相－報告書『長野原一本松遺跡（6）』を中心として－」『研究紀要33』（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

88. 小川卓也・宮田忠洋・向出博之　2015「北関東地域における後期注口土器の様相」『第28回縄文セミナー 縄文後期土器研究の現状と課題』縄文セミナーの会

89. 藤巻幸男・牒崎修一郎・能登健　2016「群馬県長野原町横壁中村遺跡の中近世墓と同地区における両墓制の研究」『研究紀要34』（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

90. 山口逸弘　2016「銅鐸状口縁曲隆線文土器について－「横壁類型」の提唱－」『地域考古学』地域考古学研究会

91. 大塚昌彦　2016「天明三年浅間泥流下出土の守随秤」『群馬文化』327　群馬県地域文化研究協議会

92. 谷藤保彦・盛谷昌彦　2017「群馬県内出土の石棒・石刀集成－縄文時代後期前葉以降－」『研究紀要35』(公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

93. 鈴木徳雄　2018「礫敲後期前半における土器型式の存立構造－関東信越地域の「型式と諸"類型"－」『地域考古学３号』地域考古学研究会

94. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1998『長野原久々戸遺跡』県道長野原草津口停車場線道路（橋梁）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

95. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2002『長野原一本松遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第１集

96. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2002『八ッ場ダム発掘調査集成（１）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第２集

97. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2003『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査　報告書　第３集

98. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2004『久々戸遺跡（２）・中棚Ⅰ遺跡（２）・西ノ上遺跡・上郷Ａ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第４集

99. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2005『横壁中村遺跡（２）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第５集

100. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2005『川原湯勝沼遺跡（２）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第６集

101. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2006『横壁中村遺跡（３）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第７集

102. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2006『立馬Ⅱ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第８集

103. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2006『上郷Ｂ遺跡　廣石Ａ遺跡　二反沢遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第９集

104. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2006『横壁中村遺跡（４）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第10集

105. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006『立馬Ⅰ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第11集

106. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2007『下原遺跡Ⅱ』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第12集

107. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2007『三平Ⅰ・Ⅱ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第13集

108. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2007『横壁中村遺跡（５）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第14集

109. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2007『長野原一本松遺跡（２）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第15集

110. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2008『幸神遺跡・上原Ⅳ遺跡・山根Ⅲ遺跡（２）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第17集

111. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2008『檜木Ⅱ遺跡（１）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第18集

112. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2008『長野原一本松遺跡（３）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第19集

113. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2008『横壁中村遺跡（６）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第20集

114. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2008『横壁中村遺跡（７）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第22集

115. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2008『上ノ平Ⅰ遺跡（１）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第23集

116. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2008『長野原一本松遺跡（４）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第24集

117. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2009『立馬Ⅲ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第26集

118. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2009『檜木Ⅱ遺跡（２）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第27集

119. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2009『長野原一本松遺跡（５）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第28集

120. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2009『横壁中村遺跡（８）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第29集

121. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2009『横壁中村遺跡（９）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第30集

122. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2010『横壁中村遺跡（10）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第33集

123. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2010『横壁中村遺跡（11）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第34集

124. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2010『東原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第35集

125. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2011『東宮遺跡（１）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第36集

126. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2012『横壁中村遺跡（12）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第37集

127. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2012『東宮遺跡（２）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第38集

128. 群馬県・(公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2012『尾坂遺跡』社会資本整備総合交付金事業（活力創出基盤整備）長野原草津口駅含整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第546集

129. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2012『檜木Ⅰ遺跡　上原Ⅳ遺跡（２）　西久保Ⅳ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査　報告書　第39集

130. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2013『長野原一本松遺跡（６）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第40集

131. （公財）入都馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2013『横壁中村遺跡（13)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第41集

132. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2014『長野原一本松遺跡（７）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第42集

133. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2014『林中原Ⅰ遺跡　長野原城跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第43集

134. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2014『横壁中村遺跡（14)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第44集

135. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2015『町遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第45集

136. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2015『上原Ⅰ遺跡　上原Ⅲ遺跡　林宮原遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第46集

137. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2016『林中原Ⅰ遺跡（１）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第47集

138. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2016『尾坂遺跡（２）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第48集

139. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2017『上ノ平Ⅰ遺跡（２）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第49集

140.（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2017『上原Ⅱ遺跡（2）　久々戸遺跡（3）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第50集
141.（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2017『東宮遺跡（3）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第51集
142.（公財）人群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2017『下田遺跡（2）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第52集
143.（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1995『年報14』
144.（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1996『年報15』
145.（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1997『年報16』
146.（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1998『年報17』
147.（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1999『年報18』
148.（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2000『年報19』
149.（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2001『年報20』
150.（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002『年報21』
151.（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2003『年報22』
152.（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2004『年報23』
153.（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2005『年報24』
154.（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2006『年報25』
155.（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2007『年報26』
156.（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2008『年報27』
157.（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2009『年報28』
158.（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2010『年報29』
159.（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2011『年報30』
160.（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2012『年報31』
161.（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2013『年報32』
152.（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2014『年報33』
163.（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2015『年報34』
164.（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2016『年報35』
165.（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2017『年報36』
166.（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2018『年報37』
167.（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・長野原町教育委員会　2018『発掘された八ッ場の軌跡』

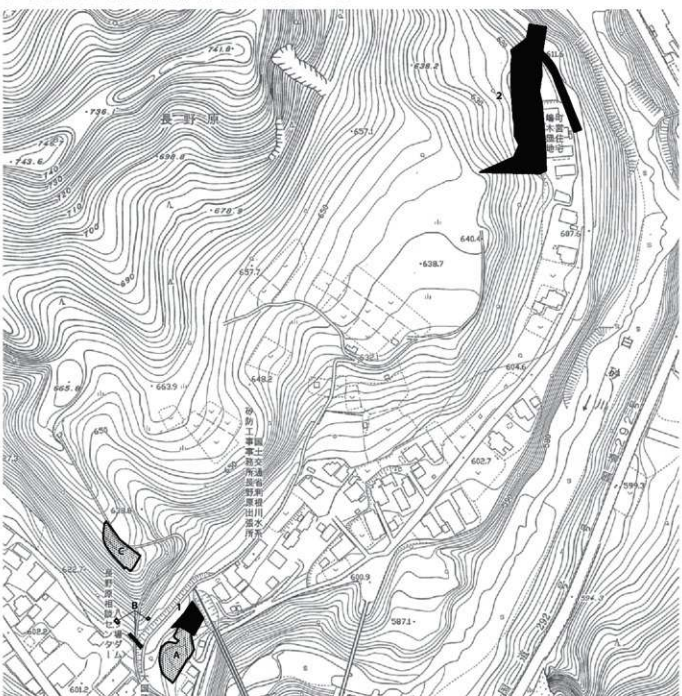
第１編

長野原城跡

第１章　既往の調査

本調査は長野原城跡の第１次調査にあたる。第２次調査は本書序説で報告している。この他に本調査に先駆けて、（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団により Ａ～Ｃ地点の発掘調査が実施されている（第 22 図・第４表）。

Ａ～Ｃ地点はいずれも平成 23 年度に県道林長野原線建設工事に先立って実施された。Ａ～Ｃ地点は長野原城跡の南東部にあたり、Ａ地点は丘陵下の白砂川右岸の平担部、Ｂ地点は丘陵先端部南斜面、Ｃ地点は丘陵先端部である。Ａ地点では天明泥流下畑の単位畑２枚と低地部が検出された。天明畑は天明泥流後の洪水により削平され、その後堆積した洪水層を確認している。本調査区と隣接しており、南東側の単位畑と同一であることが判明している。Ｂ地点では人力により３本のトレンチを設定し、南傾斜面を東西に走る幅１ｍの道が検出され、渡来銭と思われる銭が１枚出土している。Ｃ地点では、城跡に関連する土塁や堀又はそれらに関連する建物跡等の存在が想定されたが、明確な遺構は検出されず、城が機能していた中世の在地土器である内耳土器（鍋）片の出土が確認されている。



第 22 図　長野原城跡調査地点位置図（1/2,150）

第４表　長野原城跡既往調査一覧（文献番号は序説参考文献に対応）

番号	調査年度	調査機関	原因 種類	調査面積 （開発面積）	概要	備考
1	**平成24年度**	**〃**	**町道長野原線 本調査**	**110㎡ （190㎡）**	**本報告**	**文献28**
2	平成26年度	〃	町道長野原線 確認調査	53.6㎡ （4,440㎡）	遺構・遺物なし	文献32
A	平成23年度	（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団	県道林長野原線 本調査	630㎡ （630㎡）	江戸天明畑１・平坦面２・包含層（縄文～江戸）	文献133・160
B	〃	〃	〃	4,483㎡ （4,483㎡）	江戸天明畑７・建物跡１・土坑４・鍛冶関連遺構１	
C	〃	〃	〃	213㎡ （213㎡）	江戸天明畑１・道１	

第２章　調査の経過

第１節　発掘調査

発掘調査は、平成 24 年 10 月１日から 10 月４日にわたって実施された。

10 月１日、午前中に調査範囲の草刈り、午後に表土掘削開始。天明泥流下畑を検出。

10 月２日、表土掘削午前中で完了。ジョレンかげ・天明畑面精査、サブトレ２本設定。

10 月３日、泥流によるキズ痕を数箇所確認（北方向）。株痕検出範囲設定。測量は４分の１程終了。遺物は各サブトレで１点ずつ、畑面直上で磁器片、攪乱で内耳土器片３点出土。

10 月４日、泥流によるキズ痕を掘り下げ、株痕検出範囲で工具痕も確認、微細図作成、遺構平断面測量終了後に全景撮影。重機により、一部掘り下げて江戸時代以前の遺構がないことを確認して調査終了。撤収。

第２節　整理調査・報告書作成

基礎整理調査は、平成 25 年２月７日から２月 27 日にわたって実施された。発掘調査によって得られた遺物はテンパコで 0.5 箱、現場で作成した図面は５枚であった。整理調査は担当の他に作業員４名という体制であった。作業は複数遺跡の整理と併行して行われた。

遺物洗浄・注記作業・接合作業は同年２月７・８日に実施した。

遺物の実測・トレースは同年２月 11 日～ 15 日まで、併せて写真撮影、遺物実測図版のデジタル編集を実施した。

遺構図版・写真図版のデジタル基礎編集は同年２月 18 日～ 27 日まで実施した。

第３章　基本層序

本遺跡の基本層序は第 24 図Ａ地点で確認した。発掘調査での所見を併せると以下の通りである。

第Ⅰ層　暗灰褐色土

いわゆる表土で、浅間Ａ軽石（以下、AS-A 軽石）を疎らに含んでいる。上位は畑の耕作土で拳大の礫を多く含んでいる。

締まりは上位が弱く、下位はやや強い。

第Ⅱ層　茶褐色砂質土

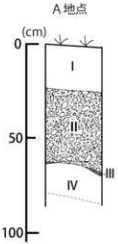
いわゆる天明泥流で全体的に砂質で締まりは弱い。人頭大～の焼石（黒石）を含んでいる。本地点での層厚は 43㎝である。

第Ⅲ層　軽石層

いわゆる AS-A 軽石である。天明３（1783）年新暦の７月 27 日～ 29 日に北東方向に降った軽石にあたる。本地点での層厚は２～３㎝である。

第Ⅳ層　暗褐色土

いわゆる天明期の表土面である。畑の場合は作土で茶褐色を呈する場合もある。



第 23 図　基本土層図（1/20）

第４章　検出された遺構と遺物

第１節　遺跡の概要

長野原城跡は、群馬県吾妻郡長野原町大字長野原に所在する中世の山城を主体とする遺跡である。吾妻川と白砂川が合流する舌状台地に長野原の町並みが広がっているが、その北側に迫る急峻な岩山の尾根に設けられた東西約 700 ｍの細長い城郭である。調査地点は長野原城跡の南東部、丘陵下の白砂川右岸の平担部にあたる。標高は 604.1 ～ 606.4 ｍである。

今回の発掘調査は遺跡の第１次調査にあたる。先述した（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団の調査地点Ａ区と隣接しており、検出した天明畑は単位畑１枚であるが、同一畑であることが判明している（第 28 図）。出土した遺物の種類は、内耳土器、陶磁器で、その数量はテンパコで 0.5 箱分であった。

第２節　江戸時代の遺構と遺物

（１）　畑跡

１号畑（第 24 ～ 28 図／第５・６表／図版 18・19）

位置　調査区全域。調査区は国道 145 号線の北側、長野原城跡の擁壁付近で、国道との比高差は５ｍを測る。

検出状況　建設予定建物の範囲で以前の開発で削平を被っていない箇所を面的に広げた。泥流のプライマリーな堆積状況は不明だが、現表土から最深 60㎝で畑面を検出した。泥流と畑面の間には全体的 As-A 軽石で覆われている状況であった。畑面は北東から南西に向けて 11°の勾配で傾斜しており、当時の斜面の様子が確認された。

規模　最大長 13.2 ｍ、最大幅 12.4 ｍ、検出面積 65.4㎡を測る。

遺物出土状況　畑面直上で２点の陶磁器が出土し、そのうち１点のみを図示し得た。

単位畑　１枚の単位畑のみの検出である。

①**1-2 号畑**

位置　前述と同じ。

遺存状況　良好。

規模　前述と同じ。畝幅 0.53 ｍ。

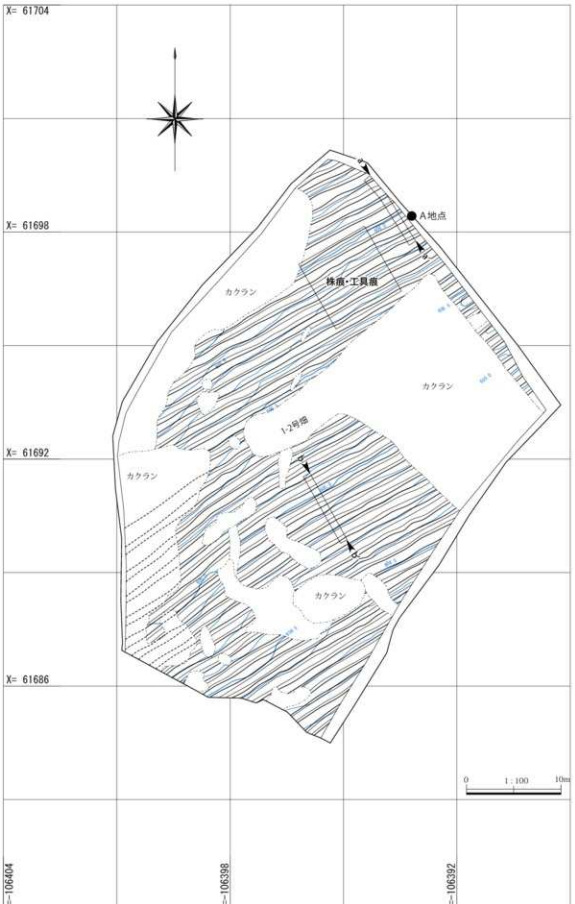
畝サク方向　Ｎ－ 34°－Ｗ

畝サク断面形状　関氏の２類。サブトレ（第 25 図 aa'・bb'）で確認したが、As-A 軽石降下前に１番ザクと２番ザク（土用の培土）が終了し ていた耕作状況を示している。

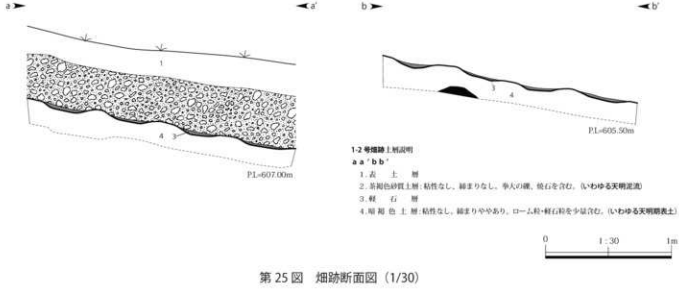
泥流によるキズ痕　３箇所で認められた。畝サクに直交するもの１箇所のほか、下流側へやや振れるもの２箇所である。

作物遺存体・株痕　作物遺存体は若干認められる程度で、２ｍ×２ｍの範囲で株痕の検出作業を実施した（第 26 図）。株痕は疎らな検出で、間隔は 38 ～ 48㎝であった。またサク入れをした際の鍬先の痕跡も確認されている。

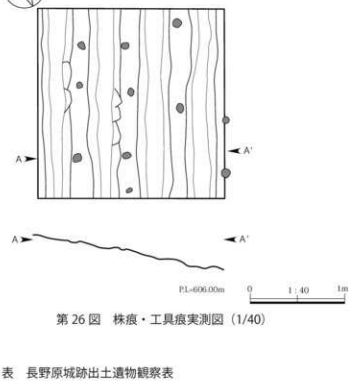
平坦面　未検出。攪乱により消失か。



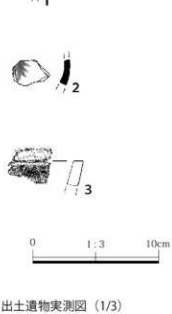
第 24 図　長野原城跡調査区全体図（1/100）



第 25 図　畑跡断面図（1/30）



第 26 図　株痕・工具痕実測図（1/40）



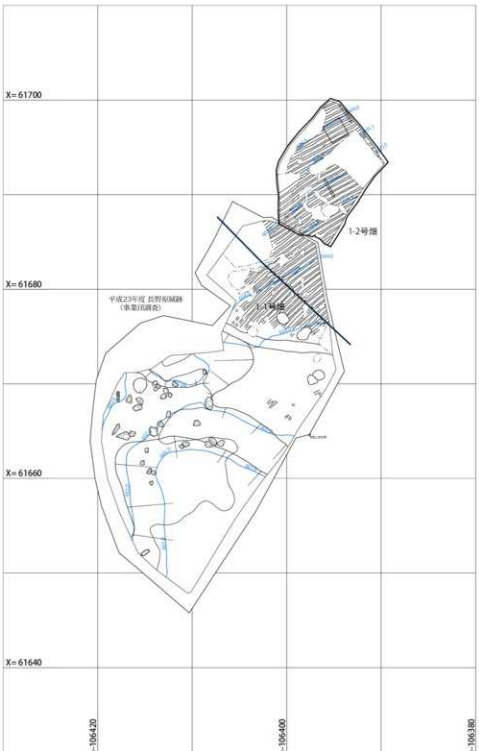
第 27 図　出土遺物実測図（1/3）

第 5 表　長野原城跡出土遺物観察表

挿図No.	図版No.	器種	法量（器高／口径／底径）(cm)	特徴（形態・手法等）	焼成	胎土・材質等	色調（外面／内面）	備　考
27・1	19	陶磁器・皿	(1.8) ／ ― ／ ―	肥前染付。草花文。	―	―	灰白	破片資料（口縁部）　サブトレ 2
27・2	19	陶磁器・碗	(2.0) ／ ― ／ ―	肥前染付。草花文。	―	―	灰白／明緑灰	破片資料（体部）　1-2 号畑
27・3	19	在地土器・鍋	(2.0) ／ ― ／ ―	内外面ともに横位ナデ調整。	良好	長石	明褐／にぶい赤褐	破片資料（口縁部）　サブトレ 1

第 6 表　長野原城跡畑跡一覧　※尺換算は曲尺：1 尺＝ 10/33 m を用いた。面積は 1 歩＝ 6 尺平方で算出。

畑名	単位畑名	単位畑 面積 (㎡)	単位畑 反・畝・歩	単位畑 斜度 (°)	単位畑 畝幅 (m)	単位畑 相当尺寸 (尺)	畑面積 畑面積 (㎡)	畑面積 反・畝・歩	畑断面
1	1-2	(104.0)	・1・1	11	0.53	1.7	(104.0)	・1・1	2 類



第 28 図　事業団調査地点との合成図（1/200）

第２編

東貝瀬Ⅲ遺跡

第１章　既往の調査

本調査は東貝瀬Ⅲ遺跡の第１次調査にあたる。第２次調査は本書序章で報告している。重複するが第 29 図・第７表の通りである。

第７表　東貝瀬Ⅲ遺跡既往調査一覧（文献番号は序説参考文献に対応）

番号	調査年度	調査機関	原因 種類	調査面積 （開発面積）	概要	備考
1	**平成25年度**	**長野原町教育委員会**	**町道長野原線 本調査**	**110㎡ （190㎡）**	**本報告**	**文献29**
2	平成26年度	〃	町道長野原線 確認調査	36㎡ （255.11㎡）	遺構なし。縄文土器・土師器出土。	文献32

第 29 図　東貝瀬Ⅲ遺跡調査地点位置図（1/5,000）

第２章　調査の経過

第１節　発掘調査

発掘調査は、平成 25 年５月９日から５月 23 日にわたって実施された。

５月９日、表土掘削開始。土の搬出が困難なため打って返しの調査。南側半分の表土を掘削。一面、天明泥流直下の畑を

検出。平坦面１箇所確認。
5月10日、畑面の精査。泥流除去ほぼ終了。
5月13日、全体清掃、全景撮影。サブトレ３箇所設定、掘り下げ。株痕検出範囲設定、精査。平断面図作成。
5月15日、重機により、トレンチを１本設定し、江戸時代以前の遺構がないことを確認して南側調査区の調査終了。反転開始。
5月16日、北側調査区の表土掘削。南側と同じく、一面、天明畑。作物遺存体を確認。
5月17日、午前中で表土掘削終了。畑面の精査開始。やはり作物遺存体の遺存度良好。
5月20日、泥流除去、畝サク検出作業。泥流と軽石の間に砂の混入が目立つ。逆級化現象（リバースグレイティング）か。平坦面２箇所確認。２m×２mで遺存体・株痕の検出範囲を設定。県埋文事業団の関氏来跡。
5月21日、遺存体５点、株痕検出。サクに堆積した泥流・砂をサンプリング。炭化材出土。平断面図付け足し。
5月23日、重機により、トレンチを１本設定し、掘り込みを２箇所検出。断ち割りの結果、遺構でないことを確認して調査終了。撤収。

第２節　整理調査・報告書作成

基礎整理調査は、平成25年5月24日から平成26年12月25日にわたって実施された。発掘調査によって得られた遺物はテンバコで2.5箱（作物遺存体・サンプリング含む）、現場で作成した図面は14枚であった。整理調査は担当の他に作業員４名という体制であった。作業は複数遺跡の整理と併行して行われた。

遺物洗浄・注記作業・接合作業は平成25年5月24日から同年5月27日までに実施した。その結果、実測するに値する遺物は得られていないことが判明した。

遺構図版・写真図版のデジタル基礎編集は平成26年11月25日～同年12月27日までに事業の合間に実施した。

第３章　基本層序

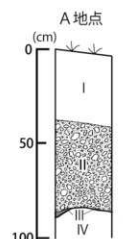
本遺跡の基本層序は第31図A地点で確認した。発掘調査での所見を併せると以下の通りである。

第Ⅰ層　暗灰褐色土
いわゆる表土で、AS-A軽石を疎らに含んでいる。上位は畑の耕作土で拳大の礫を多く含んでいる。締まりは上位が弱く、下位はやや強い。

第Ⅱ層　茶褐色砂質土
いわゆる天明泥流で全体的に砂質で締まりは弱い。人頭大～の焼石（黒石）を含んでいる。本地点での層厚は最大で93㎝である。

第Ⅲ層　軽石層
いわゆるAS-A軽石である。天明３（1783）年新暦の７月27日～29日に北東方向に降った軽石にあたる。本地点での層厚は３～６㎝である。

第Ⅳ層　暗褐色土
いわゆる天明期の表土面である。畑の場合は作土で茶褐色を呈する場合もある。



第30図　基本土層図（1/20）

第４章　検出された遺構と遺物

第１節　遺跡の概要

東貝瀬Ⅲ遺跡は、群馬県吾妻郡長野原町大字長野原字東貝瀬に所在する平安時代を主体とする遺跡である。吾妻川の支流である白砂川の左岸中位段丘面上に立地し、この段丘面は王城山から流れてくる駒倉沢の氾濫原により形成されている。南北に細長い段丘面を現在は国道 292 号線が通っており、調査地点は国道下の白砂川側である。標高は 602.5 ～ 605.0 ｍである。

今回の発掘調査は東貝瀬遺跡の第１次調査にあたる。上述のとおり、国道下で長らく畑作業をしていなかったためか、調査地は樹木が生い茂り、試掘調査をするまでは遺跡として認識されていなかった。検出した遺構は、天明畑（単位畑）３枚と平坦面３箇所である。出土した遺物の種類は、陶磁器、作物遺存体で、その数量はテンパコで 2.5 箱分であった。江戸時代以前の遺構の有無の確認のため、南北調査区ともにトレンチを設定したが、掘り込みは確認されたものの、遺構と判断するには至らなかった。

第２節　江戸時代の遺構と遺物

（１）畑跡・平坦面

１号畑（第 31 ～ 36 図／第７～９表／ＰＬ 12・20 ～ 23）

位置　調査区全域。調査区は国道 292 号線の南西側、白砂川との間に存在するテラス部分。国道との比高差は７ｍを測る。

検出状況　白砂橋橋台設置および工事用道路建設範囲を面的に広げた。泥流のプライマリーな堆積状況は不明だが、現表土から最深 93㎝で畑面を検出した。泥流と畑面の間には全体的に As-A 軽石で覆われている状況であった。畑面は北東から南西に向けて７～９°の勾配で傾斜しており、当時の斜面の様子が確認された。

規模　最大長 14.7 ｍ、最大幅 45.3 ｍ、検出面積 234.7㎡を測る。

遺物出土状況　畑面直上で１点の陶磁器が出土したが、図示するには至らなかった。

単位畑　３枚の単位畑を検出した。

①1-1 号畑

位置　調査区南東側。1-2 号畑の南東に隣接する。

遺存状況　良好。

規模　最大長 5.5 ｍ、最大幅 14.6 ｍ。畝幅 0.41 ｍ。

畝サク方向　Ｎ－ 41°－Ｗ

畝サク断面形状　関氏の２類。２箇所のサブトレ（第 32 図 aa'・bb'）で確認したが、As-A 軽石降下前に１番ザクと２番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。

泥流によるキズ痕　３箇所で認められた。畝サクに直交するもの１箇所のほか、下流側へやや振れるもの２箇所である。

作物遺存体・株痕　所々で作物遺存体が認められたため、２ｍ×２ｍの範囲で株痕の検出作業を実施した（第 34 図）。株痕の間隔は 10㎝程と狭いことから上に細く伸びる作物と推定される。

平坦面　１箇所。1-1 号平坦面（第 33 図）。

①1-1 号平坦面

位置　1-1 号畑の上端付近中央。

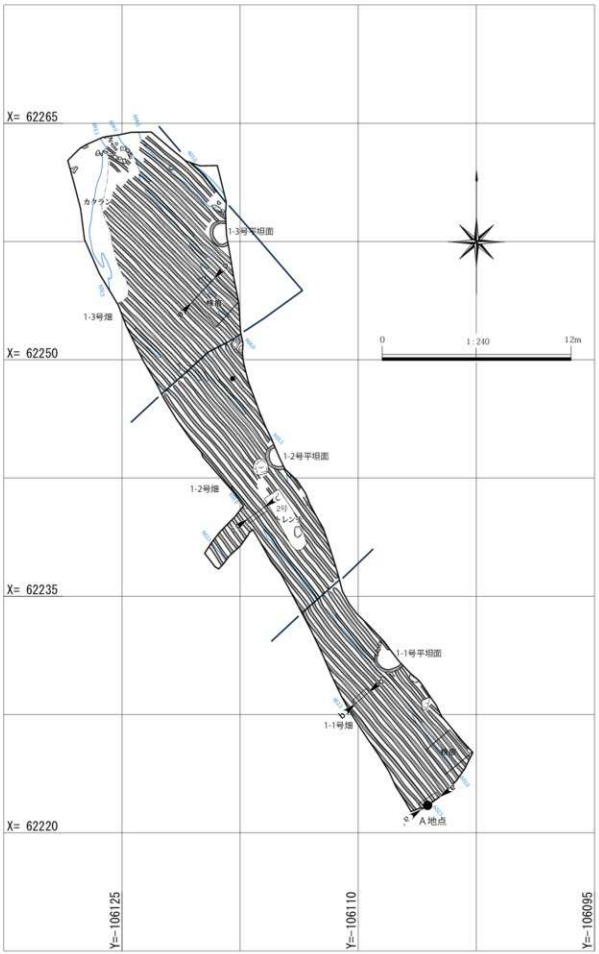
遺存状況　調査区外に延びており全体の約５分の４の検出で、遺存状態は良好である。

形状　平面形は円形を呈すると考えられる。

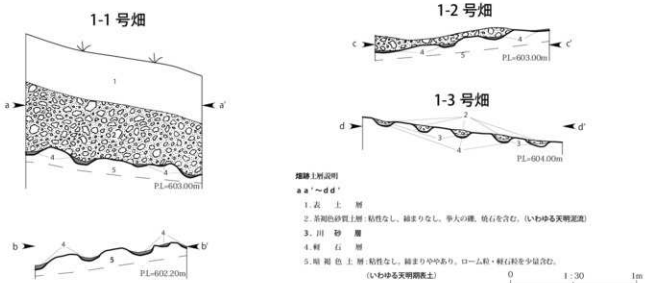
規模　現状で 2.1㎡、復元 3.3㎡を測る。

周溝　一部途切れるが、ほぼ全周すると考えられる。

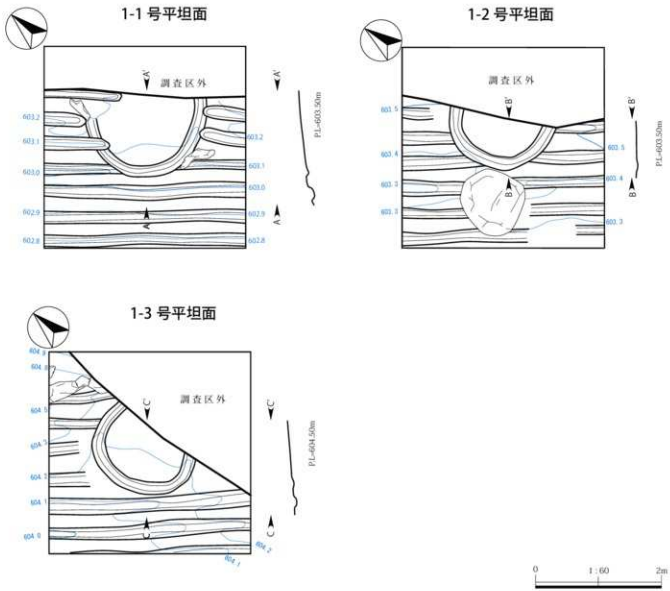
比高　山側は調査区外で不明であるが、川側は畝の方が高い。



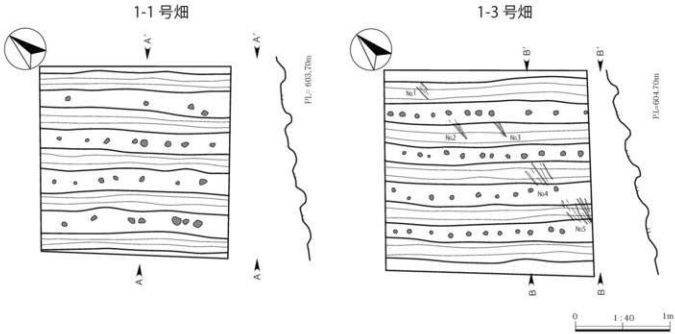
第 31 図　東貝瀬Ⅲ遺跡調査区全体図（1/240）



第 32 図　畑跡断面図（1/40）



第 33 図　平坦面実測図（1/60）



第 34 図　株痕実測図（1/40）

② **1-2 号畑**

位置　調査区中央。1-1 号畑と 1-3 号畑に挟まれる。

遺存状況　良好。

規模　最大長 10.5 m、最大幅 16.5 m。畝幅 0.41 m。

畝サク方向　N－42°－W

畝サク断面形状　関氏の 2 類。サブトレ（第 32 図 cc'）で確認したが、As-A 軽石降下前に 1 番ザクと 2 番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。

泥流によるキズ痕　2 箇所で認められた。畝サクに直交するもの 1 箇所のほか、下流側へやや振れるもの 2 箇所である。

作物遺存体・株痕　若干認められる程度である。株痕の検出は実施しなかった。

平坦面　1 箇所。1-2 号平坦面（第 33 図）。

① **1-2 号平坦面**

位置　1-2 号畑の上端付近中央。

遺存状況　調査区外に延びており全体の約 2 分の 1 の検出で、遺存状態は良好である。

形状　平面形は円形を呈すると考えられる。

規模　現状で 1.1㎡、復元 2.3㎡を測る。

周溝　全周すると考えられる。

比高　山側は調査区外で不明、川側は畝の方が高い。

③ **1-3 号畑**

位置　調査区北西側。1-2 号畑の北西に隣接する。

遺存状況　良好であるが、調査区北西隅付近は攪乱を被っていた。本畑は北側に深沢と隣接しており、泥流によるものかどうかの判断が難しいが、軽石と泥流の間に砂の堆積が認められたため、洪水による被害が予想される。

規模　最大長 10.7 m、最大幅 14.2 m。畝幅 0.42 m。

畝サク方向　N－44°－W

畝サク断面形状　関氏の 2 類。サブトレ（第 32 図 dd'）で確認したが、As-A 軽石降下前に 1 番ザクと 2 番ザク（土用の培土が終了していた耕作状況を示している。

泥流によるキズ痕　3 箇所で認められた。畝サクに直交するもの 1 箇所のほか、下流側へやや振れるもの 2 箇所である。

作物遺存体・株痕　所々で作物遺存体が認められたため、2 m×2 m の範囲で株痕の検出を実施した（第 34 図）。その結果、上流側へ倒れ込んだ遺存体を No.1 ～ No.5 の 5 点を検出し、サンプリングした。サンプリング試料は、泥流

堆積物も含め取り上げ、それらに関して、花粉分析、植物珪酸体分析、炭化種実の同定を実施した（第４編第１章参照）。また株痕は 10 ～ 20cm間隔と幅があり、15cm間隔のものが多く認められた。

平坦面　１箇所。1-3 号平坦面。

①1-3 号平坦面

位置　1-3 号畑の上端付近中央。

遺存状況　調査区外に延びており全体の約４分の３の検出で、遺存状態は良好である。

形状　平面形は円形を呈している。

規模　現状で 1.5㎡、復元 2.1㎡を測る。

周溝　全周する。

比高　山側は調査区外で不明、川側は畝の方が低い。

第 35 図　出土遺物実測図（1/3）

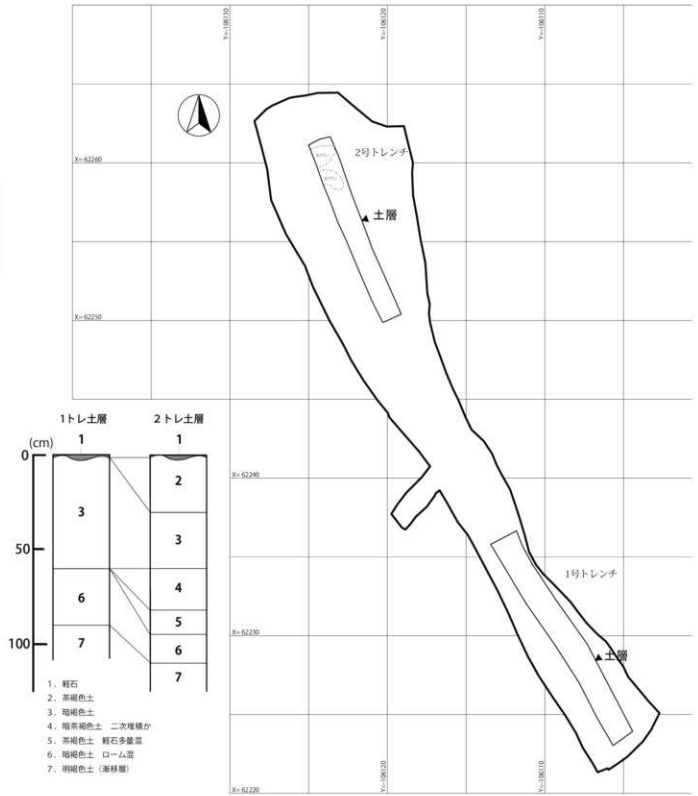
第８表　東貝瀬Ⅲ遺跡出土遺物観察表

挿図No.	図版No.	器種	法量（器高／口径／底径）(cm)	特徴（形態・手法等）	焼成	胎土・材質等	色調（外面／内面）	備　考
35-1	12	弥生土器・甕	(3.8) ／－／－	外面は横位条痕調整後に横位ミガキ、内面は斜位条痕調整後に斜位ミガキ。	良好	角閃石・砂粒	橙／明黄褐	破片資料（体部）　１トレ
35-2	12	土師器・甕	(2.7) ／－／－	口の穿孔跡。外面は横位ケズリ、内面は横位ナデ。	酸化焔	角閃石・長石	橙	破片資料（口縁部）　２トレ

第９表　東貝瀬Ⅲ遺跡畑跡・平坦面一覧

＊尺換算は曲尺：１尺＝ 10/33 m を用いた。面積は１歩＝６尺平方で算出。

畑名	単位畑名	単位畑 面積 (㎡)	反・畝・歩	斜度 (°)	畝幅 (m)	相当尺寸 (尺)	畑面積 畑面積 (㎡)	反・畝・歩	畑断面	平坦面 平坦面	面積 (㎡)	形状	溝	窪み	形状	比高
1	1-1	(61.7)	・　・19	9	0.41	1.3	(234.7)	・21・11	2類	1-1	<3.3> (2.1)	円	○	／	－	↑
	1-2	(75.4)	・　・23	7	0.41	1.3			2類	1-2	<2.3> (1.1)	円	○	／	－	↑
	1-3	(97.6)	・　・１	5	0.42	1.4			2類	1-3	<1.5> (2.1)	円	○	／	－	↑



第 36 図　トレンチ配置図（1/240）・土層図（1/20）

第３編

嶋木Ⅰ遺跡（３次～５次）

第１章　既往の調査

本編では嶋木Ⅰ遺跡の第３次調査から第５次調査を報告する。調査一覧を第 10 表、調査位置を第 36 図に示した。本遺跡ではこれまでに長野原町教育委員会で２次にわたる調査を実施している。

第１次調査は平成 16 年度に個人専用住宅建設に先立って本調査が実施された。住宅建設予定地は既に削平を被っていたがこれまで畑として利用していた箇所で江戸時代天明畑２枚、平坦面２箇所が検出された。

第２次調査は平成 22 年度に個人専用住宅建設に先立って確認調査が実施された。第１次調査との隣接地でトレンチ２本を設定したが、既に削平を被っていることが確認された。

第 10 表　嶋木Ⅰ遺跡既往調査一覧（文献番号は序説参考文献に対応）

番号	調査年度	調査機関	原因 種類	調査面積 （開発面積）	概要	備考
1	平成16年度	長野原町教育委員会	個人専用住宅 本調査	209㎡ （945㎡）	江戸天明畑１・平坦面２	文献16
2	平成22年度	〃	個人専用住宅 確認調査	24㎡ （293.25㎡）	遺構・遺物なし	文献23
3	**平成25年度**	**〃**	**町道長野原線 本調査**	**1,130㎡ （2,447㎡）**	**本報告**	**文献29**
4	〃	〃	〃	**299㎡ （692.37㎡）**	**本報告**	**１区 文献29**
	〃	〃	〃	**83㎡ （152㎡）**		**５区 文献29**
	平成26年度	**〃**	**〃**	**193㎡ （385.31㎡）**		**２～４区 文献32**
5	**平成26年度**	**〃**	**〃**	**980㎡ （1,414㎡）**	**本報告**	**文献32**

第２章　第３次調査

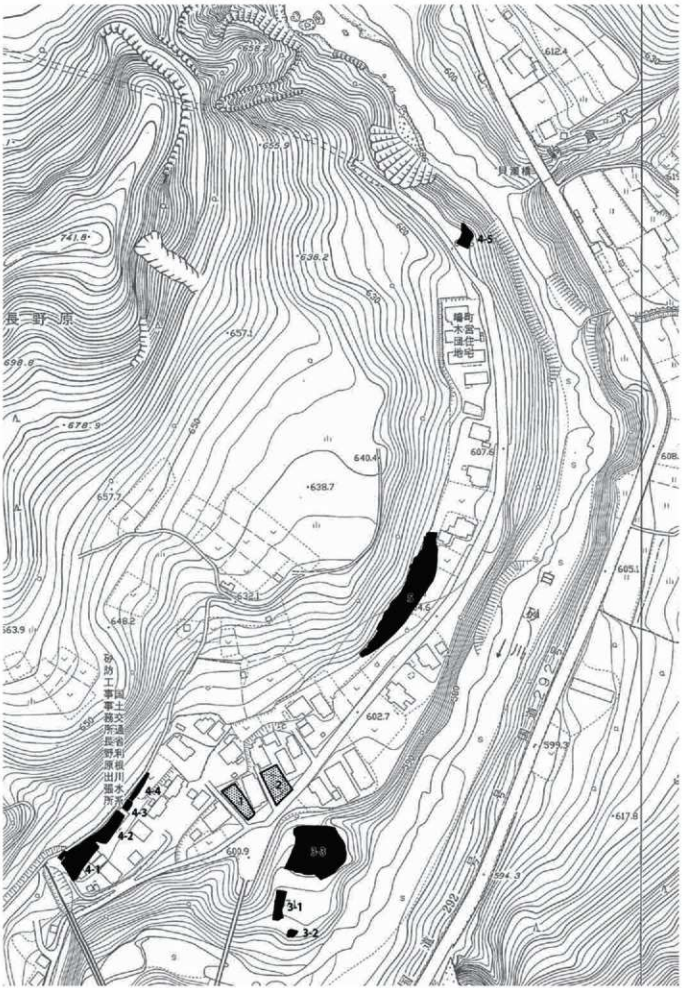
第１節　調査の経過

１　発掘調査

発掘調査は、平成 25 年４月８日から同年５月７日にわたって実施された。

４月８日、調査区の抜根作業。

４月９日、表土掘削開始。２区終了、１区半分位まで。全面に天明畑を検出。１区の南側に沿って旧国鉄太子線のガーター



第 37 図　嶋木Ⅰ遺跡調査地点位置図 (1/2,500)

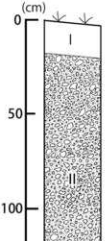
橋橋台部石積を検出。石積の精査。
4月10日、表土掘削1区終了、3区4分の1まで。石積の精査。
4月11日、表土掘削3区3分の1まで。天明畑と建物跡検出。石積の精査。
4月12日、表土掘削3区2分の1まで。石積の精査。
4月16日、表土掘削3区3分の2まで。石積の精査。
4月17日、表土掘削3区4分の3まで。泥流除去・畑面の精査。2区サブトレ3本設定・清掃。
4月19日、表土掘削3区終了。泥流除去・畑面の精査。
4月22日、畑面の精査。1区畝サク2分の1検出。
4月23日、畑面の精査。1区畝サク検出終了。サブトレ2本設定。
4月24日、雨天中止。
4月25日、2区清掃・全景撮影。3区畑面精査3分の1終了。
4月26日、3区畑面精査終了。1・2区測量。
4月30日、3区畝サク清掃3分の1終了。
5月　1日、3区畝サク清掃3分の2終了。遺物取り上げ№1～47。1号建物検出状況写真。軽石除去。平断面図作成。
5月　2日、午前中に3区畝サク清掃終了。ラジコンヘリによる空撮。午後、3区サブトレ7本設定。平坦面軽石除去4箇所、エレベーション図作成。サブトレ断面図作成・写真。遺物取り上げ№48～65。1号建物エレベーション作成。天明面がほぼ終了。
5月　7日、午前に3区内に重機によりトレンチ2本設定。埋没川道跡を確認。トレンチ平面図・土層確認位置を押さえる。午後、1号建物床面掘り下げ。石垣の裏込めと黒褐色土との境界を検出。石垣並びの延長でピット確認。ピット半截、ピット底面に石を検出。柱穴か。遺物の取り上げ№66～68。ピット完掘、測量の付け足しをしてすべての調査終了。撤収。

2　整理調査・報告書作成

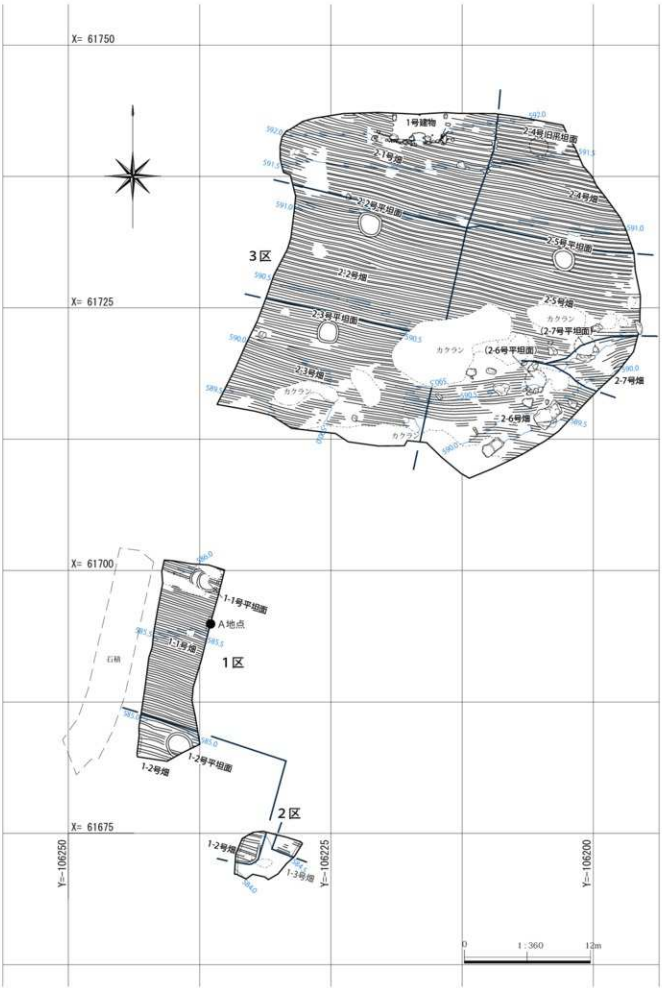
基礎整理調査は、平成26年11月25日から平成29年1月12日にわたって実施された。発掘調査によって得られた遺物はテンバコで1.0箱（作物遺存体含む）、現場で作成した図面は23枚であった。整理調査は担当の他に作業員4名という体制であった。作業は複数遺跡の整理と併行して行われた。
遺物洗浄・注記作業・接合作業は平成26年11月25日から同年11月27日までに実施した。
遺物の実測・トレースは11月28日から同年12月25日まで本事業関連出土遺物をまとめて実施した。
遺構図版・写真図版のデジタル基礎編集は平成28年6月30日～平成29年1月12日までに事業の合間に実施した。

第2節　基本層序

本遺跡の基本層序は第39図A地点で確認した。発掘調査での所見を併せると以下の通りである。
第Ⅰ層　暗灰褐色土
いわゆる表土で、AS-A軽石を疎らに含んでいる。上位は畑の耕作土で拳大の礫を多く含んでいる。締まりは上位が弱く、下位はやや強い。
第Ⅱ層　茶褐色砂質土
いわゆる天明泥流で全体的に砂質で締まりは弱い。人頭大～の焼石（黒石）を含んでいる。本地点での層厚は最大で126㎝である。
第Ⅲ層　軽石層
いわゆるAS-A軽石である。天明3（1783）年新暦の7月27日～29日に北東方向に降った軽石にあたる。本地点での層厚は3～6㎝である。
第Ⅳ層　暗褐色土
いわゆる天明期の表土面である。畑の場合は作土で茶褐色を呈する場合もある。



第38図　基本土層図（1/20）



第 39 図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ調査区全体図（1/360）

第３節　検出された遺構と遺物

１　遺跡の概要

嶋木Ⅰ遺跡は、群馬県吾妻郡長野原町大字長野原字嶋木に所在する平安時代・近世・近代の散布地・その他の遺跡である。白砂川右岸の下位・中位段丘面上に立地し、標高は 584.0 ～ 609.0 mである。

今回の発掘調査は嶋木Ⅰ遺跡の第３次調査にあたる。調査範囲は町道嶋木線の川側の下位段丘面で町道との比高差 8.5 mを測る。調査範囲内はさらに２段に分かれることから川側の一番低い畑を１号畑、その一段上を２号畑とした。町道を整備する上での資材搬入路がなかったため工事用仮設道路が計画された。確認された遺構は、旧国鉄太子線のガーター橋橋台石積１基、天明畑 10 枚、平坦面９箇所、礎石建物跡１棟である。出土した遺物の種類は、陶磁器、銅製品で、その数量はテンバコで 1.0 箱分であった。

２　近代の遺構と遺物

（１）ガーター橋橋台石積（第 39 ～ 41 図／第 11 表／ＰＬ 24 ～ 27・35）

位　置　１区西側。

検出状況　調査前から石積があることは分かっていたが、橋台の東面下端部にあたり、工事計画の範囲内で全面検出された。橋台の全体像は不明だが、少なくとも１段のテラスが設けられているようである。現在もガーター橋と線路敷は遺存しており、石積の基底石列から線路の敷かれた築堤上までは 14.6 mの比高差を有する。

遺存状態　全体的に遺存状態は良好である。

規　模　検出長約 22.0 m、幅約 3.6 m、高さ 2.85 mを測る。全体の傾斜は約 39°、中段は 34°である。

主軸方位　Ｎ－ 13°－Ｅ。川側の橋台南面に向かって角度が変わっている。

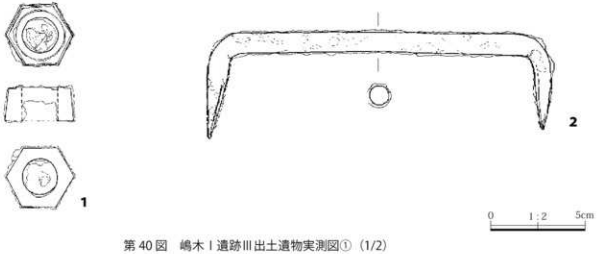
概　要　旧国鉄太子線の白砂橋梁橋台の石積である。上述したように橋台の下端部を検出したにすぎない。基底石列では大きめの割石を用いている。石積途中で勾配に変化があり、また途中で大きめの石を横位に配していることから少なくとも大きく３工程を経て積まれていることが把握された。検出部分の中では大きく工事計画ではこの石積を挟むような路線計画となっており、調査中の平成 25 年４月 22 日付けで建設課へ意見書を提出した。その後、計画が変更され、石積は破壊されずに現在に至っている。ここでは意見書の内容を転記して旧国鉄太子線について少し触れておきたい。ちなみに平成 30 年４月現在、太子駅舎・トイレ・ホームが中之条町により復元されている。

【経　過】

・平成 23 年 11 月 25 日
　役場産業建設課より遺跡の照会。対象地が周知の包蔵地の範囲外であるが隣接地域のため試掘調査が必要である旨を回答し、協議の結果、試掘調査することで合意する。
・平成 24 年 11 月５日
　関係書類（願書、添付書類）が提出される。
・平成 24 年 11 月 13 日
　試掘調査を実施する。江戸時代の天明畑が検出される。
・平成 24 年 11 月 19 日
　包蔵地の把握（第 95 条）により遺跡の範囲拡張。
・平成 25 年４月５日
　発掘届が提出される。
・平成 25 年４月８日～
　発掘調査開始。掘削範囲に橋台石積を確認。覆土・竹根を除去すると保存状態も良好であることが判明する。

【旧国鉄太子線について】

太子線は長野原駅と太子駅間の 5.8㎞を結ぶ路線であった。太平洋戦争末期の軍需用資源不足を補うため、当時の日本鋼管株式会社により群馬鉄山からの鉄鉱石を運搬する専用線として敷設された。工事は 1943（昭和 18）年から約２年間と



第 40 図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ出土遺物実測図①（1/2）

第 11 表　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ出土遺物観察表①

挿図No.	図版No.	器種	法量（器高／口径／底径）(cm)	特徴（形態・手法等）	焼成	胎土・材質等	色調（外面／内面）	備考	
40-1	35	鉄製品・ナット	高さ 1.9 ／ 1.9 ／幅上 3.3 幅下 3.6	重量 83.9g。表面錆付着。	—	—		完形	石積
40-2	35	鉄製品・鎹	幅 18.1 ／高さ 5.4 ／直径 1.0	重量 170g。表面錆付着。	—	—		完形	石積

いう短期間で実施され、1944（昭和 19）年 12 月 25 日に完成、翌 1945（昭和 20）年 1 月 2 日に初出荷された。

1952（昭和 27）年に国有化された太子線は国鉄長野原線の一部となり、1954（昭和 29）年の旅客営業開始後は地元住民の足となった。1965（昭和 40 年）に群馬鉄山が閉鎖すると利用者が減少し、1970（昭和 45）年に廃止された。

群馬鉄山は終戦後の昭和 24 年には月産 2 万トンを達成し、釜石鉱山に次いで国内第 2 位の鉄鉱山と称されるなど、累計 300 万トンの鉄鉱石を供給し戦後復興に貢献した。

【所　見】

太子線は全国の廃線路線の中でも遺存状態が良好なことが知られており、新聞記事（上毛新聞：2013 年（平成 25 年）3 月 6 日付け）にあるように中之条町が駅舎は一部ホームを復元し、トンネルも補強するなど整備して観光資源として活かそうという動きがある。当該遺構は太子線で一番象徴的なガーダー橋の橋台石積であることや調査原因が仮設工事用道路ということから判断して、石積みを現状保存していくことが望ましいと考えられる。

付帯施設　なし。

遺物検出状況　石積の勾配が緩い中断で 2 点の鉄製品が出土している。

遺　　物　線路を固定するナット（第 40 図 1）と枕木を固定する鎹（同図 2）を図示し得た。

3　江戸時代の遺構と遺物

（1）畑跡・平坦面

1 号畑（第 39・42 ～ 44・49 図／第 12・13 表／ＰＬ 24・25・28・29・35）

位置　1・2 区。3 区との間に約 3 ｍの段を有する。

検出状況　工事用道路敷設予定範囲で掘削箇所を面的に広げた。泥流のプライマリーな堆積状況は不明だが、現表土から最深 150㎝で畑面を検出した。泥流と畑面の間には全体的に As-A 軽石で覆われている状況であった。畑面は北東から南西に向けて 3 ～ 4 °の勾配で傾斜しており、当時の斜面の様子が確認された。

規模　1・2 区を合わせると最大長 20.4 m、最大幅 20.0 m、検出面積 107.3㎡を測る。

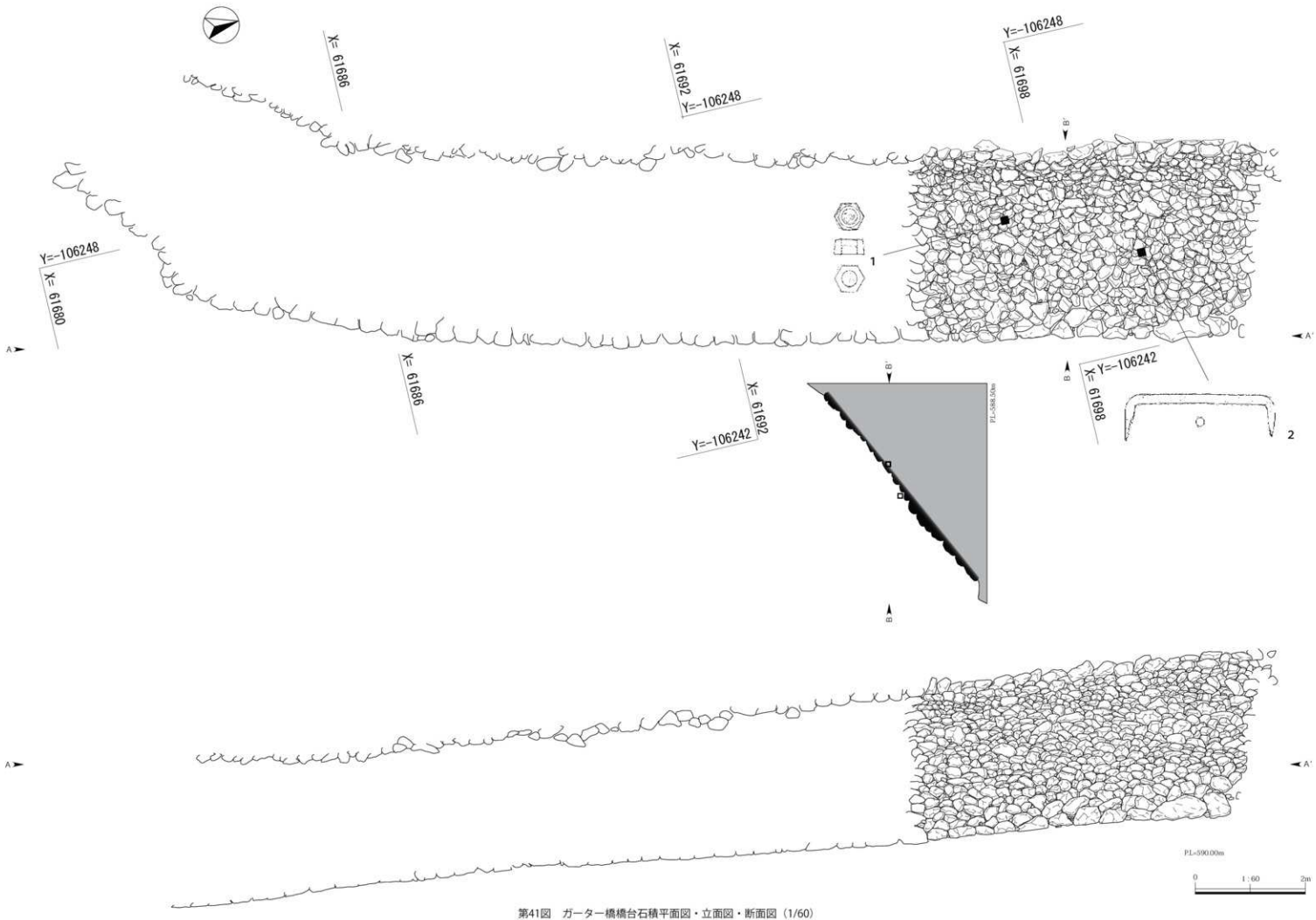
遺物出土状況　遺物は少なく、畑面直上で 1 点の擂鉢片（第 49 図 18）が出土し、図示し得た。

単位畑　3 枚の単位畑のみの検出である。

①1-1 号畑

位置　1 区北側。

遺存状況　良好。



第41図　ガーター橋橋台石積平面図・立面図・断面図（1/60）

規模　最大長 15.0 m、最大幅 7.8 m、検出面積 78.1㎡を測る。畝幅 0.43 m。

畝サク方向　N－71°－W

畝サク断面形状　関氏の２類。サブトレ（第 43 図 aa'）で確認したが、As-A 軽石降下前に１番ザクと２番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。

泥流によるキズ痕　泥流によるキズ痕かは不明確だが、1-1 号平坦面付近で畝サクにほぼ並行する攪乱が確認されている。

作物遺存体・株痕　若干認められる程度である。株痕の検出は実施しなかった。

平坦面　２箇所。1-1 号平坦面。旧平坦面と重複している（第 44 図）。

①1-1 号平坦面

位置　1-3 号畑の上端付近中央。

遺存状況　北側・南側を攪乱で失っており、全体の約５分の４の検出で、遺存状態はやや不良である。

形状　平面形は円形を呈している。サクが平坦面に入り込んでいる。

規模　現状で 2.7㎡、復元 3.3㎡を測る。

周溝　一部途切れるが、ほぼ全周すると考えられる。

比高　不明である。

②旧平坦面 1

位置　1-3 号畑の上端付近中央。

遺存状況　北側・南側を攪乱により失っており、1-1 号平坦面と重複し、切られている。全体の約３分の１の遺存である。

形状　平面形は円形を呈している。

規模　現状で 1.1㎡、復元 3.3㎡を測る。

周溝　全周するタイプと考えられる。

比高　不明である。

② 1-2 号畑

位置　１区南側と２区西側。

遺存状況　良好。

規模　最大長 9.9 m、最大幅 14.1 m、検出面積 24.2㎡を測る。畝幅 0.78 m。

畝サク方向　N－70°－W

畝サク断面形状　関氏の２類。サブトレ（第 43 図 bb'・cc'）で確認したが、As-A 軽石降下前に１番ザクと２番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。

泥流によるキズ痕　目立ったものは認められていない。

作物遺存体・株痕　若干認められる程度である。株痕の検出は実施しなかった。

平坦面　１箇所。1-2 号平坦面（第 44 図）。

①1-2 号平坦面

位置　1-3 号畑の上端付近中央。

遺存状況　調査区外に延びており全体の約５分の４の検出で、遺存状態は良好である。

形状　平面形は円形を呈している。サクが平坦面に入り込んでいる。

規模　現状で 2.7㎡、復元 3.3㎡を測る。

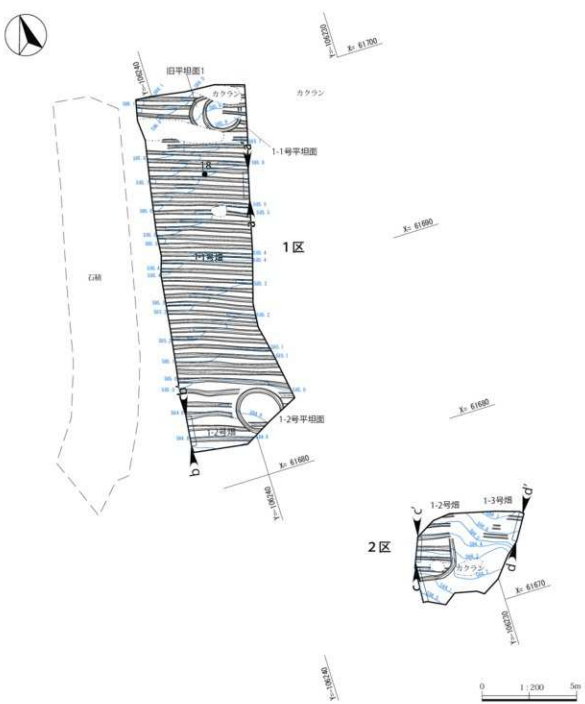
周溝　全周すると考えられる。

比高　山側・川側ともに畝より低い。

③ 1-3 号畑

位置　２区東側。

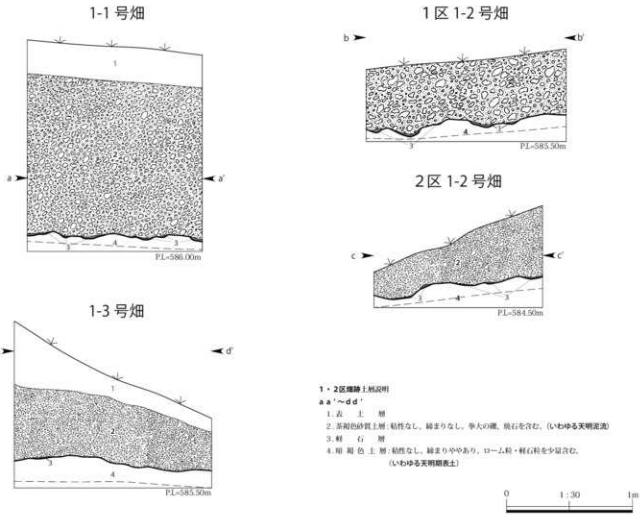
遺存状況　不良。1-2 号畑との間に若干の凹みが認められ、道あるいは溝の可能性がある。サクが３条部分的に遺存していることから単位畑が続いていると判断した。



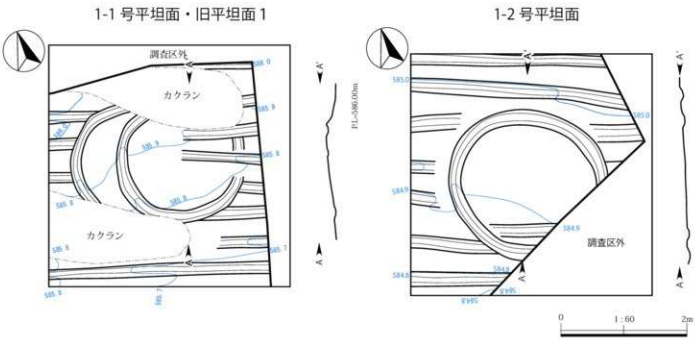
第 42 図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ 1・2 区全体図（1/200）

規模　最大長 1.4 m、最大幅 1.9 m、検出面積 5.0㎡を測る。畝幅 0.45 m。
畝サク方向　N－69°－W
畝サク断面形状　関氏の２類。サブトレ（第 43 図 dd'）で確認したが、As-A 軽石降下前に１番ザクと２番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。
泥流によるキズ痕　泥流によるかは不明確だが、全体的に攪乱を被っている。
作物遺存体・株痕　なし。
平坦面　未検出。

２号畑（第 39・45 ～ 47・49・50 図／第 12・13 表／ＰＬ 30 ～ 35）
位置　３区全域。３区との間に約３mの段を有する。
検出状況　工事用道路敷設予定範囲で３m以上の盛土を施す箇所を面的に広げた。泥流のプライマリーな堆積状況は不明だが、現表土から最深 60cmで畑面を検出した。泥流と畑面の間には全体的に As-A 軽石で覆われている状況であった。畑面は北東から南西に向けて１～ 13°の勾配で傾斜しており、当時の斜面の様子が確認された。



第 43 図　1・2 区畑跡断面図（1/30）



第 44 図　1・2 区平坦面実測図（1/60）

規模　最大長 32.8 m、最大幅 36.4 m、検出面積 922.8㎡を測る。

遺物出土状況　7 枚の畑全体で分布が認められた。1 号建物出土遺物を除いて、畑面直上で 59 点の陶磁器片・キセルが出土している。

単位畑　7 枚の単位畑から構成される。

① **2-1 号畑**

位置　3 区北西隅。2-2 号畑の北側、2-4 号畑の西側。

遺存状況　やや良好。

規模　最大長 10.8 m、最大幅 19.0 m、検出面積 167.1㎡を測る。畝幅 0.46 m。

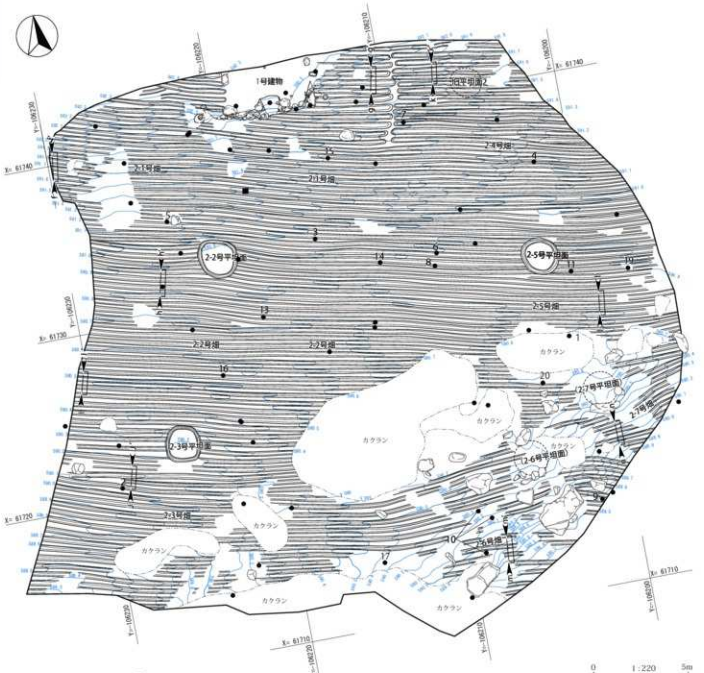
畝サク方向　N－76°－W

畝サク断面形状　関氏の 2 類。サブトレ（第 46 図 ff'・gg'）で確認したが、As-A 軽石降下前に 1 番ザクと 2 番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。

泥流によるキズ痕　泥流によるかは不明確だが、全体的に攪乱を被っている。

作物遺存体・株痕　若干認められる程度である。株痕の検出は実施しなかった。

平坦面　なし。平坦面のあるべき場所に 1 号建物跡が位置する。



第 45 図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ 3 区全体図（1/220）

② **2-2 号畑**

位置　3 区西側中央。2-1 号畑の南側、2-3 号畑の北側、2-5 号畑の西側。

遺存状況　良好。

規模　最大長 10.8 m、最大幅 17.0 m、検出面積 177.7㎡を測る。畝幅 0.48 m。

畝サク方向　N－79°－W

畝サク断面形状　関氏の 2 類。サブトレ（第 46 図 hh'・ii'）で確認したが、As-A 軽石降下前に 1 番ザクと 2 番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。

泥流によるキズ痕　石によるキズ痕とみられる攪乱が 1 箇所認められる。

作物遺存体・株痕　若干認められる程度である。株痕の検出は実施しなかった。

平坦面　1 箇所。2-2 号平坦面（第 47 図）。

① **2-2 号平坦面**

位置　2-2 号畑の上端付近中央。

遺存状況　遺存状態は良好である。

形状　平面形は不整円形を呈している。

規模　4.2㎡を測る。

周溝　全周する。

比高　山側・谷側ともに畝より低い。

③ **2-3 号畑**

位置　3 区南東側。2-2 号畑の南側、2-6 号畑の西側。

遺存状況　やや良好。

規模　最大長 11.2 m、最大幅 19.0 m、検出面積 172.5㎡を測る。畝幅 0.50 m。

畝サク方向　N－75°－W

畝サク断面形状　関氏の 2 類。サブトレ（第 46 図 jj'）で確認したが、As-A 降下前に 1 番ザクと 2 番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。

泥流によるキズ痕　石によるキズ痕とみられる攪乱が数箇所認められる他は、畑北東側と中央に攪乱が認められた。

作物遺存体・株痕　若干認められる程度である。株痕の検出は実施しなかった。

平坦面　1 箇所。2-3 号平坦面（第 47 図）。

① **2-3 号平坦面**

位置　2-3 号畑の上端付近中央。

遺存状況　遺存状態は良好である。

形状　平面形は隅丸方形を呈している。

規模　3.6㎡を測る。

周溝　全周する。

比高　山側・川側ともに畝より低い。

④ **2-4 号畑**

位置　3 区北東隅。2-1 号畑の東側、2-5 号畑の北側。

遺存状況　良好。

規模　最大長 10.4 m、最大幅 15.0 m、検出面積 122.1㎡を測る。畝幅 0.41 m。

畝サク方向　N－78°－W

サク断面形状　関氏の 2 類。サブトレ（第 46 図 kk'）で確認したが、As-A 軽石降下前に 1 番ザクと 2 番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。

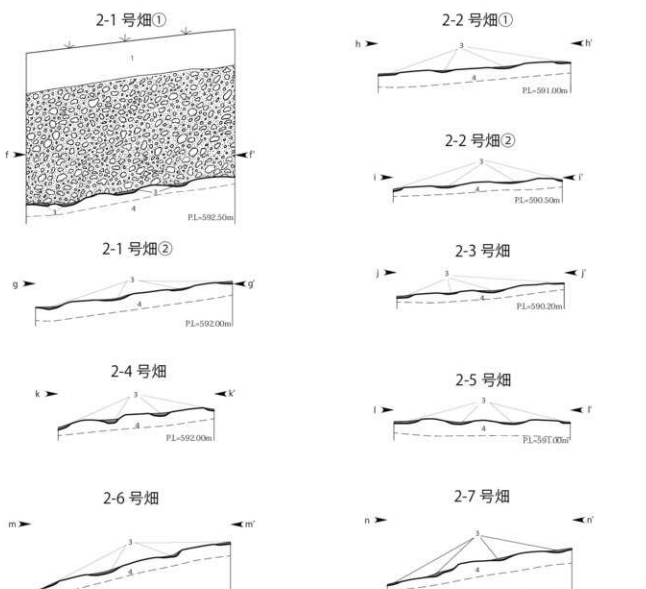
泥流によるキズ痕　石によるキズ痕とみられる攪乱が数箇所認められた。

作物遺存体・株痕　若干認められる程度である。株痕の検出は実施しなかった。

平坦面　1 箇所。旧平坦面 2（第 47 図）。2-4 号畑の平坦面は未検出。

①**旧平坦面 2**

位置　2-4 号畑の上端付近中央西寄り。



第 46 図　3区畑跡断面図（1/30）

遺存状況　全体的に畝サクに切られている。
形状　平面形は円形を呈している。
規模　2.4m を測る。
周溝　なし。
比高　高低差なし。

⑤ 2-5 号畑

位置　3区東側中央。2-4 号畑の南側、2-6・2-7 号畑の北側、2-2 号畑の東側。
遺存状況　やや良好。
規模　最大長 12.4 m、最大幅 17.4 m、検出面積 157.1㎡を測る。畝幅 0.47 m。
畝サク方向　N－78°－W
畝サク断面形状　関氏の２類。サブトレ(第 46 図 l-l')で確認したが、As-A 軽石降下前に１番ザクと２番ザク(土用の培土)

が終了していた耕作状況を示している。
泥流によるキズ痕　石によるキズ痕とみられる攪乱が数箇所認められた。畑南東側には泥流によって運ばれたと考えられる石が分布していた。畑南側は大きな攪乱を被っている。
作物遺存体・株痕　若干認められる程度である。株痕の検出は実施しなかった。
平坦面　1箇所。2-5 号平坦面（第 47 図）。

①**2-5 号平坦面**

位置　2-5 号畑の上端付近中央。
遺存状況　遺存状態は良好である。
形状　平面形は円形を呈している。
規模　3.7㎡を測る。
周溝　全周する。
比高　山側・川側ともに畝より低い。

⑥**2-6 号畑**

位置　3区南東側。2-3 号畑の東側、2-5 号畑の南側、2-7 号畑の南西側。
遺存状況　不良。
規模　最大長 9.4 m、最大幅 15.0 m、検出面積 102.8㎡を測る。畝幅 0.51 m。
畝サク方向　N－73°－W
畝サク断面形状　関氏の 2 類。サブトレ（第 46 図 mm'）で確認したが、As-A 軽石降下前に 1 番ザクと 2 番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。
泥流によるキズ痕　全体的に泥流により運ばれたと考えられる石が分布していた。中には 2.5 m× 1.8 mの巨石も含まれている。
作物遺存体・株痕　ほとんど認められなかった。
平坦面　1箇所。2-6 号平坦面。

①**2-6 号平坦面**

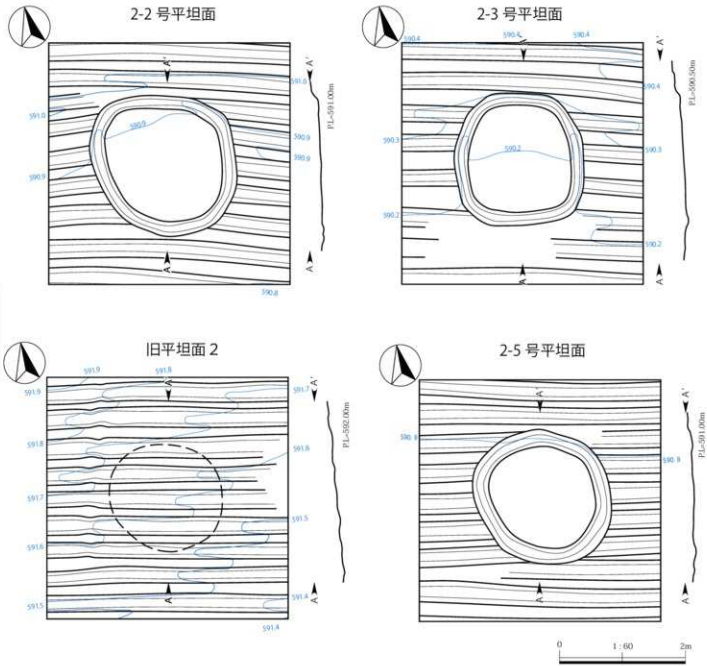
位置　2-6 号畑の上端付近中央。
遺存状況　調査最後の畑面精査時に、攪乱を被っていない礫で囲まれた空間があり、平坦面とした。
形状　平面形は円形を呈している。
規模　3.1㎡を測る。
周溝　なし。
比高　畝との関係は不明であるが、周辺よりやや高い。

⑦**2-7 号畑**

位置　3区南東側。2-5 号畑の南東側、2-6 号畑の北東側。
遺存状況　やや不良。畑面が南東側へ 13°の斜度で傾いている。
規模　最大長 4.5 m、最大幅 8.8 m、検出面積 23.6㎡を測る。畝幅 0.48 m。
畝サク方向　N－94°～ 104°－W
畝サク断面形状　関氏の 2 類。サブトレ（第 46 図 nn'）で確認したが、As-A 軽石降下前に 1 番ザクと 2 番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。
泥流によるキズ痕　石によるキズ痕とみられる攪乱が数箇所認められた。
作物遺存体・株痕　ほとんど認められなかった。
平坦面　1箇所。2-7 号平坦面。

①**2-7 号平坦面**

位置　2-7 号畑の上端付近中央。
遺存状況　調査最後の畑面精査時に、攪乱を被っていない礫で囲まれた空間があり、平坦面とした。
形状　平面形は円形を呈している。
規模　3.1㎡を測る。



第 47 図　3 区平坦面実測図（1/60）

周溝　なし。

比高　畝との関係は不明であるが、周辺よりやや高い。

（2）礎石建物跡

1 号建物跡（第 48 図 / PL 31・32）

位　　置　3 区北西側。2-1 号畑北側中央。

検出状況　泥流堆積物を除去していく過程で一段高い場所で礎石が並んで確認された。畑面は緩斜面なのに対して、建物内部は水平で、南側は石垣を形成している。建物東側は重機により上面を掘りすぎたが、東西断面図（第 48 図 AA'）からも建物内部にほぼ全面軽石が分布していたと考えられる。

遺存状態　建物は北側調査区外に延びており、北側にもう一間延びるとすれば約 5 分の 3 の検出である。礎石や柱穴は建物内部には見当たらず、比較的よく遺存している。

規　　模　東西間口 10.0 m（5.5 間）、奥行き 4.8 m以上（2.64 間以上）。柱間東西約 1.82 m、南北 2.1 m。

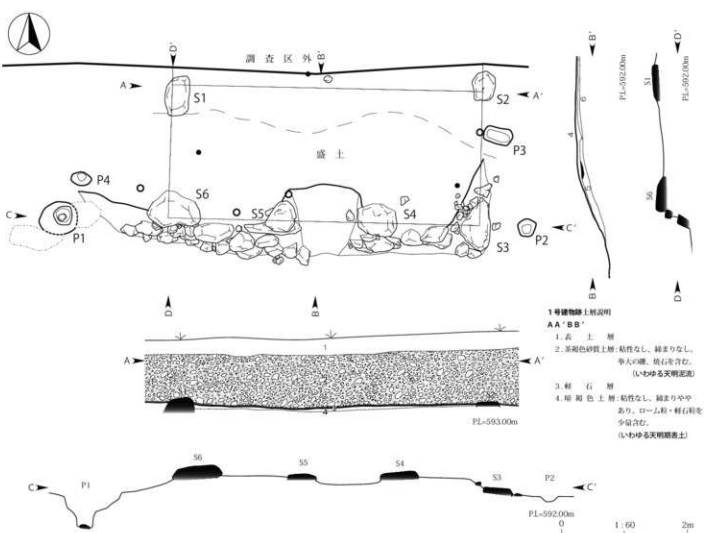
主軸方位　南北 N－1°－E、東西 N－89°－W

概　要　礎石建物跡である。検出範囲では、内部に礎石や柱穴が確認されていないことから、側柱建ての納屋（小屋）と考えられる。北側の斜面はガーター橋から接続する旧国鉄太子線の線路敷で廃線後は町道となっているが、戦時中の造成で改変されているため旧地形が判っていない。本建物跡との比高差は 8.6 m程である。北側に 1 間延びるとすれば 2 間×2 間の建物が想定される。礎石は S1 ～ S6 まで検出されている。礎石に使用される石は扁平な輝石安山岩で比較的大振りなものを選んでいる。S3 ～ S6 は石垣の上に据えられているが、入口を構成している S4・S5 はほぼ水平なのに対して S3 はそれより約 25㎝ほど低く、S6 は 10㎝ほど高い。入口は南側中央の S4・S5 間に比高差 45㎝、約 14°のスロープが設置されており、幅は下で 48㎝（1.5 尺）、床面で 115㎝（3.8 尺）を測る。S3 は建物床面の外に位置し、他の礎石と比べて 1 段低いことから第 2 の入口を想定することも可能である。礎石以外にも P1 ～ P4 が検出されている。P1・P2 は石垣上の南側礎石列である S3 ～ S6 の延長上に位置する。P1 は西側の延長上に位置し、S1 とは 1.14 m離れている。柱痕跡は確認できなかったが平面形は楕円形を呈し、長軸 63㎝、短軸 53㎝、確認面からの深さは 64㎝を測る。底面に 15㎝× 10㎝の石が据えられていたことから柱穴と考えられる。P2 は東側の延長上に位置し、S3 とは約 0.7 m離れている。平面形は不整円形を呈し、直径 28 ～ 29㎝、確認面からの深さは 10㎝を測る。P3 は P2 の北西側、S2 と S3 の間に位置しする。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸 46㎝、短軸 25 ～ 27㎝、確認面からの深さは 6㎝を測る。P4 は P1 の北東側に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸 34㎝、短軸 22㎝、確認面からの深さは 23㎝を測る。床面は南側の 3 ～ 4 石から構成される石垣と盛土で水平面を作り出しており、検出部分の約 3 分の 2 を占める。屋根等の上屋構造は不明だが、検出状況から判断して、被災時にはしっかりした屋根が架けられていたかは疑問である。

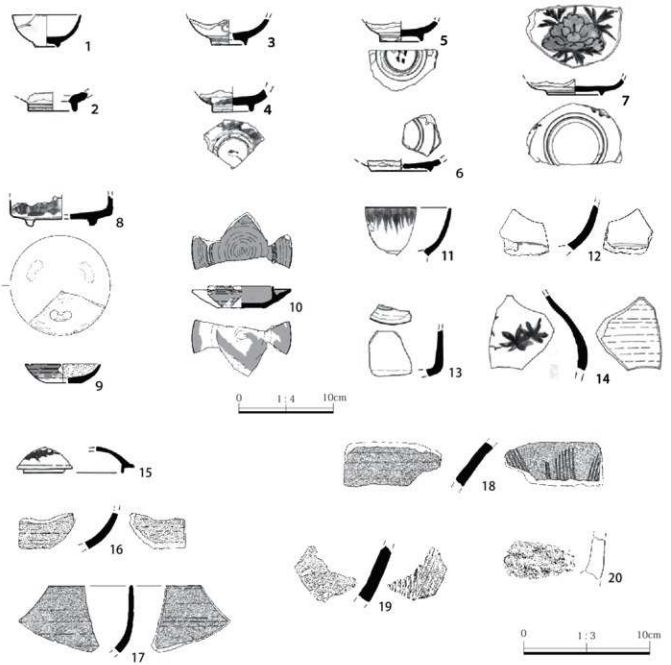
その他の施設　なし。

遺物出土状況　遺物は少なく、疎らに磁器片 3 点、炭化材 4 点の合計 7 点出土した。そのうち 3 点の炭化材が S5・S6 付近で集中して出土している。

遺　物　図示するには至らなかった。



第 48 図　1 号建物跡実測図（1/60）



第 49 図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ出土遺物実測図②（1/4・1/3）

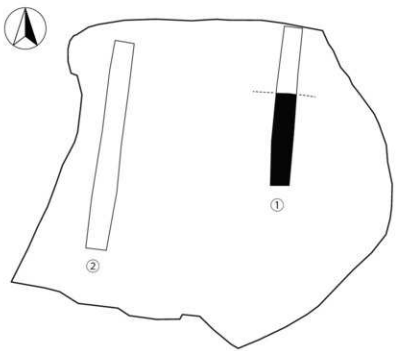
第 12 表　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ畑跡・平坦面一覧

＊尺換算は曲尺：1 尺＝ 10/33 m を用いた。面積は 1 歩＝ 6 尺平方で算出。

畑名	単位畑名	単位畑 面積 (㎡)	反・畝・歩	斜度 (°)	畝幅 (m)	相当尺寸 (尺)	畑面積 畑面積 (㎡)	畑面積 反・畝・歩	畑断面	平坦面 平坦面	平坦面 面積 (㎡)	形状	溝	窪み	形状	比高
1	1-1	(24.2)	・ ・ 7	4	0.43	1.4	(108.3)	・1・1	2類	1-1	<3.3> (2.7)	円	○	凹	溝	−
	1-2	(78.1)	・ ・24	3	0.78	2.6			2類	旧平坦面 1	<3.3> (1.1)	円	○	凹	溝	−
	1-3	(6.0)	・ ・ 2	3	0.50	1.7			2類	1-2	<4.7> (4.1)	円	○	凹	溝	↑
2	2-1	(167.1)	・1・21	7	0.46	1.5	(922.8)	・9・9	2類	2-1	−	−	−	−	−	−
	2-2	(177.6)	・1・24	3	0.48	1.6			2類	2-2	4.2	不	○	／	−	↓
	2-3	(172.5)	・1・22	3	0.50	1.7			2類	2-3	3.6	隅長	○	／	−	↓
	2-4	(122.1)	・1・ 7	4	0.41	1.4			2類	旧平坦面 2	2.4	円	×	／	−	±
	2-5	(157.1)	・1・18	1	0.47	1.6			2類	2-5	3.7	円	○	／	−	↓
	2-6	(102.8)	・1・ 1	8	0.51	1.7			2類	2-6	3.1	不	×	／	−	(±)
	2-7	(23.6)	・ ・ 7	13	0.48	1.6			2類	2-7	3.1	不	×	／	−	(±)

第 13 表　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ出土遺物観察表②

挿図No.	図版No.	器種	法量（器高／口径／底径）(cm)	特徴（形態・手法等）	焼成	胎土・材質等	色調（外面／内面）	備考	
49- 1	35	陶磁器・碗	3.5 ／ 7.3 ／ 2.6	肥前染付。小碗。外面に具須による絵柄あり。	—	—	灰白	60%残存。	2-5 号畑カクラン
49- 2	35	陶磁器・碗	(2.0) ／ −／＜ 5.0 ＞	肥前。脂胸染付。	良好	—	明オリーブ灰	体部～高台部 12 %残存。	2-3 号畑
49- 3	35	陶磁器・碗	(2.7) ／ −／＜ 3.6 ＞	肥前染付。菊花文。	—	—	灰白	体部～高台部 20 %残存。	2-2 号畑
49- 4	35	陶磁器・碗	(2.3) ／ −／＜ 4.4 ＞	肥前染付。雪輪梅儒文。	—	—	灰白	体部～高台部 40 %残存。	2-4 号畑
49- 5	35	陶磁器・碗	(2.3) ／ −／4.6	肥前染付。高台内に崩れた大明年製銘。	—	—	明緑灰	体部～高台部 60 %残存。	2-2 号畑
49- 6	35	陶磁器・皿	(1.2) ／ −／＜ 6.4 ＞	瀬戸・美濃陶器。鉄絵皿。	良好	—	灰白	体部～高台部 20 %残存。	2-5 号畑
49- 7	35	陶磁器・皿	(1.7) ／ −／ 5.8	肥前染付。皿。	—	—	灰白	体部～高台部 70 %残存。	2-1 号畑
49- 8	35	陶磁器・香炉	(2.8) ／ −／＜ 10.6 ＞	瀬戸・美濃陶器。筒形香炉。脚は 3 単位。外面は 3 条一単位の縦位施文。施釉部まり・内面未施釉。	—	—	—	体部～高台部 30 %残存。	2-5 号畑
49- 9	35	陶磁器・皿	2.0 ／＜ 8.0 ＞／＜ 3.6 ＞	瀬戸・美濃陶器。灯明皿。外面に鉄泥。	良好	—	褐／にぶい黄橙	40%残存	2-7 号畑
49-10	35	陶磁器・皿	2.3 ／ 6.95 ／ 5.0	瀬戸・美濃陶器。志戸呂。灯明受皿。内外面に鉄泥。	良好	—	黒褐／褐	40%残存	2-6 号畑
49-11	35	陶磁器・碗	(3.8) ／ −／−	肥前染付。小碗。外面は雨降文。	—	—	明オリーブ灰	破片資料（口縁部～体部）	2-5 号畑
49-12	35	陶磁器・碗	(3.5) ／ −／−	肥前染付。	—	—	灰白	破片資料（体部）	2 トレ
49-13	35	陶磁器・碗	(3.6) ／ −／−	肥前青磁染付。筒形碗。	—	—	明緑灰	破片資料（体部）	2-2 号畑
49-14	35	陶磁器・瓶	(5.9) ／ −／−	肥前染付。	—	—	灰白	破片資料（体部）	2-2 号畑
49-15	35	陶磁器・蓋	(2.0) ／ −／−	肥前染付。コンニャク印判。	—	—	灰白	破片資料（口縁部～体部）	2-1 号畑
49-16	35	陶磁器・碗	(2.8) ／ −／−	瀬戸・美濃陶器。尾呂茶碗。内外面とも施釉。	良好	—	オリーブ褐	破片資料（体部）	2-2 号畑
49-17	35	陶磁器・碗	(5.3) ／ −／−	瀬戸・美濃陶器。	良好	—	灰白	破片資料（口縁部～体部）	2-6 号畑
49-18	35	陶磁器・擂鉢	(3.5) ／ −／−	瀬戸・美濃陶器。	良好	小礫	灰黄褐	破片資料（体部）	1-1 号畑
49-19	35	陶磁器・擂鉢	(4.4) ／ −／−	瀬戸・美濃陶器。	良好		黒褐	破片資料（体部）	2-4 号畑
49-20	35	在地土器・鍋	(3.3) ／ −／−	内耳鍋か。内外面とも横位ナデ調整。	良好	白色粒・角閃石・長石	にぶい褐	破片資料（体部～底部）	2-5 号畑



第 50 図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅲトレンチ配置図（1/400）

第３章　第４次調査

第１節　調査の経過

１　発掘調査

発掘調査は、１区を平成 25 年９月 26 日から同年 10 月４日、２～４区を平成 26 年６月 11 日から同年６月 21 日、５区を平成 25 年 11 月 18 日から同年 11 月 20 日にわたって実施された。

（１区）

９月 26 日、１区表土掘削開始。２分の１終了。

９月 27 日、１区表土掘削５分の３終了。天明畑４枚を検出。

９月 30 日、表土掘削１区終了、畑面の精査。平坦面２箇所検出。平面図２分の１作成。

10 月１日、畝サク検出作業、平面図ほぼ終了。平坦面検出状況写真。

10 月２日、畝サク清掃後、全景撮影。サブトレ４本、株痕検出範囲１箇所設定。平断面図補足で調査終了。撤収。

10 月４日、埋め戻し終了。

（２～４区）

６月 11 日、表土掘削開始。４区・３区終了。

６月 12 日、表土掘削、２区半分終了。全面で天明畑検出。

６月 13 日、表土掘削終了。天明畑３枚検出。

６月 16 日、４区畑面精査。サブトレ１本設定。平坦面１箇所検出。

６月 17 日、３区畑面精査。サブトレ１本設定。２区畑面精査途中。

６月 19 日、２区畑面精査。攪乱断面をサブトレの代わりとして精査。平坦面１箇所検出。全体清掃、全景撮影。各畑ごとに株痕検出範囲を設定。写真撮影、平断面測量の補足をして調査終了。

６月 20 日、撤収。馬戻し開始。

６月 21 日、埋め戻し終了。

（５区）

11 月 18 日、表土掘削。泥流・軽石分布範囲を精査。道と思われる浅いＵ字状の硬質面を検出。

11 月 19 日、２段のテラス状地形を検出。全体清掃、全景撮影。３箇所セクション写真・作図。全体平面図作成後にサブトレ２本設定。

11 月 20 日、サブトレの写真・断面図を追加して調査終了。撤収。

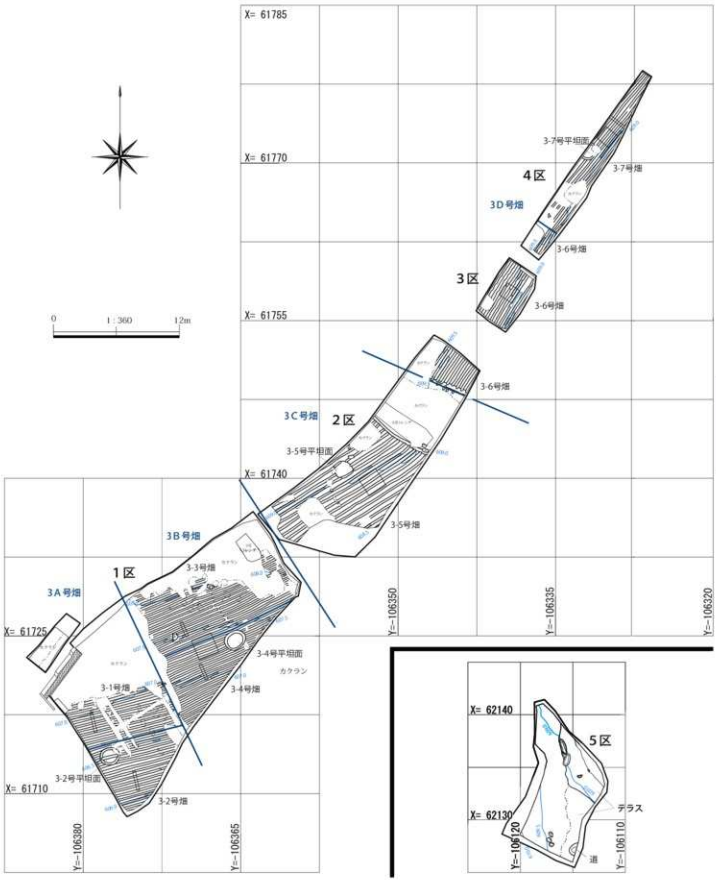
２　整理調査・報告書作成

基礎整理調査は、平成 26 年 11 月 25 日から平成 29 年１月 12 日にわたって実施された。発掘調査によって得られた遺物はテンバコで 2.0 箱（作物遺存体・サンプリング含む）、現場で作成した図面は 28 枚であった。整理調査は担当の他に作業員４名という体制であった。作業は複数遺跡の整理と併行して行われた。

遺物洗浄・注記作業・接合作業は平成 26 年 11 月 25 日から同年 11 月 27 日までに実施した。

遺物の実測・トレースは平成 26 年 11 月 28 日から同年 12 月 25 日まで本事業関連出土遺物をまとめて実施した。

遺構図版・写真図版のデジタル基礎編集は平成 28 年６月 30 日～平成 29 年１月 12 日までに事業の合間に実施した。



第 51 図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ調査区全体図（1/360）

第52図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ区全体図（1/150）

第２節　基本層序

本遺跡の基本層序は第 52・53 図 CC′で確認した。発掘調査での所見を併せると以下の通りである。

第１・２層　暗灰褐色土

いわゆる表土・盛土で、AS-A 軽石を疎らに含んでいる。締まりは上位が弱く、下位はやや強い。

第３層　茶褐色砂質土

いわゆる天明泥流で全体的に砂質で締まりは弱い。人頭大～の焼石（黒石）を含んでいる。本地点での層厚は最大で 100 ㎝である。礫の混入の割合で 3-1 ～ 3-3 層まで分層できた。下層にいくほど大きな礫を多く含んでいる。

第４層　軽石層

いわゆる AS-A 軽石である。天明３（1783）年新暦の７月 27 日～ 29 日に北東方向に降った軽石にあたる。本地点での層厚は３～６㎝である。

第５層　暗褐色土

いわゆる天明期の表土面である。畑の場合は作土で茶褐色を呈する場合もある。

第６層　暗褐色土

５層と近いが、礫を多量に含んでいる。

第３節　検出された遺構と遺物

１　調査の概要

今回の発掘調査は嶋木Ⅰ遺跡の第４次調査にあたる。調査範囲は町道嶋木線の山側の中位段丘面で第１章で報告した長野原城跡の調査地点から ＪＲ吾妻線須川橋梁を越えた付近である。これらはもともとは地続きで同じ畑面を構成していたと考えられる。長野原城跡側と対になる ＪＲ跨線橋橋台および橋柱、町道長野原線の本線が計画された。確認された遺構は、天明畑（単位畑）７枚、平坦面４箇所である。出土した遺物の種類は、陶磁器、鉄製品、石製品、作物遺存体で、その数量はテンバコで 2.0 箱分であった。

２　江戸時代の遺構と遺物

（１）畑跡・平坦面

３Ａ号畑（第 51 ～ 55 図／第 15 表／ＰＬ 36 ～ 38）

位置　１区南西隅。３Ｂ畑の南西側。本書第１編の長野原城跡とはＪＲ吾妻線を挟んで隣接する。

検出状況　ＪＲ A2 橋台設置予定の範囲を面的に広げた。個人住宅があったことから泥流のプライマリーな堆積状況は不明だが、現表土から 30 ～ 106㎝程で畑面を検出した。泥流と畑面の間には全体的に As-A 軽石で覆われている状況であった。畑面は北西から南東に向けて５～７°の勾配で傾斜しており、当時の斜面の様子が確認された。

規模　最大長 11.0 m、最大幅 9.3 m、検出面積 79.2㎡を測る。

遺物出土状況　畑面直上で２点の陶磁器が出土したが図示するには至らなかった。

単位畑　２枚の単位畑のみの検出である。試掘調査時に１区より一段上の４トレンチで現在も道として使用されていたが、明治期の絵図（第１図）にも道が描かれていることから、天明期にも畑の北側を通る道であった可能性が高い。軽石降下面（旧表土）の一部が確認されたため、3-1 号畑は北西側に傾斜をもって続いていたと考えてよいだろう。

①**3-1 号畑**

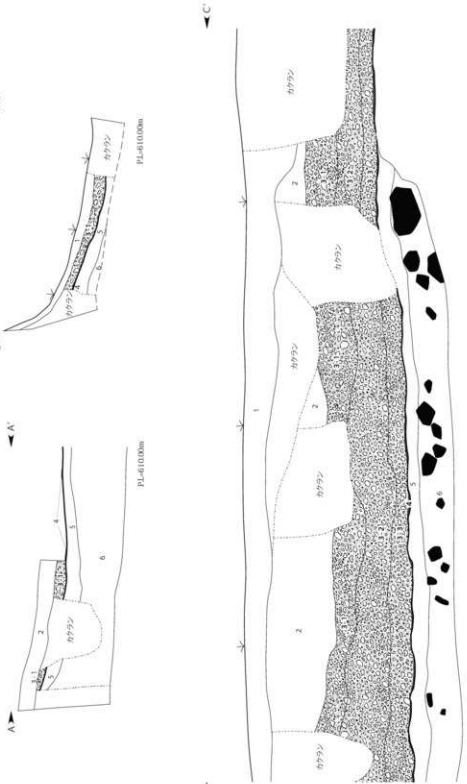
位置　１区南西隅。3-2 号畑の北西側、3-4 号畑の南西側。

遺存状況　北西側は大きな攪乱を被って消失しているが、遺存部分は良好。

規模　最大長 4.6 m、最大幅 9.3 m、検出面積 39.6㎡を測る。畝幅 0.45 m。

畝サク方向　Ｎ－ 15°－Ｗ

畝サク断面形状　関氏の２類。サブトレ（第 54 図 aa′）で確認したが、As-A 軽石降下前に１番ザクと２番ザク（土用



第53図　トレンチ断面図（1/40）

の培土）が終了していた耕作状況を示している。

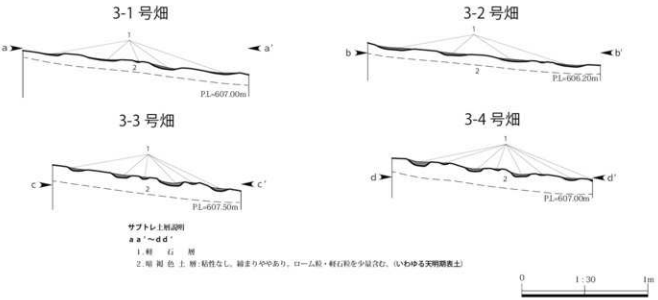
泥流によるキズ痕　ほとんど認められなかった。

作物遺存体・株痕　若干認められる程度で、株痕の検出は実施しなかった。

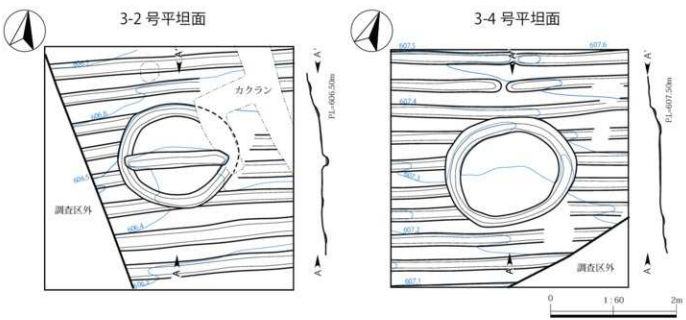
平坦面　攪乱により消失。

② 3-2 号畑

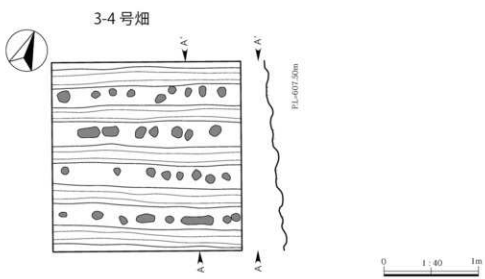
位置　1 区南西隅。3-1 号畑の南東側。



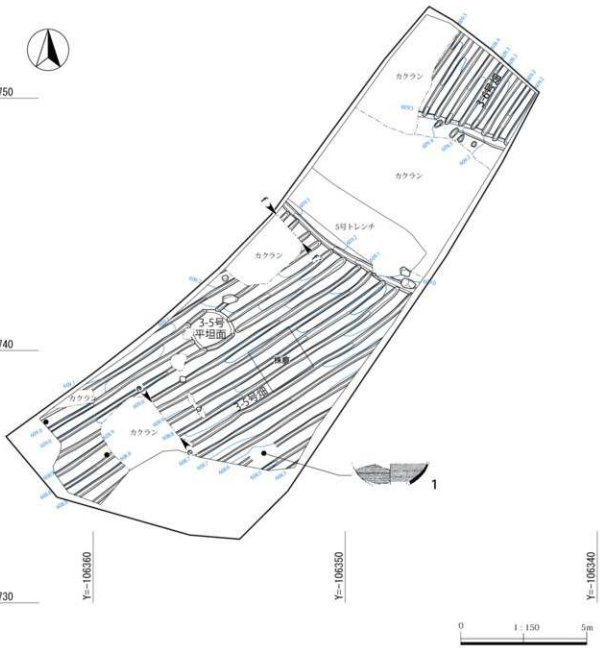
第 54 図　1 区畑跡断面図（1/30）



第 55 図　1 区平坦面実測図（1/60）



第 56 図　1 区株痕実測図（1/40）



第 57 図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ２区全体図（1/150）

遺存状況　良好。

規模　最大長 6.4 m、最大幅 8.6 m、検出面積 39.6㎡を測る。畝幅 0.45 m。

畝サク方向　N－15°－W

畝サク断面形状　関氏の２類。サブトレ（第 54 図 bb'）で確認したが、As-A 軽石降下前に１番ザクと２番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。

泥流によるキズ痕　ほとんど認められなかった。

作物遺存体・株痕　若干認められる程度で、株痕の検出は実施しなかった。

平坦面　１箇所。3-2 号平坦面（第 56 図）。

① **3-2 号平坦面**

位置　3-2 号畑の上端付近中央か。

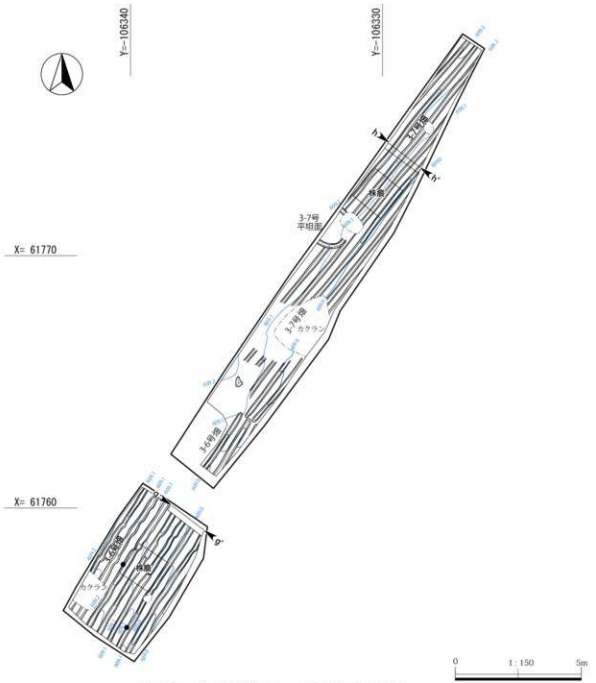
遺存状況　北東側の一部を攪乱で消失しているがほぼ全体の検出で、遺存状態は良好である。

形状　平面形は円形を呈している。平坦面に畝サクと並行に溝が１条設定されている。

規模　2.5㎡を測る。

周溝　全周する。

比高　山側は畝より低く、川側は畝とほぼ同じ。



第 58 図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ３・４区全体図（1/150）

３Ｂ号畑（第 51 ～ 56 図／第 15 表／ＰＬ 36 ～ 38）

位置　１区南西隅。３Ａ号畑の北東側。

検出状況　ＪＲ工事ヤードの範囲を面的に広げた。個人住宅があったことから泥流のプライマリーな堆積状況は不明だが、現表土から 50㎝程で畑面を検出した。泥流と畑面の間には全体的に As-A 軽石で覆われている状況であった。畑面は北西から南東に向けて５～７°の勾配で傾斜しており、当時の斜面の様子が確認された。

規模　最大長 13.3 m、最大幅 14.8 m、検出面積 106.5㎡を測る。

遺物出土状況　畑面直上で陶磁器が３点、鉄製品が１点、石製品が１点出土したが図示するには至らなかった。

単位畑　２枚の単位畑のみの検出である。

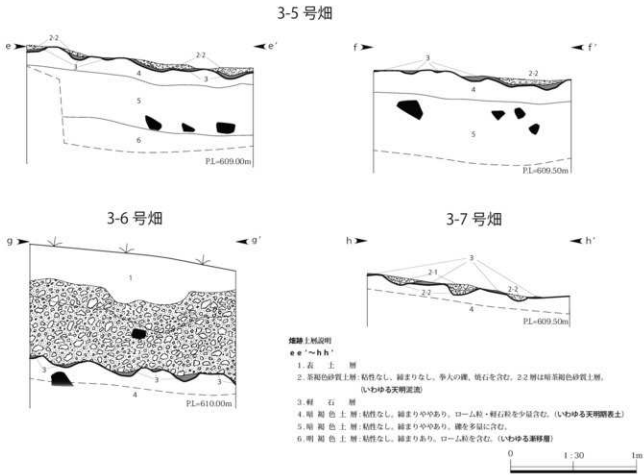
① 3-3 号畑

位置　１区北東側。3-1 号畑の北東側、3-4 号畑の北西側。

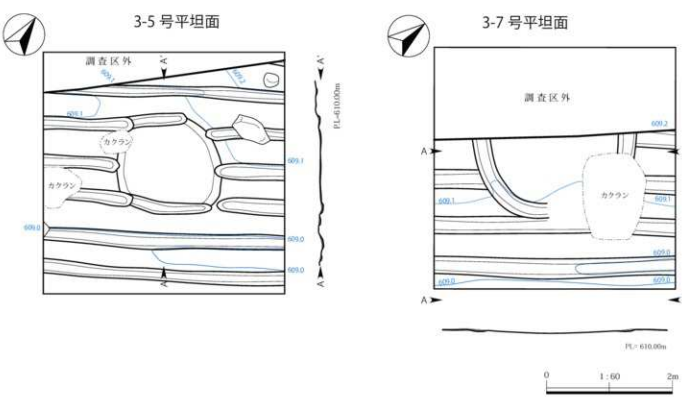
遺存状況　北及び北東側は攪乱を被って消失しているが遺存部は良好。

規模　最大長 6.3 m、最大幅 14.8 m、検出面積 61.1 ㎡を測る。畝幅 0.40 m。

畝サク方向　Ｎ－ 23°－Ｗ

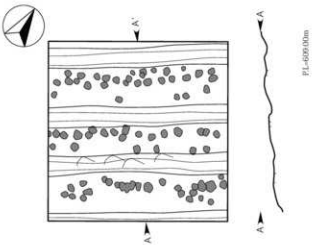


第 59 図　2～4 区畑跡断面図（1/30）

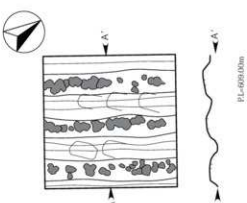


第 60 図　2～4 区平坦面実測図（1/60）

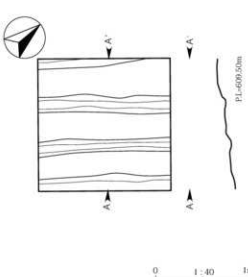
3-5 号畑



3-6 号畑



3-7 号畑



第 61 図　2 ～ 4 区株痕実測図（1/40）

畝サク断面形状　関氏の 2 類。サブトレ（第 54 図 cc'）で確認したが、As-A 軽石降下前に 1 番ザクと 2 番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。

泥流によるキズ痕　ほとんど認められなかった。

作物遺存体・株痕　作物遺存体は若干認められる程度で、株痕の検出は実施しなかった。

平坦面　攪乱により消失している。

② **3-4 号畑**

位置　1 区北東側。3-1・3-2 号畑の北東側、3-3 号畑の南東側。

遺存状況　良好。

規模　最大長 7.0 m、最大幅 12.4 m、検出面積 45.4㎡を測る。畝幅 0.40 m。

畝サク方向　N－23°－W

畝サク断面形状　関氏の 2 類。サブトレ（第 54 図 dd'）で確認したが、As-A 軽石降下前に 1 番ザクと 2 番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。

泥流によるキズ痕　2 箇所で認められた。いずれも畝サクに対して直交から上流側へ振れるものであり、逆流によるものであることを示している。

作物遺存体・株痕　作物遺存体は若干認められる程度で、株痕は 2m × 2 m の範囲で検出作業を実施した（第 56 図）。株痕は密に検出され、間隔は 10 ～ 15㎝であった。またサク入れをした際の鍬先の痕跡も確認された。

平坦面　1 箇所。3-4 号平坦面（第 55 図）。

① **3-4 号平坦面**

位置　3-4 号畑の上端付近中央。

遺存状況　遺存状態は良好である。

形状　平面形は円形を呈している。

規模　2.8㎡を測る。

周溝　全周する。

比高　山側は畝より低く、川側は畝より若干高い。

3 C 号畑（第 51・57・59 ～ 62 図／第 14・15 表／ P L 39 ～ 42・44）

位置　2 区北西側。3 B 号畑の北東側。3 D 号畑の南西側。

検出状況　本線南側の予定地である。国土交通省利根川砂防事務所があったことから泥流のプライマリーな堆積状況は不明だが、現表土から 40 ～ 60㎝程で畑面を検出した。泥流と畑面の間には全体的 As-A 軽石で覆われている状況であった。畑面は北西から南東に向けて 4°の勾配で傾斜しており、当時の斜面の様子が確認された。

規模　最大長 8.1 m、最大幅 15.4 m、検出面積 87.3㎡を測る。

遺物出土状況　畑面直上で 3 点の陶磁器が出土し、そのうち 1 点のみを図示し得た（第 62 図 1）。

単位畑　1枚の単位畑のみの検出である。

①3-5号畑

位置　2区南西側。3-3号畑の北東側。3-6号畑とは幅6mの空間（道か）を挟んで南西側に位置する。

遺存状況　攪乱を被っているが、遺存部分は良好。

規模　前述と同じ。畝幅0.57m。

畝サク方向　N－32°－W

畝サク断面形状　関氏の2類。サブトレ（第59図ee'・ff'）で確認したが、As-A軽石降下前に1番ザクと2番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。

泥流によるキズ痕　明確なものは1箇所。畝サクに直交している。

作物遺存体・株痕　作物遺存体は2点検出され、サンプリングした。サンプリング試料は泥流堆積物も含め取り上げられ、それらに関して花粉分析、プラント・オパール分析、大型植物遺体の同定を実施した（第4編第2章参照）。株痕は1.7m×1.7mの範囲で検出作業を実施した（第61図）。株痕は密に検出され、間隔は10～20cmであった。またサク中で工具痕も確認されている。

平坦面　1箇所。3-5号平坦面（第60図）。

①3-5号平坦面

位置　3-5号畑の上端付近中央。

遺存状況　遺存状態は良好である。

形状　平面形は不整円形を呈している。

規模　現状で2.7㎡、復元3.3㎡を測る。

周溝　上端・下端に畝サクと並行に設定されているのみ。

比高　山側・川側とも畝より低い。

3D号畑（第51・58～61図／第17・18表／PL42～44）

位置　2区北東側。3区・4区。

検出状況　本線南側の予定地である。もともとは町営住宅があったことから泥流のプライマリーな堆積状況は不明だが、現表土から90～100cm程で畑面を検出した。泥流と畑面の間には全体的にAs-A軽石で覆われている状況であった。畑面は北西から南東に向けて4°の勾配で傾斜しており、当時の斜面の様子が確認された。

規模　最大長4.2m、最大幅34.6m、検出面積66.5㎡を測る。

遺物出土状況　畑面直上で2点の陶磁器が出土したが図示するには至らなかった。

単位畑　2枚の単位畑のみの検出である。

①3-6号畑

位置　2区北東側。3-5号畑とは幅6mの空間（道か）を挟んで北東側に位置する。3区および4区にも跨がっている。3-7号畑の南西側。

遺存状況　一部攪乱を被っているが良好。

規模　最大長4.2m、最大幅17.6m、検出面積34.6㎡を測る。畝幅0.47m。

畝サク方向　N－56°－W

畝サク断面形状　関氏の2類。サブトレ（第59図gg'）で確認したが、As-A軽石降下前に1番ザクと2番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。

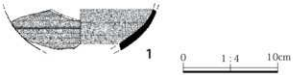
泥流によるキズ痕　ほとんど認められなかった。

作物遺存体・株痕　作物遺存体は1点検出され、サンプリングした。株痕は1.5m×1.5mの範囲で検出作業を実施した（第61図）。株痕は密に検出され、間隔は10～20cmであった。またサク中で工具痕も確認され、幅16～17cmの鍬を使用していたようである。

平坦面　未検出。調査区外に存在するものと考えられる。

②3-7号畑

位置　4区。3-6号畑の北東側。



第 62 図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ出土遺物実測図（1/4）

第 14 表　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ出土遺物観察表

挿図No.	図版No.	器種	法量（器高／口径／底径）(cm)	特徴（形態・手法等）	焼成	胎土・材質等	色調（外面／内面）	備　考
60-1	44	陶磁器・鉢	(4.3) ／ ― ／ ―	瀬戸・美濃陶器。片口鉢か。内外面とも施釉。	良好	―	にぶい黄	体部 20% 残存。　3-5 号壁

第 15 表　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ畑跡・平坦面一覧

＊尺換算は曲尺：1 尺＝ 10/33 m を用いた。面積は 1 歩＝ 6 尺平方で算出。

畑名	単位畑名	単位畑 面積 (㎡)	単位畑 畝・畝・歩	単位畑 斜度 (°)	単位畑 畝幅 (m)	単位畑 相当尺寸 (尺)	畑面積 畑面積 (㎡)	畑面積 畝・畝・歩	畑断面		平坦面 平坦面	平坦面 面積 (㎡)	平坦面 形状	平坦面 溝	平坦面 窪み	平坦面 形状	平坦面 比高
3A	3-1	(39.6)	・・12	7	0.45	1.5	79.2	・・24	2類		3-1	―	―	―	―	―	―
	3-2	(39.6)	・・12	5	0.45	1.5			2類		3-2	2.5	円	○	凹	溝	±
3B	3-3	(61.1)	・・18	7	0.40	1.3	106.5	・1・2	2類		3-3	―	―	―	―	―	―
	3-4	(45.4)	・・14	5	0.40	1.3			2類		3-4	2.8	円	○	／	―	±
3C	3-5	(87.3)	・・26	4	0.57	1.9	87.3	・・26	2類		3-5	2.2	不	○	／	―	↓
3D	3-6	(34.6)	・・10	4	0.47	1.5	66.5	・・20	2類		3-6	―	―	―	―	―	―
	3-7	(31.9)	・・10	6	0.45	1.5			7類		3-7	<2.3> (1.2)	円	○	／	―	↓

遺存状況　一部攪乱を被っているが良好。

規模　最大長 2.5 m、最大幅 17.0 m、検出面積 31.9㎡を測る。畝幅 0.45 m。

畝サク方向　N－50°－W

畝サク断面形状　関氏の 7 類。サブトレ（第 59 図 hh'）で確認したが、一番ザク終了後に As-A 軽石降下、前その後の二番ザク（土用の培土）は行われずに泥流被災したことを示している。

泥流によるキズ痕　3 箇所で認められた。畝サクに直交するもの 1 箇所のほか、下流側へやや振れるもの 2 箇所である。

作物遺存体・株痕　作物遺存体は若干認められる程度で、株痕は 1.5 m× 1.5 m の範囲で検出作業を実施したが株痕は認められなかった（第 61 図）。

平坦面　1 箇所。3-7 号平坦面（第 60 図）。

①3-7 号平坦面

位置　3-7 号畑の上端付近中央か。

遺存状況　調査区外に延びており全体の約 2 分の 1 の検出で、遺存状態は良好である。

形状　平面形は円形を呈している。

規模　現状で 1.2㎡、復元 2.3㎡を測る。

周溝　攪乱により一部消失しているが、全周するタイプと考えられる。

比高　山側は調査区外で不明であるが、川側は畝より低い。

（2）道路状遺構・テラス

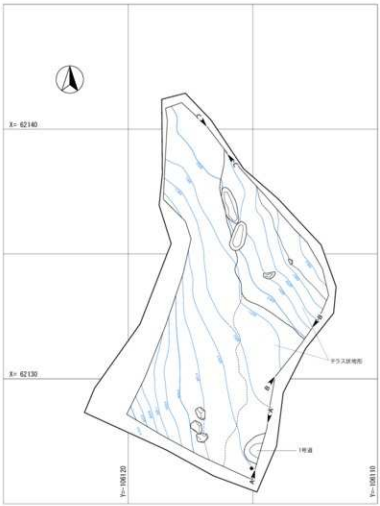
1 号道（第 63・64 図／P L 45）

位置　5 区南東隅。

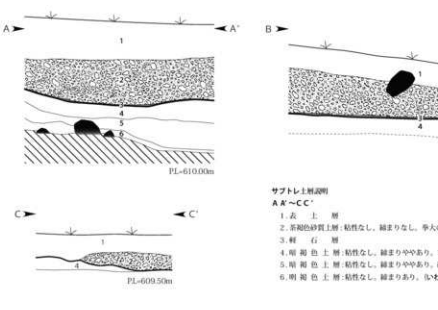
検出状況　白砂橋 A1 橋台設置予定の範囲を面的に広げた。畑の検出が予想されたが、現表土から 50 ～ 75cm程の深さで軽石を分布する 2 段のテラス状地形を検出した。軽石の分布は調査区東壁から北壁付近でのみ認められ、その他は削平を被っていると考えられた。上段のテラスはほぼ平坦なのに対して下段は約 10°の勾配で傾斜しており、上段の一部で緩い逆台形状の窪みが検出された。検出面積が少ないことから断定はできないが、若干の硬化面の存在から道路状遺構と判断した。

規模　検出長 0.55 m、検出幅 1.0 mを測る。

遺物出土状況　調査区内で 1 点の陶磁器が出土したが図示するには至らなかった。



第 63 図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ 5 区全体図（1/120）



第 64 図　サブトレ断面図（1/40）

第４章　第５次調査

第１節　調査の経過

１　発掘調査

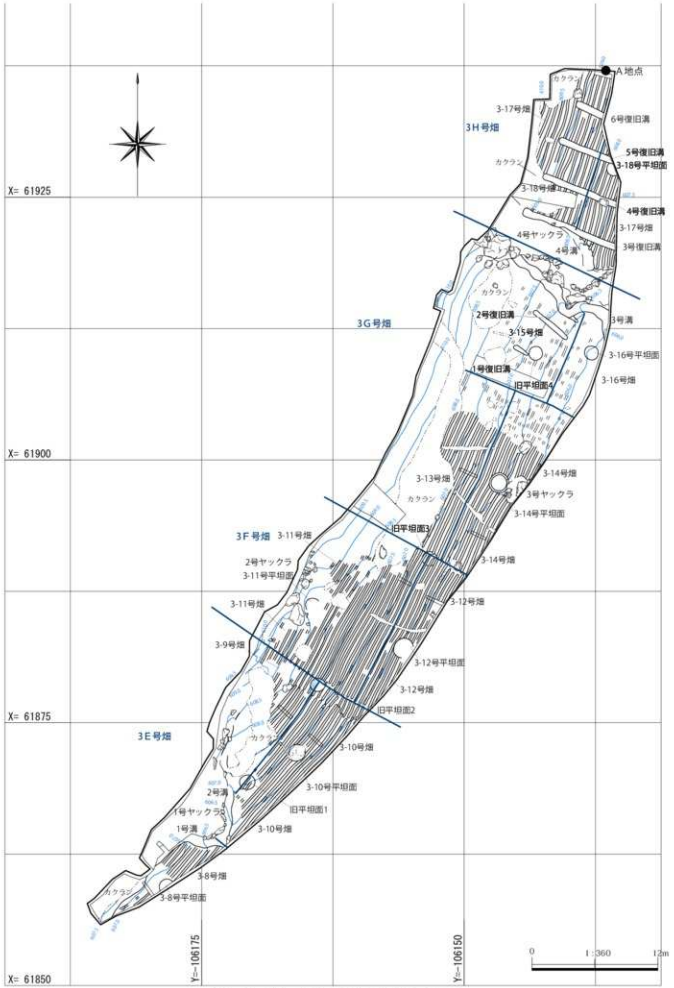
発掘調査は、平成 26 年６月 24 日から８月７日にわたって実施された。
６月 24 日、土の搬出が困難なため打って返しの調査。南側調査区の表土掘削開始。
６月 25 日、表土掘削２分の１終了。豪雨のため 14 時半で終了。
６月 26 日、表土掘削５分の４終了。ジョレンがけ。
６月 27 日、表土掘削終了。天明畑５枚検出。ジョレンがけ２分の１終了。
６月 30 日、ジョレンがけ終了。泥流除去・畑面の精査。
７月　２日、泥流除去・畑面の精査。ヤックラ・溝２条検出。
７月　４日、サブトレ５本設定。平坦面５箇所。泥流によるキズ痕１箇所、泥流の天端３箇所確認。
７月　７日、雨天中止。
７月　８日、平断面作成。写真清掃。
７月　９日、全景撮影。株痕検出範囲を２箇所設定。平断面図の補足をして南側調査区調査終了。反転開始。
７月 14 日、北側調査区の表土掘削４分の１終了。ジョレンがけ。
７月 17 日、表土掘削２分の１終了。ジョレンがけ。夕方ゲリラ豪雨。調査区中央埋没。
７月 24 日、表土掘削終了。天明畑・平坦面・ヤックラ・溝・復旧溝等を検出。
７月 29 日、泥流除去・畑面の精査。サブトレ２本設定。
７月 30 日、調査区内に杉の木の倒木。泥流除去・畑面の精査。泥流によるキズ痕２箇所確認。平断面図作成開始。
７月 31 日、泥流除去・畑面の精査。サブトレ３箇所設定。
８月　４日、泥流除去・畑面の精査。調査区中央の畝サクの不明瞭な畑精査。全体清掃開始。
８月　５日、全景撮影。株痕検出範囲を２箇所設定。溝・復旧溝の掘り下げ。
８月　７日、溝・復旧溝の完掘写真、平断面図の補足をしてすべての調査終了。撤収。

２　整理調査・報告書作成

基礎整理調査は、平成 25 年５月 24 日から平成 26 年 12 月 25 日にわたって実施された。発掘調査によって得られた遺物はテンバコで 2.5 箱（作物遺存体・サンプリング含む）、現場で作成した図面は 14 枚であった。整理調査は担当の他に作業員４名という体制であった。作業は複数遺跡の整理と併行して行われた。
遺物洗浄・注記作業・接合作業は平成 25 年５月 24 日から同年５月 27 日までに実施した。その結果、実測するに値する遺物は得られていないことが判明した。
遺構図版・写真図版のデジタル基礎編集は平成 26 年 11 月 25 日～同年 12 月 27 日までに事業の合間に実施した。

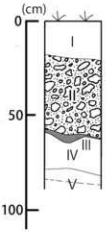
第２節　基本層序

本遺跡の基本層序は第 65 図Ａ地点で確認した。発掘調査での所見を併せると以下の通りである。
第Ⅰ層　暗灰褐色土
いわゆる表土で、AS-A 軽石を疎らに含んでいる。上位は畑の耕作土で拳大の礫を多く含んでいる。締まりは上位が弱く、下位はやや強い。
第Ⅱ層　茶褐色砂質土
いわゆる天明泥流で全体的に砂質で締まりは弱い。人頭大～の焼石（黒石）を含んでいる。本地点での層厚は最大で 76



第 65 図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ調査区全体図（1/360）

cmである。
第Ⅲ層　軽石層
いわゆるAS-A軽石である。天明3（1783）年新暦の7月27日～29日に北東方向に降った軽石にあたる。本地点での層厚は3～6cmである。
第Ⅳ層　暗褐色土
いわゆる天明期の表土面である。畑の場合は作土で茶褐色を呈する場合もある。
第Ⅴ層　暗褐色土
第Ⅳ層と近いが礫を多量に含んでいる。



第66図　基本土層図（1/20）

第3節　検出された遺構と遺物

1　調査の概要

今回の発掘調査は嶋木Ⅰ遺跡の第5次調査にあたる。調査範囲は町道嶋木線の山側の中位段丘面で4次調査から間を置いて接続する町道長野原線の本線が計画された地点にあたる。確認された遺構は、天明畑（単位畑）11枚、平坦11箇所、ヤックラ4基、溝状遺構4条、復旧溝6条である。出土した遺物の種類は、陶磁器、作物遺存体で、その数量はテンバコで2.5箱分であった。

2　江戸時代の遺構と遺物

（1）畑跡・平坦面

3E号畑（第65・67・69～71・76図／第16・17表／PL46～49・58）

位置　調査区南西隅。3F畑の南西側。

検出状況　本線敷設箇所を面的に広げた。調査区は梅林で使われており、後に積まれたと考えられる石垣も存在する。泥流のプライマリーな堆積状況は不明だが、現表土から最深78cmで畑面を検出した。泥流と畑面の間には全体的にAs-A軽石で覆われている状況であった。畑面は北東から南西に向けて11～18°の勾配で傾斜しており、当時の斜面の様子が確認された。

規模　最大長10.4m、最大幅27.6m、検出面積113.5㎡を測る。

遺物出土状況　畑面直上で2点の陶磁器が出土し、そのうち1点のみを図示し得た（第76図1）。

単位畑　3枚の単位畑のみの検出である。

①**3-8号畑**

位置　調査区南西隅。北東側には1号ヤックラ・1号溝・2号溝を挟んで3-9号畑と隣接する。

遺存状況　良好。畑北西側は1段高くなっており、1号ヤックラとなっている。その境界付近で泥流の天端（第67・69図AA'）が確認されている。

規模　最大長3.4m、最大幅10.8m、検出面積19.0㎡を測る。畝幅0.52m。

畝サク方向　N－50°－E

畝サク断面形状　関氏の2類。サブトレ（第70図aa'）で確認したが、As-A軽石降下前に1番ザクと2番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。

泥流によるキズ痕　目立ったキズ痕は確認されなかった。

作物遺存体・株痕　作物遺存体は若干認められる程度で、株痕の検出は今回実施しなかった。

平坦面　1箇所。3-8号平坦面（第71図）。

①**3-8号平坦面**

位置　3-8号畑の上端付近中央か。

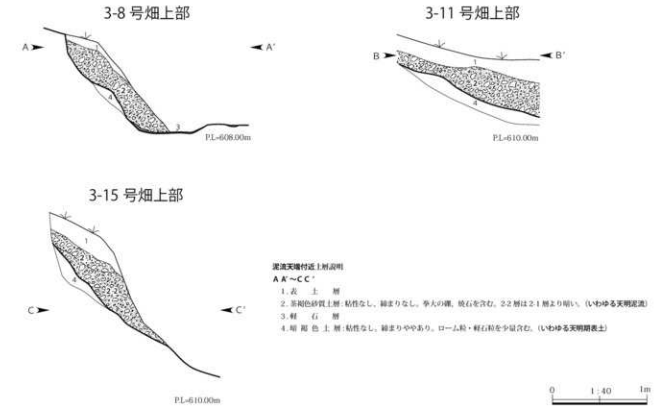
遺存状況　調査区外に延びており全体の約2分の1の検出で、遺存状態は良好である。

形状　平面形は円形を呈している。

規模　現状で0.8㎡、復元1.7㎡を測る。

第 67 図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ調査区全体図①（1/200）

第 68 図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ調査区全体図②（1/200）



第 69 図　泥流天端付近断面図（1/40）

周溝　なし。

比高　山側は畝より低く、川側は調査区外のため不明。

② 3-9 号畑

位置　調査区南西側。1 号ヤックラ・2 号溝の北東側、3-10 畑の北西側、3-11 号畑の南西側。

遺存状況　検出部分の約 2 分の 1 が攪乱を被っているおり、やや不良。また北東隅で 3-11 号畑に跨ぐかたちで泥流の天端が確認されている。

規模　最大長 5.4 m、最大幅 14.6 m、検出面積 27.0㎡を測る。畝幅 0.50 m。

畝サク方向　N－50°－E

畝サク断面形状　関氏の 2 類。サブトレ（第 70 図 bb'）で確認したが、As-A 軽石降下前に 1 番ザクと 2 番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。

泥流によるキズ痕　明確ではないものの、1 号ヤックラの北東側とそれに沿って走る 2 号溝、その周辺あるいは延長上に攪乱が分布している。

作物遺存体・株痕　作物遺存体は若干認められる程度で、株痕の検出は今回実施しなかった。

平坦面　攪乱により消失か。

③ 3-10 号畑

位置　調査区南西側。南西側には 1 号ヤックラ・1 号溝・2 号溝を挟んで 3-8 号畑と隣接する。3-11・3-12 号畑の南西側。

遺存状況　良好。

規模　最大長 5.0 m、最大幅 16.8 m、検出面積 67.5㎡を測る。畝幅 0.51 m。

畝サク方向　N－51°－E

畝サク断面形状　関氏の 2 類。サブトレ（第 70 図 cc'）で確認したが、As-A 軽石降下前に 1 番ザクと 2 番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。

泥流によるキズ痕　1 箇所で認められた。3-10 号平坦面の南西側をかすめるように泥流中の石により付けられた直線的なキズ痕と考えられる（N－32°－W）。

作物遺存体・株痕　作物遺存体は若干認められる程度で、株痕は 1.5 m× 1.5 mの範囲で検出作業を実施した（第 73 図）。株痕は密に検出され、間隔は 10 ～ 20㎝であったが、1 畝だけ大振りで作物の差異が考えられる。

平坦面　3 箇所。3-10 号平坦面・旧平坦面 1・旧平坦面 2（第 71 図）。

①3-10 号平坦面

位置　3-10 号畑の上端付近中央。

遺存状況　遺存状態は良好である。

形状　平面形は円形を呈している。

規模　2.0㎡を測る。

周溝　なし。

比高　山側は畝より低く、川側は畝より高い。

②旧平坦面 1

位置　3-9・10 号畑の畑境付近南西寄り。

遺存状況　畝サクと重複しており、遺存状態はやや不良である。

形状　平面形は円形を呈している。

規模　1.6㎡を測る。

周溝　なし。

比高　山側・川側とも畝より低い。

③旧平坦面 2

位置　3-9・10・11 号畑の畑境付近。

遺存状況　畝サクと重複しており、遺存状態はやや不良である。

形状　平面形は円形を呈している。

規模　1.4㎡を測る。

周溝　なし。

比高　山側は畝より低く、川側は畝より高い。

3 F号畑（第 65・67・69・71 ～ 73・76 図／第 17・18 表／ P L 46・50・51・58）

位置　調査区南西側。3 E畑の北東側、3 G畑の南西側。

検出状況　本線敷設箇所を面的に広げた。調査区は梅林で使われており、後に積まれたと考えられる石垣も存在する。泥流のプライマリーな堆積状況は不明だが、現表土から最深 80㎝で畑面を検出した。泥流と畑面の間には全体的に As-A 軽石で覆われている状況であった。畑面は北東から南西に向けて 11 ～ 18°の勾配で傾斜しており、当時の斜面の様子が確認された。

規模　最大長 12.7 m、最大幅 15.0 m、検出面積 156.8㎡を測る。

遺物出土状況　畑面直上で 2 点の陶磁器が出土し、そのうち 1 点のみを図示し得た（第 76 図 2）。

単位畑　2 枚の単位畑のみの検出である。

①3-11 号畑

位置　調査区中央南西寄り。3-9 号畑の北東側、3-12 号畑の北西側、2 号ヤックラの南東側。

遺存状況　畑の北西側半分は不良。2 号ヤックラを挟んで南西側と北東側で泥流の天端を 2 箇所確認している。

規模　最大長 8.9 m、最大幅 15.0 m、検出面積 109.4㎡を測る。畝幅 0.44 m。

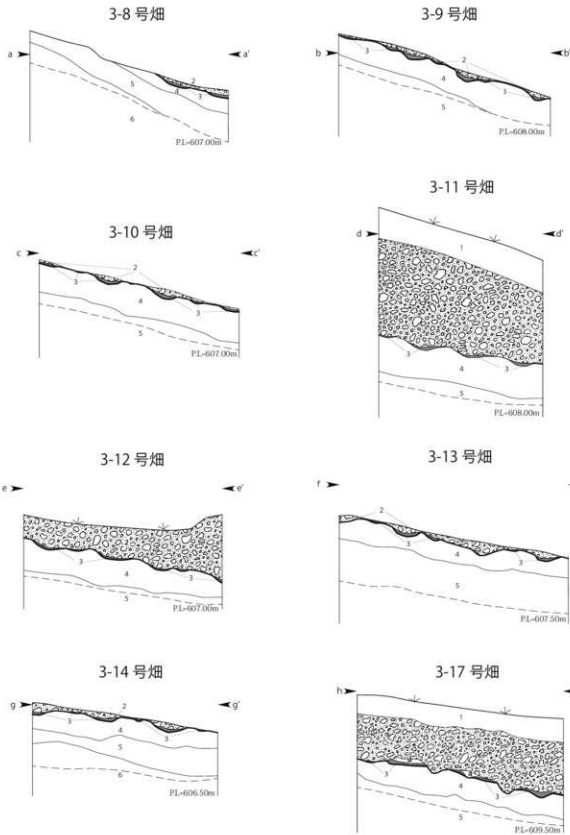
畝サク方向　N － 63°－ E

畝サク断面形状　関氏の 2 類。サブトレ（第 70 図 dd'）で確認したが、As-A 軽石降下前に 1 番ザクと 2 番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。

泥流によるキズ痕　1 箇所で認められている。3-12 号平坦面の北東側に泥流中の石により付けられた緩くカーブするキズ痕と考えられる。3-12 号畑中では川の上流側から入り（N － 90°－ W）、3-11 号畑では畝サクに直交して止まっている（N － 63°－W）。

作物遺存体・株痕　ほとんど認められなかった。

平坦面　1 箇所。3-11 号平坦面（第 71 図）。



畑跡土層説明

a a' ～ h h'

1. 表　土　層
2. 黒褐色砂質土層：粘性なし、締まりなし、拳大の礫、焼石を含む。**（いわゆる天明泥流）**
3. 軽　石　層
4. 旧 耕 色 土 層：粘性なし、締まりややあり、ローム粒・軽石粒を少量含む。**（いわゆる天明期表土）**
5. 旧 耕 色 土 層：粘性なし、締まりややあり、礫を多量に含む。
6. 明 耕 色 土 層：粘性なし、締まりあり、ローム粒を含む。**（いわゆる漸移層）**

0　1:30　1m

第 70 図　畑跡断面図（1/30）

①3-11 号平坦面

位置　3-11 号畑の上端付近中央南西寄り。2 号ヤックラの南東側。

遺存状況　攪乱を被っており約 2 分の 1 の検出で、遺存状態はやや不良である。

形状　平面形は円形を呈している。

規模　現状で 0.7㎡、復元 1.5㎡を測る。

周溝　なし。

比高　遺存度が不良であるが、畝より低い。

②3-12 号畑

位置　調査区中央南西寄り。3-10 号畑の北東側、3-11 号畑の南東側、3-13・3-14 号畑の南西側。

遺存状況　良好。

規模　最大長 3.8 m、最大幅 15.0 m、検出面積 47.4㎡を測る。畝幅 0.44 m。

畝サク方向　N－63°－E

畝サク断面形状　関氏の 2 類。サブトレ（第 70 図 ee'）で確認したが、As-A 軽石降下前に 1 番ザクと 2 番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。

泥流によるキズ痕　1 箇所で認められている。3-12 号平坦面の北東側に泥流中の石により付けられた緩くカーブするキズ痕と考えられる。3-12 号畑中では川の上流側から入り（N－90°－W）、3-11 号畑では畝サクに直交して止まっている（N－63°－W）。

作物遺存体・株痕　作物遺存体は若干認められる程度で、株痕は 1.5 m× 1.5 m の範囲で検出作業を実施した（第 73 図）。株痕は密に検出され、間隔は 10 ～ 15㎝であった。

平坦面　2 箇所。3-12 号平坦面（第 71 図）・旧平坦面 3（第 72 図）。

①3-12 号平坦面

位置　3-12 号畑の上端付近中央南西寄り。

遺存状況　一部攪乱を被っているが、遺存状態は良好である。

形状　平面形は円形を呈している。

規模　現状で 2.4㎡、復元 2.8㎡を測る。

周溝　なし。

比高　山側・川側とも畝より低い。

②旧平坦面 3

位置　3-11・12・13 号畑の畑境付近。

遺存状況　畝サクと重複し、遺存状態はやや不良である。

形状　平面形は円形を呈している。

規模　1.5㎡を測る。

周溝　なし。

比高　高低差なし。

3 G号畑（第 65・68 ～ 70・72・73・76 図／第 16・17 表／ＰＬ 52 ～ 55・58）

位置　調査区中央北東寄り。3 F 畑の北東側、3・4 号溝・4 号ヤックラを挟んで 3 H 畑の南西側。

検出状況　本線敷設箇所を面的に広げた。調査区は梅林で使われており、後に積まれたと考えられる石垣も存在する。泥流のプライマリーな堆積状況は不明だが、現表土から最深 60㎝で畑面を検出した。泥流と畑面の間には全体的に As-A 軽石で覆われている状況であった。畑面は北東から南西に向けて 7 ～ 12°の勾配で傾斜しており、当時の斜面の様子が確認された。

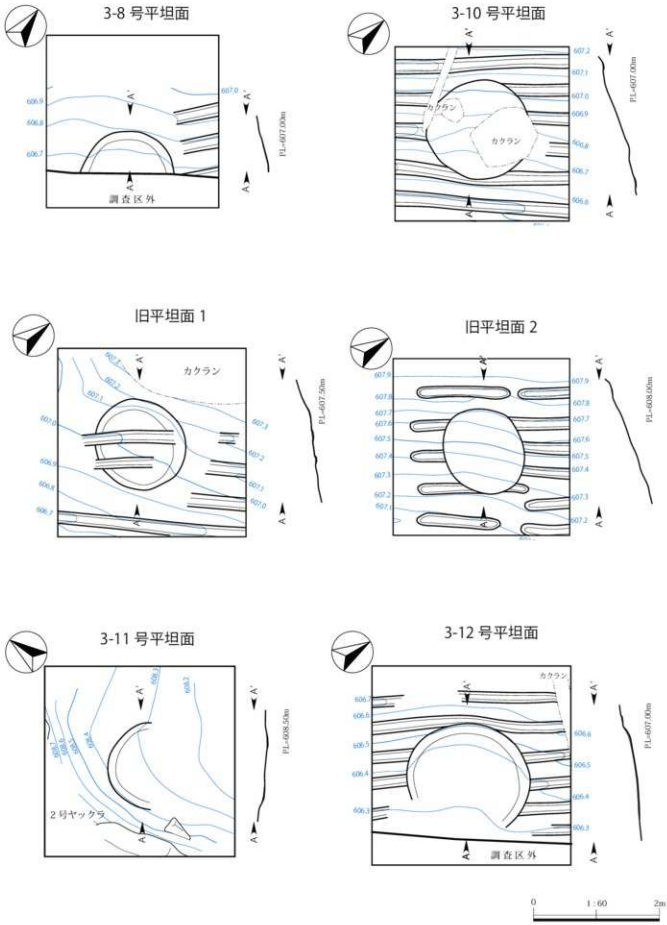
規模　最大長 12.7 m、最大幅 15.0 m、検出面積 156.8㎡を測る。

遺物出土状況　畑面直上で 3 点の陶磁器が出土したが図示するには至らなかった。

単位畑　4 枚の単位畑の検出である。

①3-13 号畑

位置　調査区中央。3-11・3-12 号畑の北東側、3-14 号畑の北西側、3-15 号畑の南西側。



第 71 図　平坦面実測図①（1/60）

遺存状況　北西側は後世の石垣の攪乱で消失、北東側も天明泥流後の洪水等で攪乱を被っている。その他は良好。
規模　最大長 4.0 m、最大幅 16.2 m、検出面積 57.2㎡を測る。畝幅 0.51 m。
畝サク方向　N－65°－E
畝サク断面形状　関氏の2類。サブトレ（第 70 図 gg'）で確認したが、As-A 軽石降下前に 1 番ザクと 2 番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。
泥流によるキズ痕　2箇所で認められた。いずれも泥流中の石により付けられた直線的なキズ痕と考えられ、3-13・3-14 号畑に跨って検出されているが、その方向が対照的である。畝サク方向に直交から上流側へ振れるもの（N－40°－W）と逆に下流へ振れるもの（N－89°－W）が同一畑で確認された。
作物遺存体・株痕　作物遺存体は若干認められる程度で、株痕の検出は今回実施しなかった。
平坦面　攪乱により消失。

② 3-14 号畑

位置　調査区中央。3-12 号畑の北東側、3-13 号畑の南東側、3-15・3-16 号畑の南西側。
遺存状況　平坦面の南東側に 3 号ヤックラが存在し、北東側が天明泥流後の洪水等で攪乱を被っているが、その他検出部分は良好。
規模　最大長 4.8 m、最大幅 16.2 m、検出面積 79.9㎡を測る。畝幅 0.55 m。
畝サク方向　N－65°－E
畝サク断面形状　関氏の2類。サブトレ（第 70 図 ff'）で確認したが、As-A 軽石降下前に 1 番ザクと 2 番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。
泥流によるキズ痕　3箇所で認められた。3-13 号畑と共通する 2 箇所のほか、上流側へ振れるもの（N－55°－W）が確認されている。
作物遺存体・株痕　作物遺存体は 1 点検出され、サンプリングした。サンプリング試料は泥流堆積物も含め取り上げられ、それらに関して自然科学分析を実施した（第 4 編第 2 章参照）。株痕は 1.5 m× 1.5 m の範囲で検出作業を実施した（第 73 図）。株痕は大振りで密に検出され、間隔は 10 ～ 20㎝であった。
平坦面　1 箇所。3-14 号平坦面（第 72 図）。

① 3-14 号平坦面

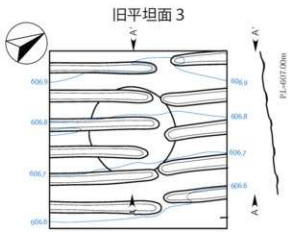
位置　3-14 号畑の上端付近中央。3 号ヤックラの北西側。
遺存状況　遺存状態は良好である。
形状　平面形は円形を呈している。
規模　2.7㎡を測る。
周溝　全周する。
比高　川側は 3 号ヤックラがあり不明瞭だが、山側・川側とも畝より低い。

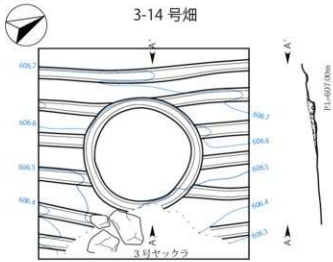
③ 3-15 号畑

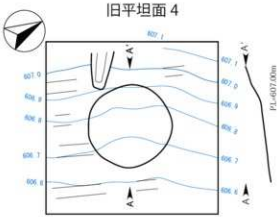
位置　調査区中央北東寄り。3-13・3-14 号畑の北東側、3-16 号畑の北西側、3 号溝・4 号ヤックラの南西側。
遺存状況　全体的に天明泥流到達前、As-A 軽石降下後の鋤込みが行われている上に、泥流後の洪水等の攪乱を被っていると考えられ不良。復旧溝と思われる溝が 2 条（2 間間隔）検出されているほか、北西側調査区際で泥流の天端（第 68・69 図 CC'）を確認している。
規模　最大長 6.2 m、最大幅 9.0 m、検出面積 76.7㎡を測る。畝幅 0.44 m。
畝サク方向　N－65°－E
畝サク断面形状　関氏の 4 類。確認調査の 3 号トレンチ（第 15 図 CC'）で確認したが、As-A 軽石降下後に鋤き込みが行われたことを示している。作土と軽石がブロック状に撹拌されている。
泥流によるキズ痕　1 箇所で認められたが、泥流によるかどうかは不明である。
作物遺存体・株痕　なし。
平坦面　1 箇所。旧平坦面 4（第 72 図）。

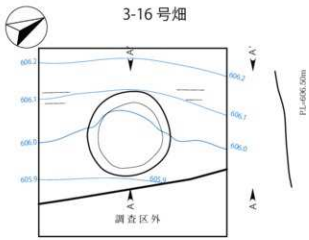
①旧平坦面 4

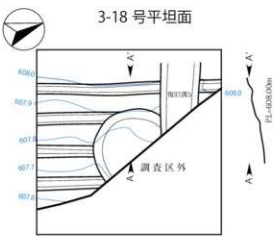
位置　3-15 号畑の中央南寄り。



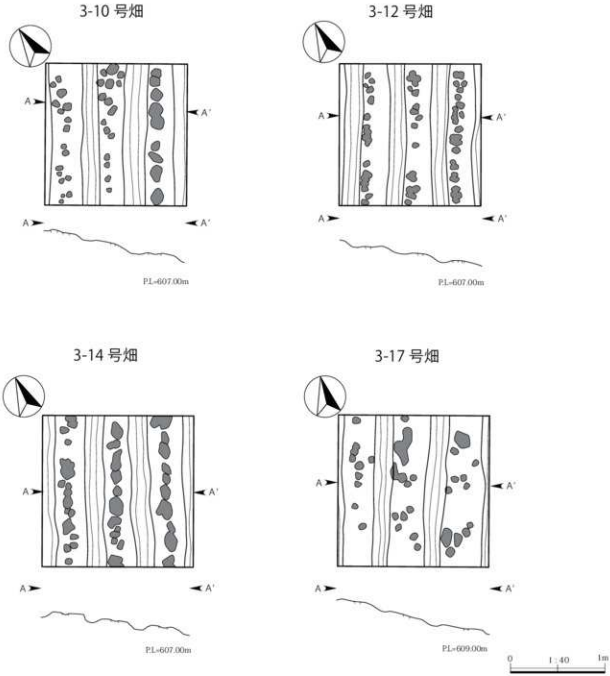








第 72 図　平坦面実測図②（1/60）



第 73 図　株痕実測図（1/40）

遺存状況　遺存状態は不良である。
形状　平面形は円形を呈している。
規模　1.3㎡を測る。
周溝　なし。
比高　不明。

④ 3-16 号畑

位置　調査区中央北東寄り。3-14 号畑の北東側、3-15 号畑の南東側、3 号溝・4 号ヤックラの南側。
遺存状況　全体的に天明泥流到達前、As-A 軽石降下後の鋤込みが行われている上に、泥流後の洪水等の攪乱を被っていると考えられ不良。
規模　最大長 3.0 m、最大幅 9.3 m、検出面積 27.8㎡を測る。畝幅 0.50 m。
畝サク方向　N－65°－W
畝サク断面形状　サブトレを設定していないので不明であるが、遺存状況が不良な状況は 3-15 号畑と類似している。
泥流によるキズ痕　明確なものは認められなかった。

作物遺存体・株痕　ほとんど認められなかった。
平坦面　1箇所。3-16号平坦面（第72図）。

①3-16号平坦面

位置　3-16号畑の上端付近中央。
遺存状況　遺存状態はやや不良である。
形状　平面形は円形を呈している。
規模　1.4㎡を測る。
周溝　なし。
比高　山側は畝より低く、川側は畝より高い。

3H号畑（第65・68・70・72・73図／第16・17表／PL52・56・58）
位置　調査区北東隅。3・4号溝・4号ヤックラを挟んで3G畑の北東側。
検出状況　調査区は梅林で使われており、泥流のプライマリーな堆積状況は不明だが、現表土から最深60㎝で畑面を検出した。泥流と畑面の間には全体的にAs-Aで覆われている状況であった。畑面は北東から南西に向けて8～14°の勾配で傾斜しており、当時の斜面の様子が確認された。
規模　最大長10.8m、最大幅16.9m、検出面積90.8㎡を測る。
遺物出土状況　畑面直上で2点の陶磁器が出土したが図示するには至らなかった。
単位畑　2枚の単位畑のみの検出である。

①3-17号畑

位置　調査区北東隅。4号溝・4号ヤックラの北側、3-18号畑の北西側。
遺存状況　北西側が攪乱を被っているが、検出部分は良好。復旧溝が4条（2間間隔）検出されている。
規模　最大長5.9m、最大幅14.0m、検出面積60.3㎡を測る。畝幅0.57m。
畝サク方向　N－72°－E
畝サク断面形状　関氏の2類。サブトレ（第70図hh'）で確認したが、As-A降下前に1番ザクと2番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。
泥流によるキズ痕　明確なものは認められなかった。
作物遺存体・株痕　作物遺存体は若干認められる程度で、株痕は1.5m×1.5mの範囲で検出作業を実施した（第73図）。株痕は疎らな検出で、間隔は小振りなものが10㎝程度、まとまり毎には25～40㎝であった。
平坦面　攪乱により消失か。

②3-18号畑

位置　調査区北東隅。4号溝・4号ヤックラの北東側、3-17号畑の南東側。
遺存状況　良好。
規模　最大長4.9m、最大幅11.7m、検出面積30.5㎡を測る。畝幅0.48m。
畝サク方向　N－72°－E
畝サク断面形状　関氏の3類。サブトレで確認していないので不明である。
泥流によるキズ痕　明確なものは認められなかった。
作物遺存体・株痕　若干認められる程度で、株痕の検出は今回実施しなかった。
平坦面　1箇所。3-18号平坦面（第72図）。

①3-18号平坦面

位置　3-18号畑の上端付近中央。
遺存状況　復旧溝5に切られ、調査区外に延びており全体の約2分の1の検出で、遺存状態は良好である。
形状　平面形は円形を呈すると考えられる。
規模　現状で0.8㎡、復元1.5㎡を測る。
周溝　なし。
比高　山側は畝より低く、川側は調査区外のため不明である。

（2）ヤックラ・溝状遺構

本調査区ではヤックラ４基、溝状遺構４条が検出された。２号・３号ヤックラは部分検出のため、ヤックラとなるかは不明なところが多いが、１号・４号ヤックラはいずれも側溝を有し、１号ヤックラの側溝が１・２号溝、４号ヤックラの側溝が３・４号溝である。したがってここではヤックラと溝状遺構を一緒に報告する。

１号ヤックラ（第 65・67・74 図／ＰＬ 47）
位置　調査区南東隅。3-8 号畑の北側、3-10 号畑の西側。
検出状況　3-8 号畑の精査中に検出された。畑中の礫が集積されたもので、側溝（１号・２号溝）を付帯している。泥流はここまで到達したものと考えられ、天端１・２（第 67 図）が確認されている。
規模　検出長約 10.0 m、最大幅約 17.0 m、畑面との比高差は 1.7 mを測る。
遺物出土状況　なし。

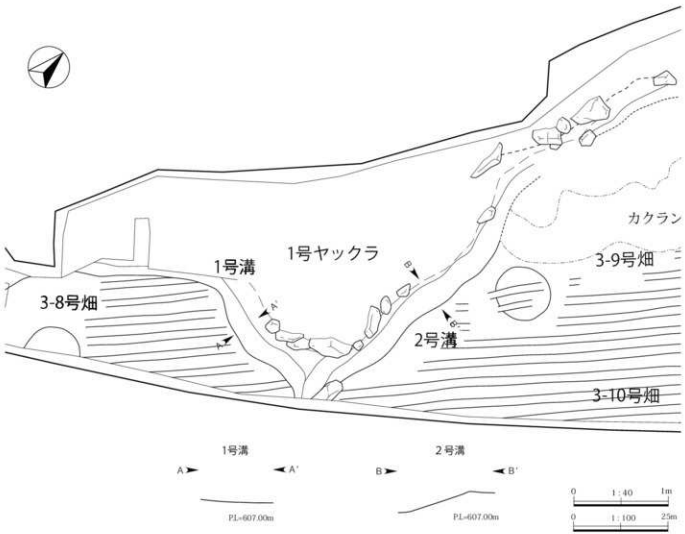
２号ヤックラ（第 65・67 図／ＰＬ 50）
位置　調査区中央北西壁沿い。3-11 号畑の北西側、１号ヤックラの北東側。
検出状況　3-11 号畑の精査中にその境界で検出した。１号ヤックラに続き、地形の変換点付近で比較的大きな礫が集積されている。側溝の付帯は見られなかったが泥流の天端３（第 67 図）が確認されている。
規模　検出長 4.0 m、最大幅 14.5 m、畑面との比高差は 0.5 mを測る。
遺物出土状況　なし。

３号ヤックラ（第 68 図／ＰＬ 53）
位置　調査区中央南東壁沿い。3-14 号畑上、3-14 号平坦面の東側。
検出状況　3-14 号畑の精査中に検出した。大振りな礫の集積の一部が検出され、調査時は撹乱としていた。本体は調査区外に延びており、ヤックラになる可能性があるとして報告しておきたい。
規模　検出長 1.5 m、最大幅 3.0 m、畑面との比高差はmを測る。
遺物出土状況　なし。

４号ヤックラ（第 65・68・75 図／ＰＬ 56・57）
位置　調査区北東側。3-15・3-16 号畑の北東側、3-17・3-18 号畑の南西側。
検出状況　3-15・3-16 号畑と 3-17・3-18 号畑の精査中にその間で検出された。当初は縦走する沢の一部と考えたが、１号ヤックラと同様に側溝（３号・４号溝）を付帯しており、ヤックラと判断した。
規模　検出長 16.5 m、最大幅 7.0 m、畑面との比高差は最大 0.4 mを測る。
遺物出土状況　なし。

１号溝（第 65・67・74 図／ＰＬ 47）
位置　１号ヤックラの南東側。3-8 号畑の北東側。
検出状況　１号ヤックラと 3-8 号畑の精査中にその境界で検出した。3-8 号畑・3-9 号畑境で２号溝と合流する。泥流に埋没して検出されたが、泥流を除去すると底面には全体的に As-A 軽石で覆われている状況であった。
走行方向　Ｎ－94°－Ｅ
規模　検出長 4.0 m、最大幅 1.0 m、畑面からの深さは最深 0.24 mを測る。
遺物出土状況　なし。

２号溝（第 65・67・74 図／ＰＬ 47）
位置　１号ヤックラの南東側。3-9 号畑の北西側。
検出状況　１号ヤックラと 3-9 号畑の精査中にその境界で検出した。3-8 号畑・3-9 号畑境で１号溝と合流する。泥流に埋没して検出されたが、泥流を除去すると底面には全体的に As-A 軽石で覆われている状況であった。
走行方向　Ｎ－178°－Ｗ



第 74 図　1 号ヤックラ・1 号・2 号溝実測図（1/100・1/40）

規模　検出長 12.5 m、最大幅 0.9 m、畑面からの深さは最深 0.28 mを測る。
遺物出土状況　なし。

3 号溝（第 65・68・75 図／ＰＬ 57）
位置　4 号ヤックラの南西側。3-15・3-16 号畑の北東側。
検出状況　4 号ヤックラと 3-15・3-16 号畑の精査中にその境界で検出した。泥流に埋没して検出されたが、泥流を除去すると底面には全体的に As-A 軽石で覆われている状況であった。4 号溝とともに 4 号ヤックラの側溝であり、ヤックラの形状に沿って蛇行している。
走行方向　Ｎ－ 115 ～ 163°－Ｅ
規模　検出長 11.8 m、最大幅 1.2 m、畑面からの深さは最深 0.24 mを測る。
遺物出土状況　なし。

4 号溝（第 65・68・75 図／ＰＬ 57）
位置　4 号ヤックラの北東側。3-17・3-18 号畑の南西側。
検出状況　4 ヤックラと 3-17・3-18 号畑の精査中にその境界で検出した。3 号復旧溝と重複し、これに切られている。泥流に埋没して検出されたが、泥流を除去すると底面には全体的に As-A 軽石で覆われている状況であった。3 号溝とともに 4 号ヤックラの側溝である。
走行方向　Ｎ－ 142 ～ 170°－Ｅ
規模　検出長 5.0 m、最大幅 1.0 m、畑面からの深さは最深 0.15 mを測る。
遺物出土状況　なし。

第 75 図　4 号ヤックラ・3 号・4 号溝・1 ～ 6 号復旧溝実測図（1/100・1/40）

（3）復旧溝

本調査区では復旧溝6条が検出された。これらは位置・走行方向で2つに大別できる。1つは1・2号復旧溝で、3-15・3-16号畑上に位置し、走行方向はN－52～54°－Wにまとまる。1号と2号は約3.6 m（2間）の間隔で検出されている。検出長の違いはそれぞれの掘削深と関係し、3-15・3-16号畑は泥流到達以降の洪水等の攪乱を被っていると考えられ隣接する畑面より低くなっている。もう一つは、3～6号復旧溝で、3-17・3-18号畑上に位置し、走行方向はN－65～69°－Wにまとまり、これらも1・2号と同様に約3.6 m（2間）間隔で検出されている。復旧溝は泥流到達後に畑土を採取して、泥流あるいは礫を埋め戻した痕跡と理解されている。通常は畑面で検出されるため、浅く感じるかもしれないが、3号復旧溝の土層断面（第75図）で分かるように泥流上面から畑土を目指して掘り込まれ、畑土を20cm程採取したあとに、礫、泥流の順で埋め戻されている。泥流自体が砂質なことから埋め戻された泥流と堆積泥流の区別は困難である。

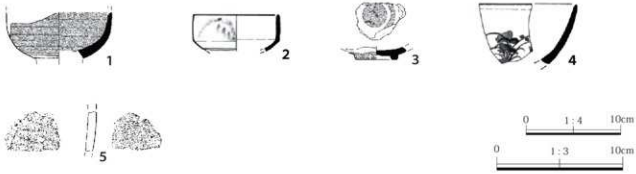
1号復旧溝（第75図／PL 55）
位置　3-15・3-16号畑上。旧平坦面4の西側、2号復旧溝の南西側。
検出状況　畑面の精査中に畝サク方向にほぼ直交するかたちで検出された。検出時は埋土が泥流であり、キズ痕と考えられた。
走行方向　N－54°－W
規模　検出長1.6 m、最大幅0.5 m、畑面からの深さは最深0.10 mを測る。
遺物出土状況　なし。

2号復旧溝（第75図／PL 55）
位置　3-15・3-16号畑上。4号ヤックラ・3号溝の南西側、1号復旧溝の北東側。
検出状況　畑面の精査中に畝サク方向にほぼ直交するかたちで検出された。検出時は埋土が泥流であり、キズ痕と考えられた。
走行方向　N－52°－W
規模　検出長4.3 m、最大幅0.5 m、畑面からの深さは最深0.22 mを測る。
遺物出土状況　なし。

3号復旧溝（第75図／PL 56・57）
位置　3-17・3-18号畑上。4号ヤックラ・4号溝の北東側、2号復旧溝の南西側。
検出状況　畑面の精査中に畝サク方向に直交するかたちで検出された。4号溝と重複し、これを切っている。3～6号復旧溝は約3.6 m（2間）間隔で並んで検出されている。堆積土層も泥流の最上位から掘り込まれており、礫、泥流の順に埋め戻されている。
走行方向　N－68°－W
規模　最大長9.8 m、最大幅0.8 m、掘り込み面からの深さは最深0.6 mを測る。
遺物出土状況　なし。

4号復旧溝（第75図／PL 56～58）
位置　3-17・3-18号畑上。3号復旧溝の北東側、5号復旧溝の南西側。
検出状況　畑面の精査中に畝サク方向に直交するかたちで検出された。3～6号復旧溝は約3.6 m（2間）間隔で並んで検出されている。
走行方向　N－68°－W
規模　検出長7.8 m、最大幅0.7 m、畑面からの深さは最深0.38 mを測る。
遺物出土状況　なし。

5号復旧溝（第75図／PL 56～58）
位置　3-17・3-18号畑上。4号復旧溝の北東側、6号復旧溝の南西側。
検出状況　畑面の精査中に畝サク方向に直交するかたちで検出された。3～6号復旧溝は約3.6 m（2間）間隔で並んで検



第 76 図　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ出土遺物実測図（1/4・1/3）

第 16 表　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ出土遺物観察表

挿図No.	図版No.	器　種	法量（器高／口径／底径）(cm)	特徴（形態・手法等）	焼　成	胎土・材質等	色調（外面／内面）	備　考
27・1	58	陶磁器・碗	(4.8) ／— ／ 4.0	瀬戸・美濃陶器。内外面ともに灰釉。	良好	—	オリーブ灰	体部～高台部 20％残存。　旧平坦面 2
27・2	58	陶磁器・碗	(3.8) ／— ／—	瀬戸・美濃系陶器。腰折碗。	良好	—	灰白	口縁部～体部 25％残存。　北側調査区
27・3	58	陶磁器・皿	(1.3) ／— ／ 4.0	肥前陶器。内野山諸窯。見込み部蛇の目釉剥ぎ。	良好	—	灰黄	体部～高台部 50％残存。　3-12 号畑
27・4	58	陶磁器・碗	(4.7) ／— ／—	肥前染付。外面は草花文。	—	—	明緑灰	破片資料（口縁部～体部）　北側調査区
27・5	58	在地土器・鍋	(3.1) ／— ／—	内耳鍋。内外面とも横位ナデ調整後に縦位ミガキ。	良好	角閃石	にぶい黄褐	破片資料（体部）　3-14 号畑サブトレ

第 17 表　嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ畑跡・平坦面一覧

＊尺換算は曲尺：1 尺＝10/33 m を用いた。面積は 1 歩＝6 尺平方で算出。

畑名	単位畑名	単位畑 面積 (㎡)	単位畑 反・畝・歩	単位畑 斜度 (°)	単位畑 畝幅 (m)	単位畑 相当尺寸 (尺)	畑面積 畑面積 (㎡)	畑面積 反・畝・歩	畑断面	平坦面 平坦面	平坦面 面積 (㎡)	平坦面 形状	平坦面 溝	平坦面 窪み	平坦面 形状	平坦面 比高
3 E	3-8	(19.0)	・ ・ 6	11	0.52	1.7	113.5	・1・4	2 類	3-8	<1.7> (0.8)	円	×	／	—	(±)
	3-9	(27.0)	・ ・ 8	18	0.50	1.7			2 類	3-9	—	—	—	—	—	—
	3-10	(67.5)	・ ・20	11	0.51	1.7			2 類	3-10	2.0	円	×	／	—	±
										旧平坦面 1	1.6	円	○	凹	溝	↓
										旧平坦面 2	1.4	円	×	／	—	±
3 F	3-11	(109.4)	・1・ 3	18	0.44	1.5	156.8	・1・17	2 類	3-11	<1.5> (0.7)	円	○	／	—	↓
	3-12	(47.4)	・ ・14	7	0.44	1.5			2 類	3-12	<2.8> (2.4)	円	×	／	—	↓
										旧平坦面 3	1.5	円	×	凹	溝	±
3 G	3-13	(57.2)	・ ・17	12	0.51	1.7	114.4	・1・ 5	2 類	3-13	—	—	—	—	—	—
	3-14	(79.9)	・ ・24	12	0.55	1.8			2 類	3-14	2.7	円	○	／	—	↓
	3-15	(76.7)	・ ・23	12	0.44	1.5			4 類	3-15	—	—	—	—	—	—
										旧平坦面 4	1.3	円	×	／	—	↓
	3-16	(27.8)	・ ・ 8	7	0.50	1.7			—	3-16	1.4	円	×	／	—	±
3 H	3-17	(60.3)	・ ・18	14	0.57	1.9	90.8	・ ・27	2 類	3-17	—	—	—	—	—	—
	3-18	(30.5)	・ ・ 9	8	0.48	1.6			3 類	3-18	<1.5> (0.8)	円	×	／	—	↓

出されている。

走行方向　N－69°－W

規模　検出長 5.8 m、最大幅 0.7 m、畑面からの深さは最深 0.47 m を測る。

遺物出土状況　なし。

6 号復旧溝（第 75 図／PL 56 ～ 58）

位置　3-17 号畑上、5 号復旧溝の北東側。

検出状況　畑面の精査中に畝サク方向に直交するかたちで検出された。3 ～ 6 号復旧溝は約 3.6 m（2 間）間隔で並んで検出されている。

走行方向　N－65°－W
規模　検出長3.0 m、最大幅0.7 m、畑面からの深さは最深0.30 mを測る。
遺物出土状況　なし。

第４編

自然科学分析

第１章　東貝瀬Ⅲ遺跡出土遺物の自然科学分析

第１節　東貝瀬Ⅲ遺跡の花粉分析

森　将志（パレオ・ラボ）

１．はじめに

群馬県長野原町に所在する東貝瀬Ⅲ遺跡では、天明３年（1783）の浅間山の噴火に伴う泥流に埋没した畑跡が検出されている。この畑跡から花粉分析用の試料が採取された。以下では、試料について行った花粉分析の結果を示し、考察を行った。なお、同一試料を用いて炭化種実同定や植物珪酸体分析なども行われている（各分析の項参照）。

２．試料と方法

調査区北側の畑跡では、作物遺体の株痕が残る箇所があり、この箇所において２ｍ×２ｍの範囲で土壌試料が採取された。また、調査区北側の急斜面地では泥流の下に砂の堆積が目立ち、逆級化現象が生じていると考えられている。分析試料は畑跡の畝に堆積した泥流部分（第 34 図 No.5）から採取した。試料の土相は、灰黄褐色（10YR5/2）砂礫混じりシルトである。この試料について、次の手順で花粉分析を実施した。

試料（湿重量約 3g）を遠沈管にとり、10％水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46％フッ化水素酸溶液を加え１時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１の割合の混酸を加え 20 分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは全面を検鏡し、その間に現れる花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉化石を選んで単体標本（PLC.1247 ～ 1252）を作製し、写真を図版に載せた。

３．結　果

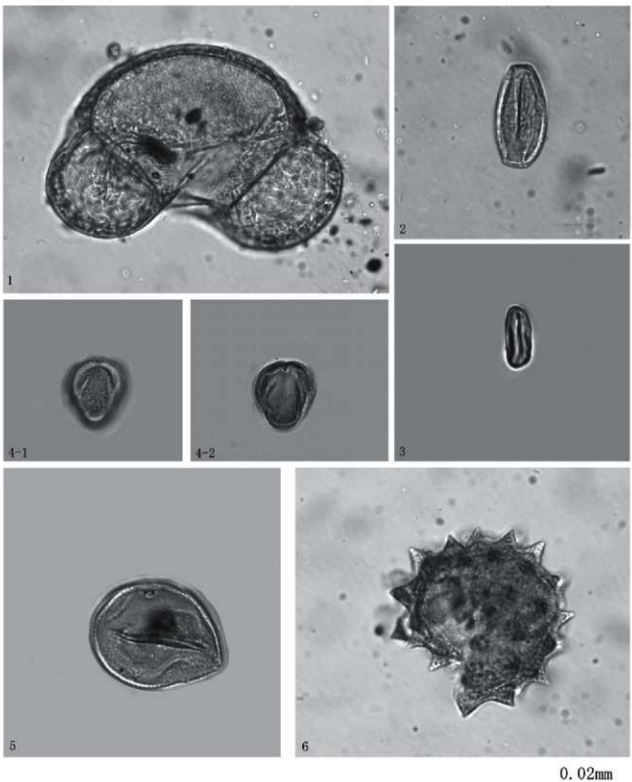
検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉 10、草本花粉３、形態分類のシダ植物胞子１の総計 14 である。これらの花粉・胞子の一覧表を第 18 表に示した。なお、今回の分析試料には十分な量の花粉化石が含まれていなかったため、分布図は示していない。花粉化石の含有量が少ないなかで、コナラ属コナラ亜属の８個が最も多い産出である。

第 18 表　産出花粉胞子一覧

学名	和名	
樹木		
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	3
Carpinus － *Ostrya*	クマシデ属－アサダ属	1
Betula	カバノキ属	1
Alnus	ハンノキ属	2
Fagus	ブナ属	1
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	8
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	1
Castanea	クリ属	5
Ulmus － *Zelkova*	ニレ属－ケヤキ属	1
Aesculus	トチノキ属	1
草本		
Gramineae	イネ科	2
Artemisia	ヨモギ属	4
Liguliflorae	タンポポ亜科	4
シダ植物		
Monolete type spore	単条溝胞子	1
Arboreal pollen	樹木花粉	24
Nonarboreal pollen	草本花粉	10
Spores	シダ植物胞子	1
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	35

４．考　察

今回の分析試料には花粉化石がほとんど含まれていなかった。一般的に花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境に堆積すると紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され消失してしまう。そのため、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境や保存環境では花粉化石が残りにくい。分析試料は畑跡から採取されており、畑の掘り起こし等で堆積物が酸化的環境に晒されていたため、花粉の保存状態が悪いと思われる。今回は花粉の保存状態が悪い上に、作物の候補となる分類群の産出も見られなかったため、花粉分析結果から畑作物について言及するのは難しい。ちなみに、産出が少ないながらも比較的多く産出しているのは、マツ属複維管束亜属とコナラ属コナラ亜属、クリ属である。これらは陽樹を含む分類群であり、二次林の構成種としても知られため、遺跡周辺にはニヨウマツ類やコナラ、クリなどからなる二次林が広がっていた可能性がある。



1. マツ属複維管束亜属（PLC. 1247）
2. コナラ属コナラ亜属（PLC. 1248）
3. クリ属（PLC. 1249）
4. ヨモギ属（PLC. 1250）
5. イネ科（PLC. 1251）
6. キク亜科（PLC. 1252）

第 77 図　東貝瀬Ⅲ遺跡から産出した花粉化石

第２節　東貝瀬Ⅲ遺跡出土作物遺体の素材同定および植物珪酸体分析

米田恭子・黒沼保子（パレオ・ラボ）

１．はじめに

東貝瀬Ⅲ遺跡の畑跡から出土した作物遺体について、解剖学的検討による素材同定および素材の母植物を検討する目的で植物珪酸体分析を行った。以下に、分析結果と考察を記す。なお、同一試料を用いて大型植物遺体分析も行われている（大型植物遺体分析の項参照）。

２．試料と方法

試料は、調査区北側で検出された天明泥流下畑跡の 2m × 2m の範囲で 5 ヵ所取り上げられた土壌（採取位置第 34 図 No.1 ～ No.5）である。

［素材同定］

No.1 ～ No.5 の中から任意に採取した試料について、実体顕微鏡を用いて観察を行った。

［植物珪酸体分析］

植物遺体が良好に観察された No.2（分析 No.1）と No.4（分析 No.2）から任意に採取した。

試料を実体顕微鏡で観察したところ、植物遺体そのものは残存せず、単子葉植物の葉身に見られる平行脈が圧痕として土壌に残されたものであった。

分析 No.1 は残存長 16.3㎝、残存幅 0.9㎝で 0.2 ～ 0.3㎝幅の平行脈が 5 条観察された。分析 No.2 は残存長 23.0㎝、残存幅 2.5㎝で 0.2 ～ 0.3㎝幅の平行脈が 9 条観察された。

植物圧痕を含めた土壌部分を採取し、下記の手順に従って植物珪酸体の抽出を試みた。

試料約 1g（秤量）をトールビーカーにとり、これに 30％の過酸化水素水を約 20 ～ 30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーを用いて試料を分散させ、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを各 2 枚作製し、全面を精査して同定および計数を行った。

３．結　果

［素材同定］

観察の結果、植物遺体は残存していなかった。

［植物珪酸体分析］

観察された植物珪酸体を第 20 表に示した。

第 19 表　東貝瀬Ⅲ遺跡畑跡出土作物遺体の植物珪酸体

分析 No.	試料名	調査区	遺構	採取位置 No.	残存長（cm）	残存幅（cm）	平行脈数（条）	平行脈幅（cm）	機動細胞珪酸体		
									イネ	ササ属	キビ族
1	作物遺体	北側	畑跡	2	16.3	0.9	5	0.2~0.3			1
2				4	23.0	2.5	9	0.2~0.3	1	1	2

［分析 No.1（採取位置 No.2）］

キビ族の機動細胞珪酸体が 1 個検出された。

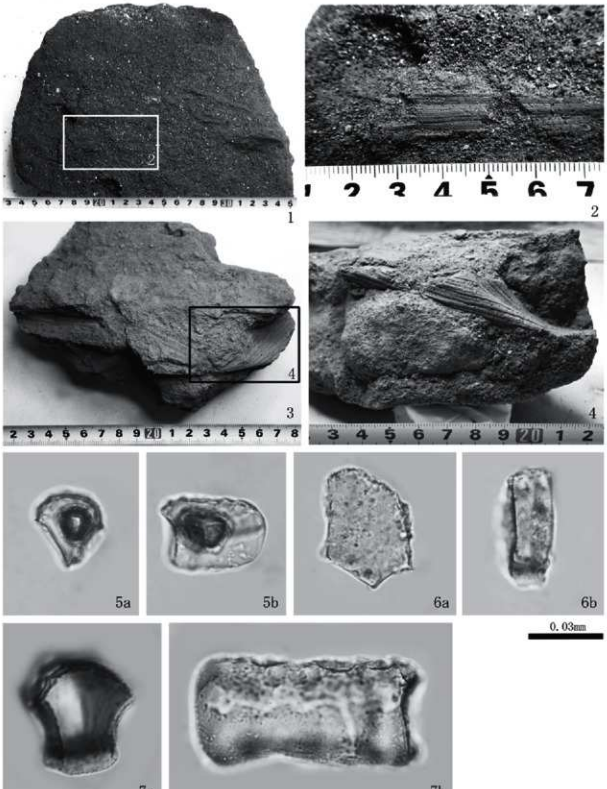
［分析 No.2（採取位置 No.4）］

キビ族の機動細胞珪酸体が 2 個と、イネとササ属の機動細胞珪酸体が各 1 個観察された。

４．考　察

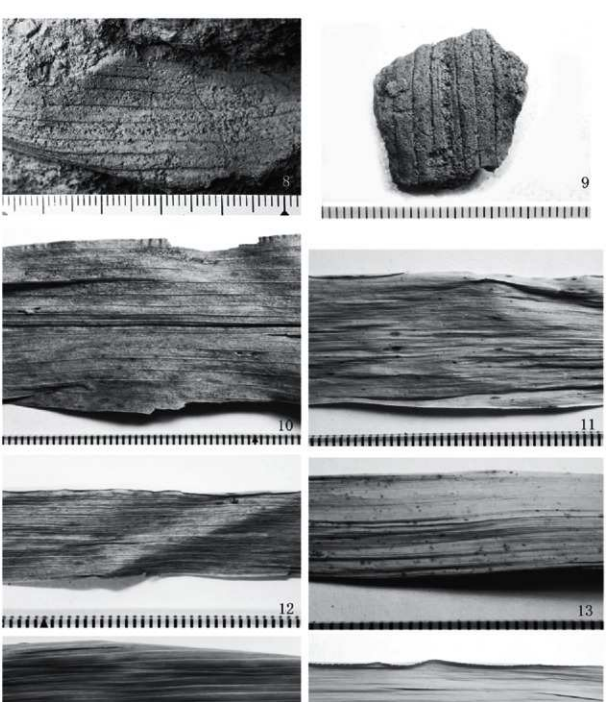
作物遺体を実体顕微鏡で観察したところ、植物遺体そのものは残存せず、単子葉植物の葉身に見られる平行脈が圧痕として土壌に残されていた。植物組織の観察が不可能であったため、解剖学的検討では作物遺体の同定はできなかった。

一方、東貝瀬Ⅲ遺跡の畑跡から検出された単子葉植物の圧痕を含む土壌について、植物珪酸体分析を行った結果から、キビ族とイネ、ササ属の機動細胞珪酸体がわずかに検出された。発掘現場で取り上げられた試料に植物遺体そのものは残存し



1．作物遺体（分析No. 1）、2．作物遺体拡大（分析No. 1）3・4．作物遺体（分析No. 2）、5．イネ機動細胞珪酸体（分析No. 2）、6．ササ属機動細胞珪酸体（分析No. 2）、7．キビ族機動細胞珪酸体（分析No. 2）
a：断面、b：側面

第 78 図　東貝瀬Ⅲ遺跡出土作物遺体の植物珪酸体



8・9. 作物遺体拡大（分析No.2）、10. 現生ウルチキビ葉身（2011.10.9山梨県北都留郡小菅村）、11. 現生モチアワ葉身（2011.10.9山梨県北都留郡小菅村）、12. 現生コムギ葉身（2011.6.15東京都東村山市）、13. 現生イネ葉身（2011.10.9群馬県高崎市）、14. 現生ネマガリタケ葉身（2013.11.17福島県三島市）、15. 現生ヨシ葉身（2011.5.19埼玉県比企郡西吉見町）

第79図　東貝瀬Ⅲ遺跡出土作物遺体と現生イネ科植物の葉身

ていなかったため、今回の分析で得られた植物珪酸体が作物遺体の母植物に由来するかは不明である。また、今回の植物珪酸体分析で得られたキビ族の機動細胞珪酸体の形態からは、アワやキビなどの栽培種か、エノコログサやスズメノヒエ、イヌビエなどの雑草類に由来するかの同定は困難である。

キビ族とイネについては、畑で栽培された作物の候補となりえる。ササ属型のササ類（スズタケ、ミヤコザサなど）については、周辺の森林の下草的存在として生育していたと推察される。

発掘現場で取り上げられた試料に植物遺体の圧痕のみが残され、植物珪酸体もほとんど残っていなかった要因としては、泥流により畑で栽培された植物が熱を受けた可能性が考えられる。

次に、圧痕として残った単子葉植物の形態を現生のイネ科植物の葉身と比較し、今回の試料の母植物について考えてみたい。

今回分析した試料は、残存幅が最大 2.5㎝、0.2 ～ 0.3㎝幅で 9 条の平行脈が観察された。葉の中心にみられる主脈は明瞭にみられない特徴があった。

一方、観察した現生のイネ科植物の葉身の特徴は以下のとおりであった。現生のウルチキビの葉身は幅 2.8㎝で、幅 0.18㎝の平行脈が 16 条ある。主脈は平行脈よりやや明瞭である。現生のモチアワの葉身は幅 1.9㎝で、幅 0.15㎝の平行脈が 12 条観察された。主脈は不明瞭である。現生のコムギの葉身は幅 1.0㎝で、幅 0.1㎝の平行脈が 10 条である。主脈は不明瞭である。現生のイネの葉身は幅 1.1㎝ で、幅 0.15㎝の平行脈が 8 条観察された。主脈は不明瞭である。現生のネマガリタケの葉身は幅 5.5㎝で、幅 0.20㎝の平行脈が 23 条観察された。主脈は明瞭である。現生のヨシの葉身は幅 2.3㎝で、幅 0.12㎝の平行脈が 18 条ある。主脈は不明瞭で平行脈も浅い。

比較した 6 種類の現生のイネ科植物の中では、ウルチキビとモチアワが今回の試料の特徴に類似しているように思われた。作物遺体の圧痕を含む土壌からは、キビ族が最も多く得られた植物珪酸体であり、形態の特徴と合わせて、畑で栽培されていた可能性のある作物の有力な候補と思われる。

引用文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）一数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法一．考古学と自然科学，9，15-29.

第 3 節　東貝瀬Ⅲ遺跡の畑跡から出土した炭化種実

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

1．はじめに

東貝瀬Ⅲ遺跡では、天明 3（1783）年の浅間山の噴火に伴う泥流により埋没した畑跡 1 段（面）が検出されている。畑は畝サクの遺存状態が良好で、作物遺体の痕跡が残存しており、耕作土中にも種実が残存している可能性が想定された。ここでは、耕作土に含まれる種実を同定し、栽培された植物あるいは周辺の植生について検討する。なお、同試料を用いて花粉分析や植物珪酸体分析も行われている（各分析の項参照）。

2．試料と方法

試料は、畑跡から任意採取した土壌 5 試料と、水洗済み試料 10 試料である。調査区北側の 2m × 2m の範囲で、作物遺体と土壌がサンプリングされた。2m × 2m の範囲内では、畝サクが 5 条検出されたため、任意に No.1 から No.5 の番号が付されている。試料の採取位置は第 34 図を参照されたい。

水洗済みの試料は、長野原町教育委員会により砂と泥流が分けられ、それぞれ 1.0mm 目の篩を用いて水洗された。土壌試料 5 試料は、すべて泥流であり、各試料から 1000cc を計量後、最小 0.5mm の篩を用いて水洗し、種実の抽出・同定・計数を実体顕微鏡下で行った。試料は、長野原町教育委員会で保管されている。

3．結　果

同定した結果、木本植物では針葉樹のマツ属複維管束亜属炭化葉の 1 分類群と広葉樹のオニグルミ炭化核の 1 分類群、草本植物ではオオムギ炭化種子とコムギ炭化種子の 2 分類群の、計 4 分類群が得られた（第 20・21 表）。これ以外に、識別点を欠く一群を同定不能炭化種実とした。植物遺体以外には炭化した虫えいと子嚢菌が得られた。また、未炭化のアカザ

属種子とタケニグサ属種子、エノキグサ属種子、タンポポ属果実が得られたが、花粉分析の結果から、今回の畑跡は耕作当時の未炭化の種実が残りにくい環境と推定されるため、未炭化種実の時期については注意が必要である。

以下、得られた炭化種実について採取位置別に記載する（同定不能炭化種実と虫えい、子嚢菌は除く）。

No.1：同定可能な種実は得られなかった。

No.2：オニグルミ破片とオオムギ破片が各1点得られた。

No.3：同定可能な種実は得られなかった。

No.4：マツ属複維管束亜属破片が6点と、オオムギが2点、コムギが1点得られた。

No.5：マツ属複維管束亜属破片が2点と、オオムギとコムギが各1点得られた。

第20表　東貝瀬Ⅲ遺跡から出土した炭化種実（土壌試料：括弧内は破片数）

	採取位置	1	2	3	4	5
分類群	水洗量(cc)			1000		
マツ属複維管束亜属	炭化葉				(6)	(2)
オニグルミ	炭化核		(1)			
オオムギ	炭化種子		(1)		1	1
コムギ	炭化種子				1	1
同定不能	炭化種実		(1)		(4)	(1)
虫えい	炭化				1	
子嚢菌	炭化子嚢	1	1 (1)			
タケニグサ属	種子		2		1	(2)

第21表　東貝瀬Ⅲ遺跡から出土した炭化種実（水洗済み試料：括弧内は破片数）

	採取位置	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
分類群	層位			泥炭					砂		
オオムギ	炭化種子				1						
アカザ属	種子			(1)							
エノキグサ属	種子									1	
タンポポ属	果実			1				1			

次に、炭化種実の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

（1）マツ属複維管束亜属　Pinus subgen. Diploxylon　炭化葉　マツ科

短い破片であり、基部と頂部は遺存していなかった。背面観・腹面観は狭長方形で、側面観は線状の狭長方形、断面は半円形になる。背面と腹面の表面には縦方向に並んだ8～10本の気孔条がある。横断面で中央付近に維管束が2つ並び、マツ属複維管束亜属と同定できる。マツ属複維管束亜属にはアカマツとクロマツが含まれる。残存長3.0mm、幅0.7mm。

（2）オニグルミ　Juglans mandshurica Maxim. var. sieboldiana (Maxim.) Makino　炭化核　クルミ科

破片であるが、完形ならば側面観は広卵形。木質で、壁は厚くて硬く、ときどき空隙がある。本来は縫合線があるが、残存していない。表面には浅い溝と凹凸が不規則に入る。断面は角が尖る。残存長4.1mm、残存幅2.2mm。

（3）オオムギ　Hordeum vulgare L.　炭化種子　イネ科

残存状態が悪いが、上面観・側面観は長楕円形、腹面中央部には上下に走る1本の溝がある。背面の下端中央部には三角形の胚がある。側面観はやや下端側が厚くなり、上下端にむかって狭くなる。断面は円形となる。長さ4.7mm、幅2.9mm、厚さ2.0mm。

（4）コムギ（パンコムギ）　Triticum aestivum L.　炭化種子　イネ科

残存状態が悪いが、上面観・側面観は共に楕円形。腹面中央部には、上下に走る1本の溝がある。背面の下端中央部には、扁形の胚がある。オオムギに比べて長さが短く、幅に対して厚みがあるため、全体的に丸っこい。断面形状は腹面側が窪み、背面側が円形となる（Jacomet, 2006）。またコムギの場合、側面観で最も背の高い部分（幅の広い部分）が基部付近に来る。コムギ属にはパンコムギやマカロニコムギなど複数種あるが、一般的にコムギと呼称しているのはパンコムギである。ここでは一般的な呼称で記載した。長さ4.0mm、幅3.1mm、厚さ2.4mm。

（5）虫えい　Gall

上面観は円形、側面観は扁平で、中央がゆるやかに凹む。幅2.6mm、厚さ3.0mm。

（6）子嚢菌　Ascomycota　炭化子嚢

球形で、表面は平滑。径0.7mm。

4．考　察

畑の畝のNo.2、4、5から炭化種実がわずかに得られた。すべて泥流部分からの産出である。このうち、明らかな栽培植物はオオムギとコムギである。いずれも炭化していたため、畑に生育していた種子が熱を受けたか、近くで保管されていた種子が何らかの要因により炭化して畑内に堆積したと推定される。オニグルミの破片も炭化して産出しており、食用となる子葉を取り出した後、不要になった核が燃やされた可能性がある。同様にマツ属複維管束亜属の葉も炭化しており、偶発的に燃えたか、肥料として耕作土に入れられた可能性がある。

周辺環境の林縁要素としては、アカマツと考えられるマツ属複維管束亜属やオニグルミなどの高木が生育していたと思わ

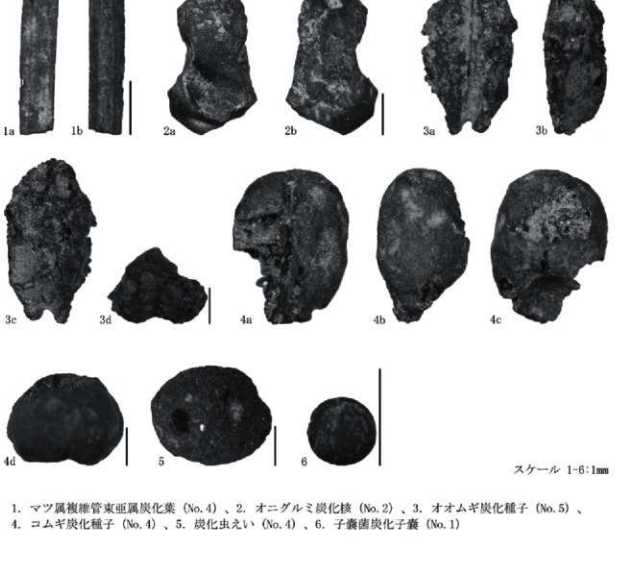
れる。

通常、台地上の遺跡では酸性土壌のため畑内の生の種実は分解されて残らない。長野原町東宮遺跡の 24 畑では、泥流により埋没した特殊な環境下でかつ地下水位が高い場所であったため、通常なら残らない未炭化種実が遺存しており、栽培植物や周辺植生についての検討が可能であった。24 畑で出土した種実のうち、明らかな栽培植物はアサとソバ、イネ、オオムギであった。複数の栽培植物がみられたため、一種類の作物が栽培されていたのではなく、複数の作物が輪作されていた可能性が指摘されている（佐々木・バンダリ，2012）。今回の東貝瀬Ⅲ遺跡でも未炭化の種実がわずかに産出しているが、乾燥した環境下では分解されて残らない花粉化石が、ほとんど残存していない点を考慮すると、当時の未炭化種実は残りにくい環境であったと推察される。このため、アカザ属やエノキグサ属、タンポポ属の未炭化種実の時期については注意が必要である。炭化種実もほとんど産出しておらず、かつ状態が悪いため、今回の畑跡には当時の栽培植物の種実はほとんど残存していないと考えられる。このため、少なくとも畑でオオムギとコムギが栽培されていた可能性があるとはいえるが、今回の検討ではそれ以外の栽培植物は検出できなかった。

引用文献

Jacomet, S. and collaborators Archaeobotany Lab.（2006）Identification of cereal remains from archaeological sites. 2nd edition, IPAS, Basel Univ.

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（2012）東宮遺跡から出土した大型植物遺体．群馬県埋蔵文化財調査事業団編「東宮遺跡（2）－遺物編－」：437-461，群馬県埋蔵文化財調査事業団．



1．マツ属複維管束亜属炭化葉（No. 4）、2．オニグルミ炭化核（No. 2）、3．オオムギ炭化種子（No. 5）、
4．コムギ炭化種子（No. 4）、5．炭化虫えい（No. 4）、6．子嚢菌炭化子嚢（No. 1）

第 80 図　東貝瀬Ⅲ遺跡から出土した炭化種実

第２章　嶋木Ⅰ遺跡出土遺物の自然科学分析

第１節　嶋木Ⅰ遺跡の花粉分析

森　将志（パレオ・ラボ）

１．はじめに

群馬県長野原町に所在する嶋木Ⅰ遺跡では、天明３年（1783）の浅間火山の大爆発に伴い発生した泥流により埋没した畑跡が検出され、畑跡から花粉分析用の試料が採取された。以下では、採取された試料の花粉分析結果を示し、古植生について検討を行った。なお、同試料を用いて植物珪酸体分析と大型植物遺体分析も行われている（各分析の項参照）。

２．試料と方法

分析試料は、作物遺存体と共に採取された耕作土の３点（分析 No.1,2,3）である（第 23 表）。分析 No.1 は礫まじり黄褐色（2.5Y5/3）細粒砂、分析 No.2 と No.3 は礫混じり黒褐色（2.5Y3/2）細粒砂である。これらの試料について、次の手順で花粉分析を実施した。

第 22 表　分析試料一覧

分析 No.	遺跡名	試料名	遺構名	位置	土　相
1	嶋木Ⅰ遺跡４次調査	－	3-5号畑	中央	礫混じり黄褐色（2.5Y5/3）細粒砂
2		作物遺存体		南	
3	嶋木Ⅰ遺跡５次調査	－	3-14号畑	－	礫混じり黒褐色（2.5Y3/2）細粒砂

試料（湿重量約７～８g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え１時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１の割合の混酸を加え 20 分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。この残渣よりプレパラートを作製し、プレパラートは、樹木花粉が 200 を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉を選んで単体標本（PLC.1492 ～ 1498）を作製し、写真を第 82 図に載せた。

３．結　果

３試料を検鏡した結果、検出できた分類群は、樹木花粉 23、草本花粉 16、形態分類のシダ植物胞子２の計 41 である。これらの花粉・胞子の一覧表を第 23 表に、分布図を第 81 図に示した。分布図の樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉胞子総数を基数とした百分率で示した。図表においてハイフン（－）で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。

各試料ともに、樹木花粉の産出割合が高かった。なかでもクリ属の産出が目立ち、31 ～ 47%の産出率を示す。次いでコナラ属コナラ亜属の産出率が高く、20 ～ 30%である。その他ではクマシデ属－アサダ属やカバノキ属、ハンノキ属、ニレ属－ケヤキ属などの落葉広葉樹が数%～十数%の産出率である。草本花粉ではイネ科やカラマツソウ属、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科などが数%の産出率を示している。

４．考　察

各試料ともにコナラ属コナラ亜属とクリ属の産出が目立つ。特にクリ属花粉の産出率が高く、31 ～ 47%の産出率は産出花粉の中で最も高い値である。クリについては花粉の散布能力が詳しく調べられており、クリ林内の表層試料では高率に産出するが、林外になると極端に産出率が減少する例が知られている（吉川, 2011）。このように、クリ花粉は虫媒で広範囲に散布されにくいため、今回の高率のクリ花粉は畑のすぐ近くにクリが生育していた状況を示していると考えられる。クリ属とともに高率で産出するコナラ属コナラ亜属は二次林を構成する分類群として知られており、試料を採取した畑周辺はコナラやクリなどからなる二次林に覆われていたと考えられる。草本花粉では、イネ科やカラマツソウ属、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科などの産出が見られ、畑周辺にこれらの分類群が生育していたと思われる。ただし、産出花粉胞子に対する草本花粉の産出割合が少ないため、畑周辺には二次林が広がり、草本類はそれほど繁茂していかったと思われる。畑周辺にはクマシデ属－アサダ属やカバノキ属、ニレ属－ケヤキ属などの落葉広葉樹林も分布しており、遺跡周辺の低地の一部にはハンノキ湿地林も存在していたと考えられる。

ところで、近隣の町遺跡や東宮遺跡では天明３年（1783）の泥流により埋没した畑跡における花粉分析の報告がいくつかあり、これらの分析ではマツ属複維管束亜属やイネ科の産出が際立つという結果が得られている（例えば上中（2012）など）。これらの結果と比べると、今回はマツ属複維管束亜属やイネ科は少量しか産出しておらず、花粉組成が大きく異なる。遺跡周辺に広がる植生（主に二次林）は、人の関与の度合の違い等で場所によって構成種が異なっていた可能性が考えられる。

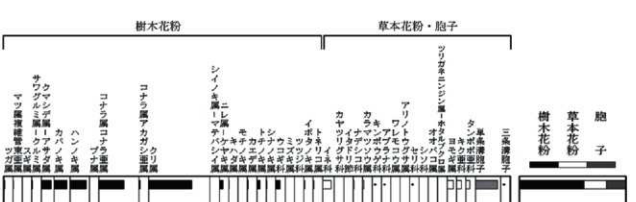
引用文献

上中央子（2012）東宮遺跡 24 号畑遺構における花粉分析．群馬県埋蔵文化財調査事業団編「東宮遺跡（2）」：472-474．群馬県埋蔵文化財調査事業団．

吉川昌伸（2011）クリ花粉の散布と三内丸山遺跡周辺における縄文時代のクリ林の分布状況．植生史研究，18，65-76．

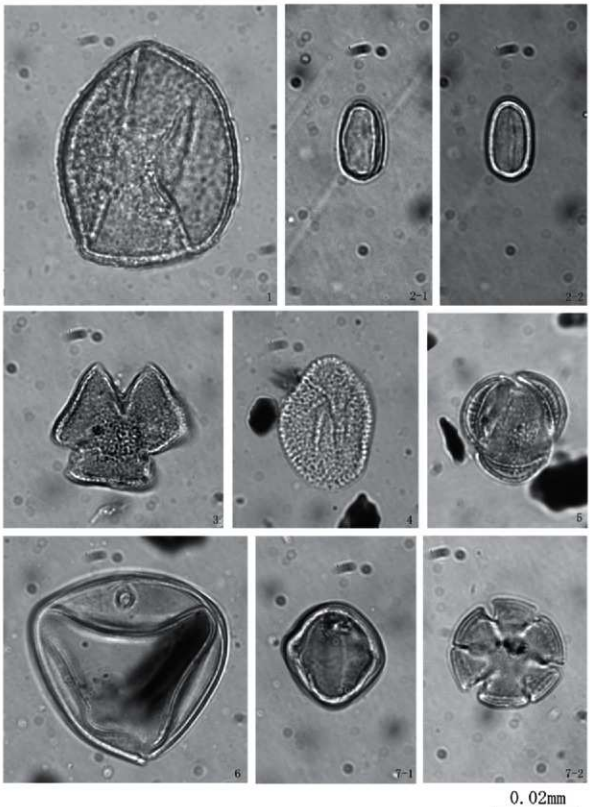
第 23 表　産出花粉胞子一覧

学名	和名	No.1	No.2	No.3
樹木				
Tsuga	ツガ属	2	−	2
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	1	2	1
Cryptomeria	スギ属	−	2	2
Pterocarya − *Juglans*	サワグルミ属−クルミ属	1	−	3
Carpinus − *Ostrya*	クマシデ属−アサダ属	16	14	16
Betula	カバノキ属	20	12	17
Alnus	ハンノキ属	26	12	10
Fagus	ブナ属	−	−	2
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	40	47	60
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	2	1	2
Castanea	クリ属	69	94	62
Castanopsis − *Pasania*	シイノキ属−マテバシイ属	−	2	1
Ulmus − *Zelkova*	ニレ属−ケヤキ属	6	3	6
Phellodendron	キハダ属	1	−	−
Ilex	モチノキ属	−	2	1
Acer	カエデ属	1	5	5
Aesculus	トチノキ属	5	1	2
Tilia	シナノキ属	1	−	3
Araliaceae	ウコギ科	7	2	4
Comus	ミズキ属	−	−	1
Ericaceae	ツツジ科	−	−	1
Ligustrum	イボタノキ属	1	−	−
Viburnum	トネリコ属	1	2	1
草本				
Gramineae	イネ科	23	14	9
Cyperaceae	カヤツリグサ科	−	1	−
Polygonum sect. *Reynoutria*	イタドリ節	−	−	1
Canyophyllaceae	ナデシコ科	2	−	−
Thalictrum	カラマツソウ属	3	7	3
Ranunculaceae	キンポウゲ科	1	−	1
Brassicaceae	アブラナ科	1	−	−
Sanguisorba	ワレモコウ属	−	−	1
Haloragis	アリノトウグサ属	−	2	−
Apiaceae	セリ科	1	−	2
Labiatae	シソ科	−	1	−
Plantago	オオバコ属	−	1	−
Adenophora − *Campanula*	ツリガネニンジン属−ホタルブクロ属	−	1	−
Artemisia	ヨモギ属	16	5	14
Tubuliflorae	キク亜科	13	11	12
Liguliflorae	タンポポ亜科	10	11	6
シダ植物				
monolete type spore	単条溝胞子	59	44	55
trilete type spore	三条溝胞子	1	3	6
Arboreal pollen	樹木花粉	200	201	202
Nonarboreal pollen	草本花粉	70	54	49
Spores	シダ植物胞子	60	47	61
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	330	302	312
unknown	不明花粉	9	1	3



樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基数として百分率で算出した。

第 81 図　嶋木Ⅰ遺跡における花粉分布図



1. コナラ属コナラ亜属（PLC. 1492）　2. クリ属（PLC. 1493）　3. ウコギ科（PLC. 1494）
4. トネリコ属（PLC. 1495）　5. ヨモギ属（PLC. 1496）　6. イネ科（PLC. 1497）
7. ワレモコウ属（PLC. 1498）

第 82 図　嶋木 I 遺跡（分析 No.2）から産出した花粉化石

第２節　嶋木Ⅰ遺跡の畑跡出土作物遺存体のプラント・オパール分析

米田恭子（パレオ・ラボ）

１．はじめに

嶋木Ⅰ遺跡で検出された畑跡から、作物遺存体が取り上げられた。ここでは作物存遺体の母植物を検討する目的でプラント・オパール分析を行った。以下に、分析結果と考察を記す。なお、同試料を用いて花粉分析と大型植物遺体分析も行われている（各分析の項参照）。

２．試料と方法

試料は、天明泥流下の畑跡（４次調査 3-5 号畑）から取り上げられた２点（分析 No.1（中央）と No.2（南））と、畑跡（５次調査 3-14 号畑）から取り上げられた１点（分析 No.3）の計３点の作物遺存体である。畑跡は天明３年（1783）の浅間山の噴火に伴う泥流の逆流で埋没した。

試料を実体顕微鏡で観察したところ、分析 No.1 には葉脈とみられる条痕が３条ほど観察されたものの、植物遺体の形態は不明瞭であった。分析 No.2 には、単子葉植物の葉身に見られる平行脈の圧痕が観察された。植物圧痕の残存長は 4.5cm、残存幅は 1.8cm、平行脈は８本であった。分析 No.3 には葉脈とみられる条痕が３本ほど確認できたが、残存状態が悪く、形態は不明瞭であった。

試料に植物遺体そのものが付着していなかったため、植物圧痕を含む耕作土を採取し、下記の手順に従ってプラント・オパールの抽出を試みた。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約 1g（秤量）をトールビーカーにとり、約 0.02g のガラスビーズ（直径約 0.04mm）を加える。これに 30％の過酸化水素水を約 20 ～ 30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーを用いて試料を分散させ、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体を中心としたプラント・オパールについて、ガラスビーズが 300 個に達するまで行った。

３．結　果

観察されたプラント・オパール個数を第 24 表に、分布図を第 84 図に示した。

第 24 表　試料１g あたりのプラント・オパール個数

分析 No.	遺跡名	調査	試料名	遺構名	採取位置	機動細胞珪酸体				不明植物珪酸体
						イネ	ササ属型	キビ族	ウシクサ族	棒状型
1	嶋木Ⅰ遺跡	4次	作物遺存体	3-5号畑	中央	0	8,000	3,000	2,000	2,000
2					南	0	7,600	1,100	2,200	2,200
3		5次		3-14号畑	－	1,200	2,400	1,200	0	0

分析 No.1（3-5 号畑：中央）

ササ属型の機動細胞珪酸体が 8,000 個検出された。キビ族の機動細胞珪酸体が 3,000 個、ウシクサ族の機動細胞珪酸体が 2,000 個得られた。このほかに、棒状型の不明植物珪酸体が観察された。なお、棒状型の不明植物珪酸体は、すべてのイネ科植物に類似した形態の植物珪酸体が出現するため（近藤，2010）、由来した分類群の同定は不可能である。

分析 No.2（3-5 号畑：南）

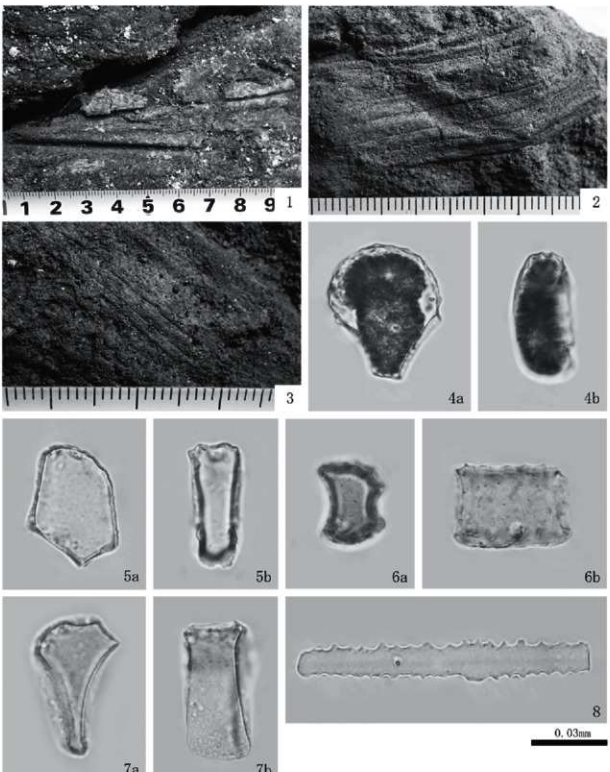
ササ属型の機動細胞珪酸体が 7,600 個検出された。ウシクサ族の機動細胞珪酸体が 2,200 個、キビ族の機動細胞珪酸体が 1,100 個得られた。このほかに、棒状型の不明植物珪酸体が観察された。

分析 No.3（3-14 号畑）

ササ属型の機動細胞珪酸体が 2,400 個検出された。イネとキビ族の機動細胞珪酸体が各 1,200 個観察された。

４．考　察

嶋木Ⅰ遺跡の畑跡から取り上げられた作物遺存体を観察した結果、いずれの試料も植物自体は残存しておらず、圧痕のみ



1．作物遺存体（分析No.1）、2．作物遺存体（分析No.2）、3．作物遺存体（分析No.3）、4．イネ機動細胞珪酸体（分析No.3）、5．ササ属型機動細胞珪酸体（分析No.2）、6．キビ族機動細胞珪酸体（分析No.1）、7．ウシクサ族機動細胞珪酸体（分析No.2）、8．棒状型不明植物珪酸体（分析No.2）
a：断面、b：側面

第83図　嶋木Ⅰ遺跡の畑跡出土作物遺存体のプラント・オパール

第 84 図　嶋木Ⅰ遺跡の畑跡出土作物遺存体のプラント・オパール分布図

が残されていた。この要因としては、泥流により畑で栽培された植物が熱を受けた可能性が考えられる。

一方、作物遺存体３点についてプラント・オパール分析を行った結果を、遺構ごとにみていく。

3-5 号畑の分析 No.1 と No.2 の耕作土は、採取位置は異なるものの、いずれもササ属型が多く、キビ属とウシクサ族を伴っており、プラント・オパールの検出傾向は類似していた。分析試料には植物遺体そのものは残存していなかったため、検出されたプラント・オパールが、圧痕として残された作物遺存体の母植物に由来するかは不明である。ただし、キビ族にはエノコログサやスズメノヒエ、イヌビエなどの雑草類のほかに、アワやキビなどの栽培種が含まれるため、3-5 号畑で栽培された作物に由来する可能性があると考えられる。一方、ササ属型のササ類（スズタケやミヤコザサなど）とウシクサ族（ススキやチガヤなど）については、畑の周辺に生育していたと思われる。

3-14 号畑の分析 No.3 の耕作土からは、イネとササ属型、キビ族のプラント・オパールが得られた。分析 No.1 と No.2 と同様、植物遺体そのものは残存していなかったため、検出されたプラント・オパールが作物遺存体の母植物に由来するかは不明である。ただし、イネとアワやキビなどのキビ族の一部は栽培植物であるため、畑で栽培された作物の候補と考えられる。また、これらの植物が畑に鋤き込むなど、栽培以外の目的で利用された可能性もあると思われる。

引用文献

近藤錬三（2010）プラント・オパール図譜．167p．北海道大学出版会．

第３節　嶋木Ⅰ遺跡の畑跡出土の大型植物遺体

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

１．はじめに

嶋木Ⅰ遺跡の天明泥流下の畑跡から検出された作物遺存体と共に採取された土壌中の大型植物遺体の同定を行い、当時利用された種実や周辺の植生について検討した。なお、同試料を用いて花粉分析と植物珪酸体分析も行われている（各分析の項参照）。

２．試料と方法

試料は、作物遺存体と共に採取された耕作土で、4 次調査 3-5 号畑（中央と南）、5 次調査 3-14 号畑の３地点で回収された３点（分析 No.1,2,3）である。耕作土の層相については花粉分析の項を参照されたい。畑跡は天明３年（1783）の浅間山の噴火に伴う泥流の逆流で埋没した。調査の結果、１番サク・２番サクの終了後に軽石の降下があったと推定されている。

土壌試料は、はじめに 300cc を最小 0.5mm 目の篩を用いて水洗したが、大型植物遺体が少なかったため、全量を水洗した。大型植物遺体の抽出・同定・計数は拡大鏡および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても１個体とみなせるものは完形として数え、１個体に満たないものは破片とした。同定された試料は、長野原町教育委員会に保管されている。

3．結　果

同定した結果、草本植物のアカザ属種子が得られた（第 25 表）。このほかに、科以上に識別可能な識別点をもたない一群を同定不能炭化種実とした。大型植物遺体以外には子嚢菌が得られたが、同定の対象外とした。

以下、大型植物遺体の産出傾向を試料ごとに記載する。

3-5 号畑中央：同定可能な種実は得られなかった。

3-5 号畑南：同定不能炭化種実の破片が 1 点得られた。

3-14 号畑：アカザ属が破片を含めて 3 点得られた。

次に、大型植物遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

第 25 表　嶋木Ⅰ遺跡から出土した大型植物遺体調査（括弧内は破片数）

	調査	4次		5次
	遺構名	3-5号畑		3-14号畑
	位置	中央	南	—
	試料名	作物遺存体		作物遺存体
分類群	水洗量（cc）	300	1700	1900
アカザ属	種子			1(2)
同定不能	炭化種実		(1)	
子嚢菌	炭化子嚢		14(2)	25(2)

（1）アカザ属　*Chenopodium spp.*　種子　アカザ科

黒褐色で、上面観はやや扁平、側面観は円形。種皮は強い光沢があり、硬い。着点の一端がやや突起し、中心部方向にむかって浅い溝がある。長さ 1.0mm、幅 1.1mm。

（2）子嚢菌　*Ascomycotina*　炭化子嚢

球形で、表面には微細な網目状隆線がある。長さ 0.8mm、幅 0.9mm。

4．考　察

畑跡の土壌を水洗した結果、3-14 号畑でアカザ属の種子がわずかに得られた。通常畑を構成する土壌は陸成土壌のため生の大型植物遺体は残存しないが、泥流で埋没し、より低湿地側に位置している場合には、生の植物遺体が良好に残存することがある（例えば、東宮遺跡（佐々木・バンダリ，2012）など）。畑の位置は標高が高く、生の植物遺体の遺存状況が悪かったと考えられる。

調査の所見から、3-14 号畑は 1 番サク・2 番サクの終了後に軽石の降下があった畑と考えられている。アカザ属は荒れ地や畑地、道端に多く生育する一年草で、アカザやシロザなどがある。ホウレンソウの近縁であるアカザの葉は、茹でると食用可能である。今後、水洗量を増やして解析すれば、当時の畑の作物や畑作雑草についての情報が得られると期待される。

引用文献

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（2012）東宮遺跡から出土した大型植物遺体．群馬県埋蔵文化財調査事業団編「東宮遺跡（2）－遺物編－」：437-461，巻頭図版．群馬県埋蔵文化財調査事業団．

スケール　1，2：1mm

1．アカザ属種子（3-14畑）、2．子嚢菌炭化子嚢（3-5畑南）

第 85 図　嶋木Ⅰ遺跡から出土した大型植物遺体

写　真　図　版

1．嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ（北西から）

2．1号トレンチ（南東から）

3．1号トレンチ土層（西から）

4．1号トレンチ畝サク検出状況（南から）

5．1号トレンチ埋戻し状況（南東から）

1．2号トレンチ（南東から）

2．2号トレンチ土層（西から）

3．2号トレンチ畝サク検出状況（南から）

4．2号トレンチ埋戻し状況（北西から）

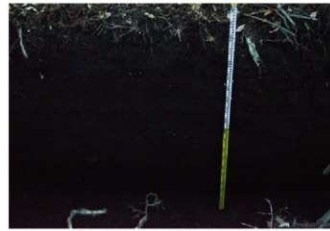
5．長野原城跡Ⅱ1号トレンチ（北から）

1．1号トレンチ土層（東から）

2．2号トレンチ（北から）

3．2号トレンチ土層（東から）

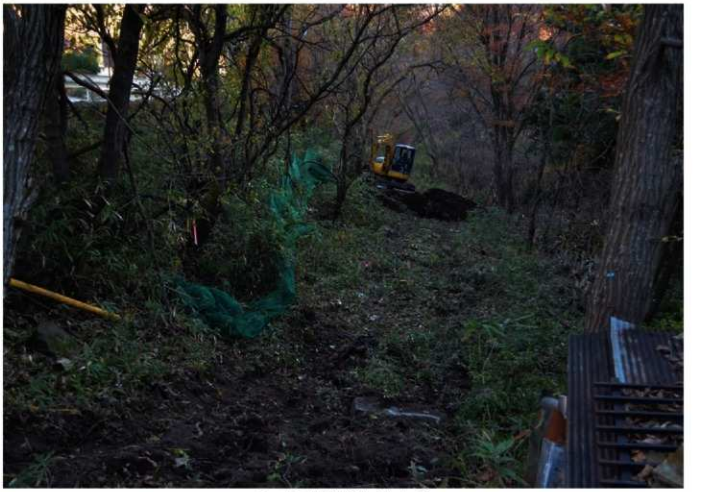
4．3号トレンチ（北から）



5．3号トレンチ土層（東から）

6．4号トレンチ（西から）

7．4号トレンチ土層（南から）



1．東貝瀬Ⅲ遺跡（北から）

2．1号トレンチ（北西から）

3．1号トレンチ土層（南西から）

4．2号トレンチ（南東から）

5．2号トレンチ土層（南西から）

1．嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ①（北東から）

2．調査区南側（北から）

3．調査区北側（南から）

4．1号トレンチ（南東から）

5．1号トレンチ土層1（北東から）

1．1号トレンチ土層2（北西から）

2．2号トレンチ（南西から）

3．2号トレンチ土層（南東から）

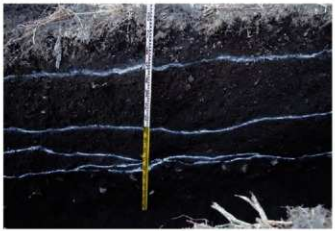
4．3号トレンチ土層（南西から）

5．4号トレンチ（北東から）

6．4号トレンチ土層（北東から）

7．5号トレンチ（南東から）

8．5号トレンチ土層1（北東から）


1．5号トレンチ土層２（北東から）

2．5号トレンチ土層３（北東から）

3．6号トレンチ（南東から）

4．6号トレンチ土層（南西から）

5．7号トレンチ（南東から）

6．7号トレンチ土層（南西から）

7．8号トレンチ（南東から）

8．8号トレンチ土層（南西から）

1．9号トレンチ（南東から）

2．9号トレンチ土層（南東から）

3．嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ②（北から）

4．10号トレンチ（東から）

5．10号トレンチ土層（東から）

1．11 号トレンチ（北東から）

2．11 号トレンチ土層（北西から）

3．嶋木Ⅰ遺跡Ⅳ③＜12・13 号トレンチ＞（南西から）

4．12 号トレンチ（南東から）

5．12 号トレンチ土層 1（南西から）

1．12号トレンチ土層２＜泥流天端＞（南西から）

2．12号トレンチ土層３（南西から）

3．13号トレンチ（南東から）

4．13号トレンチ土層（南西から）

5．14・15号トレンチ（南西から）

6．14号トレンチ（南東から）

7．14号トレンチ土層（南西から）

8．15号トレンチ（南東から）

1．15号トレンチ土層（北東から）

2．調査風景（西から）

3．東貝瀬Ⅲ遺跡Ⅱ＜1・2号トレンチ近景＞（南東から）

4．3号トレンチ近景（北から）

5．1号トレンチ（南東から）

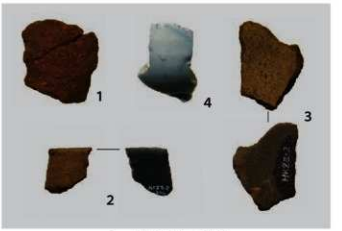
1．1号トレンチ土層（南東から）

2．2号トレンチ（南東から）

3．2号トレンチ土層（南西から）

4．3号トレンチ（北西から）

5．3号トレンチ土層（北西から）



6．出土遺物（1/2）

7．東貝瀬Ⅲ遺跡出土遺物（1/2）

1．嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ＜1・2号トレンチ＞（北東から）

2．嶋木Ⅰ遺跡Ⅴ＜3・4号トレンチ＞（南から）

1．1号トレンチ（北東から）

2．1号トレンチ土層（北東から）

3．2号トレンチ（南東から）

4．2号トレンチ土層（北東から）

5．3号トレンチ（南東から）

6．3号トレンチ土層（北東から）

7．4号トレンチ（東から）

8．4号トレンチ土層（北から）

1．嶋木Ⅱ遺跡＜1・2号トレンチ＞（南から）

2．嶋木Ⅱ遺跡＜3・4号トレンチ＞（北から）

1．1号トレンチ（南から）

2．2号トレンチ（南から）

3．3号トレンチ（南から）

4．4号トレンチ（北から）

5．4号トレンチ土層（北から）

6．測量風景（南から）

7．調査地点から長野原城方面を望む

8．調査地点から対岸（王城山方面）を望む

1．嶋木地区岩陰地形（北東から）

2．調査前風景（南東から）

3．堆積土層全景（東から）

4．堆積土層近景（東から）

5．岩陰部（北から）

1．調査区全景（南西から）

2．調査区近景（南東から）

1．1-2 号畑サブトレ①（南から）

2．1-2 号畑サブトレ②（南西から）

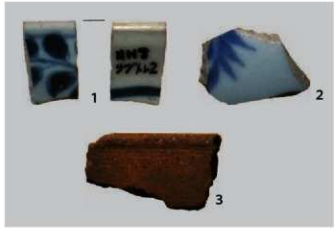
3．遺物出土状況＜第 27 図 2＞

4．1-2 号畑株痕検出状況（南東から）

5．泥流によるキズ痕①（南東から）

6．泥流によるキズ痕②（南東から）

7．作業風景（南東から）



8．出土遺物（1/1）

1．調査区南側全景①（南西から）

2．調査区南側全景②（北東から）

1．調査区北側全景①（南東から）

2．調査区北側全景②（北西から）

1．1-1 号畑サブトレ①＜ａａ′＞（北西から）

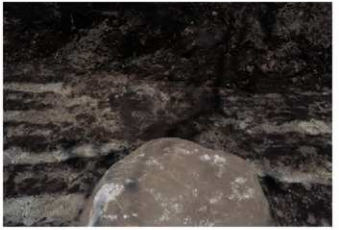
2．1-1 号畑サブトレ②＜ｂｂ′＞（南東から）

3．1-1 号平坦面＜検出状況＞（南西から）

4．1-1 号平坦面＜軽石除去＞（南西から）

5．1-1 号畑株痕検出状況（南西から）

6．1-2 号畑サブトレ＜ｃｃ′＞（南東から）


7．1-2 号平坦面（南西から）

8．1-3 号畑泥流・砂堆積状況＜ｄｄ′＞（北西から）

1．1-3 号平坦面（南西から）

2．1-3 号畑作物遺存体・株痕検出状況（南西から）

3．1-3 号畑作物遺存体①

4．1-3 号畑作物遺存体②

5．調査区南側トレンチ（北西から）

6．調査区南側トレンチ土層（南西から）

7．調査区北側トレンチ（南東から）

8．調査区北側トレンチ土層（南西から）

1．調査区遠景①（東上から）

2．調査区遠景②（南上から）

1．調査区全景（南真上から）

１．１区全景＜ガーター橋・石積・天明泥流・1-1・1-2 号畑＞（東から）

２．石積全景（南から）

1．1区からガーター橋を望む

2．石積立面①（東から）

3．石積立面②（東から）

4．石積立面③（東から）

5．石積立面④（東から）

6．石積立面⑤（東から）

7．石積遺物出土状況①＜第40図1＞

8．石積遺物出土状況②＜第40図2＞

１．1-1・1-2 号畑（南から）

２．1-1 号畑サブトレ＜ａａ′＞（北西から）

３．1-1 号平坦面（南西から）

４．1-2 号畑サブトレ＜ｂｂ′＞（東から）

５．1-2 号平坦面（南から）

1．２区全景＜ 1-2・1-3 号畑＞（南東から）

2．1-2 号畑（南から）

3．1-2 号畑サブトレ＜ｃｃ’＞（東から）

4．1-3 号畑（南から）

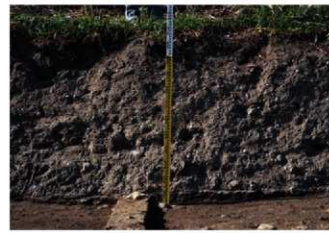
5．1-3 号畑サブトレ＜ｄｄ’＞（北西から）

１．３区全景（西から）

２．１号建物跡（南から）

1．1号建物跡検出状況（南から）

2．1号建物跡掘り方（南から）



3．1号建物跡東西セクション（南から）

4．1号建物跡南北セクション①（西から）

5．1号建物跡南北セクション②（南西から）

1．1号建物跡石垣（南から）

2．1号建物跡P1（南から）

3．2-1号畑サブトレ①＜ｆｆ′＞（東から）

4．2-1号畑サブトレ②＜ｇｇ′＞（東から）

5．2-2号畑サブトレ①＜ｈｈ′＞（東から）

6．2-2号畑サブトレ②＜ｉｉ′＞（東から）

7．2-2号平坦面＜検出状況＞（南から）

8．2-2号平坦面＜軽石除去＞（南から）

1．2-3 号畑サブトレ＜ｊｊ′＞（東から）

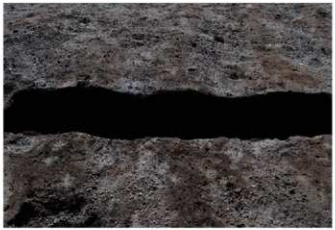
2．2-3 号平坦面＜検出状況＞（南から）

3．2-3 号平坦面＜軽石除去＞（南から）

4．2-4 号畑サブトレ＜ｋｋ′＞（南から）

5．2-4 号旧平坦面＜検出状況＞（南から）

6．2-4 号旧平坦面＜軽石除去＞（南から）


7．2-5 号畑サブトレ＜ｌｌ′＞（東から）

8．2-5 号平坦面＜軽石除去＞（南から）

1．2-6号畑サブトレ<mm′>（東から）

2．2-7号畑サブトレ<nn′>（東から）

3．2-7号平坦面（南から）

4．遺物出土状況①<第49図1>

5．遺物出土状況②<第49図5>

6．遺物出土状況③<第49図7>

7．遺物出土状況④<第49図8>

8．遺物出土状況⑤<第49図18>

1．嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ出土遺物①

2．嶋木Ⅰ遺跡Ⅲ出土遺物②

１．１区全景①（北東から）

２．１区全景②（南西から）

1．3-1号畑サブトレ＜aa'＞（南西から）

2．3-2号畑サブトレ＜bb'＞（南西から）

3．3-2号平坦面＜検出状況＞（南東から）

4．3-2号平坦面＜泥流除去＞（南東から）

5．3-2号平坦面＜軽石除去＞（南東から）

6．3-3号畑サブトレ＜cc'＞（南西から）

7．3-4号畑サブトレ＜dd'＞（南西から）

8．3-4号畑株痕検出状況（南東から）

1．3-4 号平坦面＜検出状況＞（南東から）

2．3-4 平坦面＜泥流除去＞（南東から）

3．3-4 平坦面＜軽石除去＞（南東から）

4．泥流によるキズ痕（南東から）

5．遺物出土状況①

6．遺物出土状況②

7．基本土層（南から）

8．作業風景（南西から）

1．2～4区全景①（南西から）

1．２～４区全景②（北東から）

1．2区全景＜3-5号畑＞（南西から）

2．3-5号畑南側（南東から）

3．3-5号畑北側（南東から）

4．3-5号畑畝サク断面＜e e'＞（南西から）

5．3-5号平坦面＜検出状況＞（南東から）

1．3-5号平坦面＜軽石除去＞（南東から）

2．3-5号畑株痕検出状況（南東から）

3．遺物出土状況

4．2区3-6号畑南側（南東から）

5．3区全景＜3-6号畑＞（南東から）

1．3-6号畑北側（南東から）

2．3-6号畑サブトレ＜g g'＞（南西から）

3．3-6号畑株痕検出状況（南東から）

4．遺物出土状況

5．4区全景＜3-7号畑＞（南西から）

1．3-7 号畑北側（南東から）

2．3-7 号畑南側（東から）

3．3-7 号畑サブトレ＜ｈｈ′＞（南西から）

4．3-7 号平坦面（南西から）

5．3-7 号畑株痕（南西から）

6．作業風景（南西から）

7．測量風景（南西から）

8．出土遺物（1/2）

1．５区全景①（南西から）

2．５区全景②（北西から）

3．テラス上段サブトレ（西から）

4．１号道サブトレ（西から）

5．泥流立ち上がり（北から）

1．南側調査区全景①（南西から）

2．南側調査区全景②（北東から）

1．3-8・3-9号畑・1号ヤックラ・1号溝・2号溝（北東から）

2．3-8号畑・1号溝（北西から）

3．3-8号畑サブトレ＜a a′＞（北東から）

4．3-8号平坦面（南東から）

5．泥流天端1＜A A′＞（北東から）

1．3-9・3-10 号畑（南東から）

2．3-9 号畑サブトレ＜ｂｂ′＞（北東から）

3．3-10 号畑サブトレ＜ｃｃ′＞（北東から）

4．3-10 号平坦面（南東から）

5．3-10 号畑株痕検出状況（南東から）

１．２号溝（南から）

２．２号溝断面（東から）

３．泥流天端２（南東から）

４．泥流天端３・２号ヤックラ（南から）

５．旧平坦面１〈検出状況〉（南東から）

６．旧平坦面１〈軽石除去〉（南東から）

７．旧平坦面２（南東から）

1．3-9～3-12 号畑・１号・２号ヤックラ（南から）

2．3-11 号畑サブトレ＜ｄｄ′＞（南西から）

3．3-12 号畑サブトレ＜ｅｅ′＞（南西から）

4．3-11 号平坦面・２号ヤックラ（南東から）

5．3-12 号平坦面＜検出状況＞（南東から）

1．3-12号平坦面＜軽石除去＞（南東から）

2．3-12号畑株痕検出状況（南東から）

3．泥流天端3（南東から）

4．泥流天端4＜BB'＞（南西から）

5．旧平坦面3（南東から）

6．泥流によるキズ痕（南東から）

7．作業風景①（南東から）

8．作業風景②（南西から）

1．北側調査区全景①（南西から）

2．北側調査区全景②（北東から）

1．3-13・3-14号畑・3号ヤックラ（北東から）

2．3-13号畑サブトレ＜g g′＞（南西から）

3．3-14号畑サブトレ＜f f′＞（南西から）

4．3-14号平坦面（南東から）

5．3-14号畑株痕検出状況（南東から）

1．泥流によるキズ痕１（南東から）

2．泥流によるキズ痕１〈検出状況〉（南東から）

3．泥流によるキズ痕２（南東から）

4．泥流によるキズ痕２〈検出状況〉（南東から）

1．3-15・3-16号畑（南東から）

2．1・2号復旧溝・旧平坦面4（南東から）

3．2号復旧溝検出状況（南東から）

4．3-16号平坦面（南東から）

5．泥流天端5＜CC′＞（北東から）

1．3-17・3-18号畑・4号ヤックラ・4号溝（南から）

2．3-17号畑サブトレ＜h h'＞（南から）

3．3-18号畑平坦面（南東から）

4．3-17号畑株痕検出状況（東から）

5．3-17・3-18号畑・5号・6号復旧溝（西から）

1．４号ヤックラ・３号溝・４号溝・復旧溝調査風景（南から）

2．３号溝（南から）

3．４号溝（南から）

4．３号復旧溝（東から）

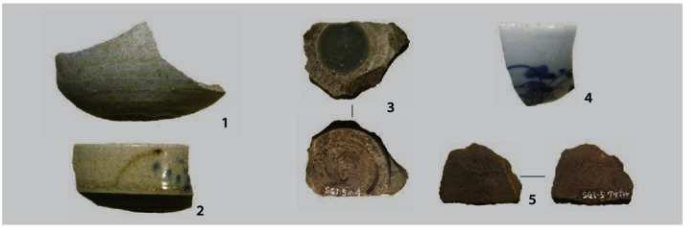
5．３号復旧溝堆積土層（西から）

1．４号復旧溝（東から）

2．５号復旧溝（東から）

3．６号復旧溝（東から）

4．作業風景（北から）



5．出土遺物（1/2）

報告書抄録

ふりがな	ながのはらちくいせきぐん に
書名	長野原地区遺跡群（2）
副書名	水源地域整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第3集
シリーズ名	長野原町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第37集
編著者名	富田孝彦
編集機関	長野原町教育委員会
所在地	〒377-1392　群馬県吾妻郡長野原町大字長野原1340-1　TEL　0279-82-4517
発行年月日	平成31年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	所在名	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 （世界測地系）	東経 （世界測地系）	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
ながのはらじょうあと 長野原城跡	群馬県吾妻郡長野原町大字長野原字嶋木255-1	10424	85	36°33′00″	141°01′18″	20121001 ～ 20121004	110	町道長野原線道路整備事業
ひがしかいせさんいせき 東貝瀬Ⅲ遺跡	群馬県吾妻郡長野原町大字長野原字東貝瀬883-3,883-4,883-5,896-3,896-7,898-3,898-8,899,900,901	10424	66	36°33′01″	138°38′42″	20130509 ～ 20130523	250	町道長野原線道路整備事業
しまがいちいせき 嶋木Ⅰ遺跡	群馬県吾妻郡長野原町大字長野原字嶋木256-1,257-2,258-1,259-7,263-1,263-2,263-3,263-4,264-1,264-6,264-7,264-8,279-2,279-7,280-6,281-3,282-2,283-4,284-4,285-1,285-2,287-2,337-2,	10424	72	36°32′39″ ～ 36°33′14″	138°40′03″ ～ 138°38′52″	20130408 ～ 20140807	2,685	町道長野原線道路整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
長野原城跡	城館、その他	近世江戸時代	畑跡	1枚	陶磁器・内耳土器	泥流の逆流被災

要約	
	本遺跡は、白砂川右岸の中位段丘面に立地する。天明3年（1783）の浅間山大爆発により発生した泥流に埋没した畑（単位畑）を1枚検出した。白砂川は吾妻川の支流で、泥流が北側へ逆流した際の被災状況を確認することができた。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
東貝瀬Ⅲ遺跡	散布地、その他	近世（江戸時代）	畑跡	3枚	陶磁器・作物遺体	泥流の逆流被災
			平坦面	3ヵ所		

要約	
	本遺跡は、白砂川左岸の中位段丘面に立地する。天明3年（1783）の浅間山大爆発により発生した泥流に埋没した畑（単位畑）を3枚検出した。白砂川は吾妻川の支流で、泥流が北側へ逆流した際の被災状況を確認することができた。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
嶋木Ⅰ遺跡	散布地、その他	近代 近世（江戸時代）	橋台石積	1基	陶磁器・内耳土器・鉄製品・銅製品・作物遺体	泥流の逆流被災 旧国鉄太子線ガーダー橋橋台石積を検出
			畑跡	28枚		
			平坦面	21ヵ所		
			ヤックラ	4ヵ所		
			溝状遺構	4条		
			復旧溝	6条		
			道路状遺構	1条		
			テラス	2段		

要約	
	本遺跡は、白砂川右岸の中位段丘面に立地する。天明3年（1783）の浅間山大爆発により発生した泥流に埋没した畑（単位畑）を28枚のほか、畑を構成する平坦面・ヤックラ・溝状遺構・復旧溝・道路状遺構などを検出した。白砂川は吾妻川の支流で、泥流が北側へ逆流した際の被災状況を確認することができた。また、戦時中に築造された旧国鉄太子線のガーダー橋橋台石積が検出され、泥流を掘削して築造されている状況を確認した。

長野原地区遺跡群（2）
――水源地域整備事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　第3集――
平成31年3月25日　印刷
平成31年3月28日　発行
発行　群馬県吾妻郡長野原町教育委員会
〒377-1392　群馬県吾妻郡長野原町大字長野原1340-1
TEL 0279（82）4517　FAX 0279（82）3115
印刷　朝日印刷工業株式会社